

第四章 學校令時代

第一節 學校令と教育勅語

學校令の公布と教育勅語の賜

〔學校令の公布と教育勅語の賜〕 明治十八年十二月、政府に於ては官制の大改革を行ひ、新に大臣を置いた。時の文部大臣森有禮は、平素抱懐せる理想に基づいて、教育制度の大刷新を企てた。同十九年三月以降帝國大學令を初め小學校令が公布せられ、其の他諸學校通則が公布せられて、學校教育制度の形を改めるに至つた。

殊に明治二十三年十月三十日の教育勅語の下賜は教育の基づくべき根據を明かにし、古今中外に悖らざる大道を明示されたものであつて、教育の根本方針がこゝに確立された。國民教育の方針に關する精神がこゝに於てその最高潮に達したのを見る事が出来る。

小學校令の種類

〔小學校令の大要〕 帝國大學校令・師範學校令・中學校令はさておき、小學校令について其の大要を見るに、小學校の種類として、小學校を分つて高等・尋常の二等とし、土地の情況に依つては、小學簡易科を設けて、尋常小學校に代用せしめるものとし、修業年限は尋常・高等の二等共各四ケ年、簡易科は土地の事情によつて三ケ年以内、この簡易科は一日二時間以上三時間以内の授業を行ひ、學科は讀書・作文・習字・算術とした。

學齡と義務教育

學級生徒數

學科課程

小學校兒童の學齡は六年より十四年に至る八ケ年とし、父母後見人は尋常小學校四ケ年を終る迄は學齡兒童として就學せしむる義務ありとし、疾病・家計困難等のために、兒童を就學せしむること能はずと認定したる者には、府知事・縣令が其の期限を定めて就學猶豫を許すこととした。又一學級生徒數についても規定を設け、尋常小學校一學級の生徒數は八十人以下とし、高等小學校は六十人以下と定めた。

小學校の學科課程に關しては、明治十九年五月明確な規程を作り、必ず是に基づかしむることとして、教育内容の統一を計つた。それに依ると尋常小學校の學科は修身・讀書・作文・習字・算術・體操とし、土地の狀況によつては圖畫・唱歌を加へることが出来、高等小學校の學科は修身・讀書・作文・習字・算術・地理・歴史・理科・圖畫・唱歌・體操・裁縫であつて、土地の狀況によつては、英語・農業・手工・商業を加へることが出来ることとなつた。各教科目に關しては夫々教授上の要旨が附加せられてゐる。尙ほ土地の狀況によつて、小學校に補習科を設け、六箇月以上、十二箇月以内（尋常小學校に於ては修業年限の外、高等小學校に於ては修業年限の内）兒童をして既習の學科を温習し、且之を補修せしむることを得るものとした。經費に關しては、第六條に「父母後見人等ハ小學校ノ經費ニ充ツル爲メ其兒童ノ授業料ヲ支辨スベキモノトス其金額ハ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル」とし、第八條に「授業料及寄附金等ヲ以テ小學校ノ經費ヲ辨ジ能ハザル場合ニ於テハ區町村會ノ議決ニ依リ區町村費ヨリ其不足ヲ補フコトヲ得」とし、また小學簡易科の經費は區町村費を以て、これを支辨すべき事を第十五條に規定した。

小學校令の改正

明治二十三年十月改正小學校令が公布され、主として明治二十三年四月より實施された市町村制に作つ

小學校の本旨及種類

た條項の改正が行はれたものである。その大要は次の様である。
〔小學校の本旨及種類〕 小學校の本旨は兒童身體の發達に留意して、道德教育及國民教育の基礎並生活に必須なる普通の智識技能を授くるにありとし、その小學校に尋常及高等の二つの小學校を認め、更に是等に市町村立小學校と私立小學校とを區別すること、及び徒弟學校、實業補習學校をも小學校の種類に編入した。

小學校の編制

〔小學校の編制〕 尋常小學校の教科目は修身・讀書・作文・習字・算術・體操で、土地の情況によつて體操は欠くことを得、又日本地理・日本歴史・國畫・唱歌・手工の一科目若くは數科目を加へ、女兒のためには裁縫を加へ得ることとした。高等小學校の教科目は修身・讀書・作文・習字・算術・日本地理・日本歴史・外國地理・理科・國畫・唱歌・體操で、女兒はこの外に裁縫が加はる。尤も土地の情況によつて外國地理・唱歌は欠くことが出来、又幾何の初步・外國語・農業・商業・手工の一科目乃至數科目を加へることが出来ることになつてゐる。又尋常小學校の教科を高等小學校の教科とを一校に併置し得る規定を設けてゐる。高等小學校に於ては土地の情況に因つて、専修科を置いて農科・商科・工科の科若くは數科の學習を可能ならしめ、これは正教科と併置し或は正教科に代用せしめ得る事とした。補習科は尋常小學校、高等小學校孰れに於ても之を設置することが出来、修業年限は尋常小學校が三箇年又は四箇年、高等小學校が二箇年三箇年、若しくは四箇年とした。小學校教則の大綱は文部大臣が定め、府縣知事はその大綱に基いて小學校教則を定めることになつてゐた。

就 學

〔就學〕 就學に就いて見るに兒童滿六歳から滿十四歳までの八箇年を學齡とし、學齡兒童の保護者は尋常小學校の教科を卒らない間は就學させねばならぬ義務を規定し、貧窮その他兒童疾病等の爲學齡兒童を就學せしむること能はざる場合は、保護者は市町村長に就學の猶豫又は免除を申請し、又學齡兒童をして市町村立小學校或は之に代る私立小學校に出席せしめずして家庭又は其の他で尋常小學校の教科を修得せしめんとする場合は、市町村長の許可を要した。

小學校の設置

〔小學校の設置〕 各市町村は、その市町村内に學齡兒童を就學せしめ得る尋常小學校を設置する事になつてゐる。その校數や位置は市の場合には府縣知事が其市の意見を聞き、町村の場合には郡長が其町村の意見を聞いて之を定める。郡長は一町村の資力が其町村に相當する尋常小學校を設置し得ずと認めた場合は、其町村をして尋常小學校設置のために他の町村と學校組合を設けしめ、更に其の校數並位置はその學校組合で決定することにした。

市町村は府縣知事の許可を得て高等小學校を設置し又は其區をしてこれを設置せしめることが出来、町村は數町村の協議に依て、郡長の許可の下に町村學校組合を設立して、府縣知事の認可を得て、高等小學校を設置することが出来る。

區域學校資格

〔區域學校資格〕 本縣に於ては明治十四年七月三十日改正教育令に隨つて、管内學區並びに小學校數を定め、二百三學區・六百七十七校・四十八分校とし、安八郡に於けるものは十六學區・四十八校で、大垣は第一學區・三校と定めた。

次いで明治十七年一月から翌十八年八月にかけて、學區並びに小學校數の大改正が數回行はれ、安八郡役所部内に於ては明治十八年六月二十三日に一學區の増置を行ひ、十七學區と改めた。

明治十九年學校令の發布により、本縣に於ては小學校令の示す所に據つて、同年九月二十五日管内小學校の位置、設置區域及び學校資格を規定して布達した。

第二節 興文高等小學校・興文尋常小學校

大垣の學

前記布達により、大垣に於ては安八郡役所部内に屬して、第一學區内に二校、第二學區内に一校を設ける事となつた。興文校は其の第一學區に當てられたのであつた。

興文學校

興文學校に於ては學校令の發布によつて、次の様な變遷を重ねた。

即ち從來の外側町にあつた興文第一校には高等科・簡易科の二科が設置せられ、校名は興文高等小學校に、又郭町にあつた興文第二校には尋常科のみ設けられて、名を興文尋常小學校と改めるに至つた。

興文高等小學校

〔興文高等小學校〕 明治十九年十二月以前の調査によつて興文高等小學校を見るに、次の様であつた。

一、經費

町費	二千八百廿一圓五十五錢九厘
有志寄附金	二十八圓八十五錢
雜納金	三十五圓五十四錢一厘
計	二千八百八十五圓九十五錢
仕拂金	二千七百四十四圓四十一錢一厘

一、教場數 十一教場

- 一、校 下 郭・袋・外側・栗屋・旗・田口・桐ヶ崎・弓・室・宮・鳥見・鳩部屋・番組・牛屋・西長・鷹匠・馬場・新馬場・西代官・切石・西船・東船・西水主・東水主・西田・田・田町堤通・西今岡・東今岡・俵・竹嶋・新地・東代官・東長・清水・高橋・步行

計 三十七ヶ町

一、戸數 千八百八十八戸

一、人口 七千〇六十人

一、調 導 川村斧之助(二十四年) 多代寅三郎(二十七年) 山村鍋吉(十九年六月)

荒川重時(二十七年十月) 戸澤新介(三十年五月) 多賀爲次郎(二十三年)

一、補助員 澤才之助(二十一年九月) 奥田勇吉(十六年四月) 村田才次郎(二十年二月)

第二編 明治維新後の本校

山田 琢藏(三十年八月) 岩田 澁(十七年七月)

一、學齡兒童

就學 二百七十一人 男 二百二十二 女 四十九人
 不就學 四十九人 男 二十一 女 二十八人

明治十九年十二月末調査による興文高等小學校は次の通りである。

一、教場數	九
一、一日授業時間	五時
一、年中授業日數	二百五十二日
一、學校長	石原欽造
一、學齡在籍生徒	男 二百二十五 女 五十五
一、六歳以下生徒	男 五 女 二
一、十四歳以上生徒	男 十二 女 無し
一、在籍生徒合計	男 二百四十二 女 五十七
一、在學年數	四年 男 八十六 女 三十 五年 男 八十二 女 十五 六年 男 三十 女 六

明治二十年十二月調査による興文高等小學校は次の様である。

一、敷地坪數	一千一百七十九坪二合二勺
一、歳費金額	九百九拾圓四拾錢
一、授業料總額	八百八拾參圓五拾五錢
一、職員數	校長 一人 教員 男三人 授業生 男一人、女一人
一、校長	向出國太郎
一、生徒總數	男 二百十九人 女 五十九人
一年生	男 四十九 女 二十九
二年生	男 七十九 女 十九
三年生	男 六十五 女 十三
四年生	男 二十六 女 九
混習生	無し

明治二十一年調査による興文高等小學校

一、經費

納金	二千四百九十一圓九十三錢五厘
内譯 前年度より越高	九圓十二錢
有志寄附金	二十圓
雜納金	三十五圓八十八錢八厘
授業料	一千一百十九圓五十錢
町村補助費	一千二百二十九圓四十二錢七厘

第四章 學校令時代

第二編 明治維新後の本校

支出 一千三百十四圓七十六錢四厘

- 一、學科 修身・讀書・作文・英語・習字・算術・地理・歴史・理科・圖畫・裁縫・唱歌・體操
- 一、教員 學校長一人 教員男六人女二人 授業生男一人
- 一、生徒數 男 二百五十八人 女 五十八人

第一年生	男 百二十六	女 三十六	第二年生	男 七十二	女 十
第三年生	男 四十二	女 十	第四年生	男 十八	女 二
温習生	無し				

明治二十二年調査による興文高等小學校

- 一、歳費 壹千四百七拾貳圓八拾九錢
- 一、授業料總額 壹千六拾七圓八拾五錢
- 一、學科 二十一年度に同じ
- 一、教員 男 十一人 女 一人
- 一、首席調導 石川孫七郎
- 一、生徒數 男 三百十人 女 七十五人

第一年生	男 百十八	女 三十三
第二年生	男 百〇一	女 二十九

第三年生	男 六十一	女 四
第四年生	男 三十	女 九
温習生	無し	

明治二十三年調査による興文高等小學校

- 一、歳費 一千四百三十二圓四錢三厘
- 一、授業料總額 一千五百十二圓四十五錢
- 一、學科 前年度に同じ
- 一、教員 六人 雇 八人
- 一、生徒總數 男 二百八十六人 女 七十三人

第一年生	男 百九	女 三十九	第二年生	男 七十五	女 十四
第三年生	男 六十三	女 十八	第四年生	男 三十九	女 二
温習生	男女無し				

興文尋常小學校

〔興文尋常小學校〕 翻つて教育令時代の郭町の興文第二校は、學校令の布達によつて如何なる變遷を重ねていつたか。前述の如く校名は改められて興文尋常小學校となり、尋常科の生徒のみを收容する事になつた。今明治十九年十二月以前の調査を礎として、順次左にその大要を示すことにする。

第四章 學校令時代

一、教場 數 十七教場

一、校下、戸數、人口 興文高等小學校に同じ

一、調 導 萩野精一 (三十四年七月)

一、補助員 淺田實穂 (三十一年三月)

小原英治 (二十八年二月)

川瀬芳四 (十七年一月)

北島捨八郎 (三十一年十一月)

岡崎啓三郎 (十八年三月)

長谷川元磨 (二十一年)

日比兼三郎 (三十四年十月)

加納磨作 (二十一年五月)

鹽川藤太郎 (二十二年十月)

伴野銀太郎 (二十四年一月)

第本兵司 (十七年十月)

佐藤清太郎 (十九年八月)

安藤勝次郎 (十九年十月)

一、學齡兒童

就 學 五百四十人 男 三百二十六人 女 二百十四人

不 就 學 五十一人 男 二十二人 女 二十九人

明治十九年十二月末に於ける調査による興文尋常小學校の大要は左の通りである。

一、教場 數 十三教場

一、一日授業時數 五時

一、年中授業日數 二百六十日

一、學 校 長 水谷靜吉

一、學齡在籍生徒 男 二百八十一 女 二百五十一

一、六歳以下生徒 男 二 女 三

一、十四歳以上 無し

一、在籍生徒合計 男 二百八十三 女 二百五十四

一、在 學 年

一年未滿 男 三十 女 三十七 一 年 男 九十七 女 八十七

二 年 男 七十 女 六十二 三 年 男 八十四 女 六十五

明治二十年調査による興文尋常小學校

一、敷地坪數 一千一百四十六坪二合六勺

一、歳費金額 七百十四圓六十九錢

一、授業料總額 六百五十八圓五十三錢 最高 十五錢 最寡 八錢

一、學 科 修身・讀書・作文・習字・算術・體操・唱歌

一、職 員 數 校長一人 教員 男一人・女二人 授業生 男四人

一、校 長 水谷靜吉

一、生 徒 數 男 二百十 女 百七十八

一年生 男 八 女 五 二年生 男 四十四 女 四十九

三年生 男 九十六 女 六十七 四年生 男 六十二 女 五十七

明治二十一年調査による興文尋常小學校

- 一、歳費 六百壹圓六拾參錢
- 一、授業料總額 四百七拾五圓八錢
- 一、學科 尋常小學科
- 一、職員數 校長一人 教員男四人・女無し 授業生男四人・女一人
- 一、校長 勅使河原 溥
- 一、生徒數 男 三百八十八 女 二百八十八

第一年生	男 百三十五	女 百十五	第二年生	男 六十五	女 五十二
第三年生	男 百十七	女 六十八	第四年生	男 七十一	女 五十二

明治二十二年調査による興文尋常小學校

- 一、歳費 九百拾貳圓六拾九錢壹厘
- 一、授業料總額 八百貳圓七拾七錢五厘
- 一、學科 尋常小學科
- 一、教員 男 四人 授業生 五人
- 一、學校長 無し 首座教員 安井 千吉
- 一、生徒數 男 四百二十三 女 三百四十四

第一年生	男 一百一	女 一百二十二	第二年生	男 一百二十七	女 九十九
------	-------	---------	------	---------	-------

第三年生	男 八十二	女 六十一	第四年生	男 百十三	女 六十二
------	-------	-------	------	-------	-------

明治二十三年調査による興文尋常小學校

- 一、敷地坪數 一千一百四十六坪二合五勺
- 一、歳費 壹千拾參圓七拾參錢
- 一、授業料總額 八百八圓六拾八錢 但し最多額貳拾錢・最寡額八錢
- 一、學科 修身・讀書・作文・算術・習字・圖畫・唱歌・體操
- 一、職員 學校長無し 教員 男六人 授業生 男六人
- 一、生徒總數 男 三百二十九 女 三百〇八

第一年生	男 八十四	女 七十三	第二年生	男 八十	女 百二
第三年生	男 百八	女 九十九	第四年生	男 五十七	女 四十三

以上興文兩小學校に於ける明治十九年以降二十三年に至る概要を示した。

學科課程

〔學科課程〕 更に此等小學校は如何なる學科課程に依て教育せられたかは、本縣が明治十九

年八月に布達した學科課程によつて、本校に於ける學科・教授・時數・學科課程を略察知する

ことが出来ると思ふ。左にこれを纏めて提示して置く。

尋常小學校

算術	九時	算術ノ計方 實物ノ加減乗除 珠算暗加法減法	珠算 暗乘法減法	珠算 暗量算	四則雜算 貨幣
----	----	-----------------------------	-------------	-----------	------------

特別學科

〔特別學科の加設〕 興文校に於ては夙に外國語の必要を知つて、高等科生徒に普通學科の外に特別學科として英語を教授し、特に明治二十一年・明治二十二年の兩年に亘つて、初め英人チャツベル、ついで同氏の辭職によつて、チャールズ・バートン・ステツドマンを招聘し、月俸百圓を給して外國語を教授せしめた事は小學校として全國的に異數の事であつた。

教科用書

〔教科用書〕 當時本校に於ては如何なる教科用書を使用したか、之を審にする事は稍困難ではあるが、明治十九年九月廿五日に布達せられた縣令によつて、その大體を知ることが出来るが、其の縣令も後屢々改變せられて居る事を忘れてならぬ。左にこれを掲げて置く。

高等小學校用圖書配當表

學科	第一	第二	第三	第四
修身	小學修身書五冊 木口、鱗 幼學綱要 宮内省 改正女訓一冊 萩原裕	同上 同上	同上 同上	同上 同上
讀書	小學讀本中等科第一冊 内田嘉一 同第四冊 榑原芳野 那河通高 稻垣千穎	同上 同上	同上 同上	同上 同上

作文	習字	算術	地理	歴史	理科
課程表ニヨリ適宜ノ題ヲ撰ム可シ 中小學習字帖 四年後期一冊 新撰習字帖 六級一冊 菱、潭 太田 謹 村田浩藏	數學三千題 尾關 正求 筆算摘要 神津道太郎	改竄阜縣地誌略 二冊 太田 謹 正萬國地誌略 三冊 小澤圭二郎	日本略史 一冊 笠間益三 同 上 一冊 木村正辭 同 上 一冊 川島梅坪	初學須知 六冊 由中耕三 物理楷梯 三冊 片山諒吉 百科全書 地文學 一冊 關藤成緒 初學人身窮理 二冊 松山棟庵 小學化學書 三冊 市川盛二郎	同上 同上 同上 同上 同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上
同上	同上	同上	同上	同上	同上

博物圖	同上	同上	同上
植物 一ヨリ五マデ 小野職慈	同上	同上	同上
動物 一ヨリ五マデ 田中芳男	同上	同上	同上
圖書 初歩 平瀬作五郎	同上	同上	同上

○印ハ口授用ニシテ△ハ代用書ナリ

尋常小學校科用圖書配當表

學科	修身	讀書	作文	習字
第一年	小學修身書 一冊 木戸麟	小學指教圖 六マデ 文部省 短句 連語 十葉 太田謹 用 連語 十葉 太田謹 連語 圖 五枚 文部省	課程表ニヨリ適宜ノ題ヲ撰ム可シ	初小學習字帖 一年前期 二冊 卷 菱潭
第二年	同上 一二冊	小學讀本 一冊 田中義廉 同 一冊 榑原芳野 同 一冊 原亮策	同上	同上 二年前期 二冊
第三年	同上 一三冊	同 同上 一三冊 同 一冊 榑原芳野 同 一冊 稻垣千穎	同上	同上 二年後期 二冊
第四年	同上 一四冊	同 同上 一三冊 同 同上 一三冊 同 同上 一三冊	同上	同上 四年前期 新撰習字帖 四級 太田謹 村田浩藏

備考表中△印ハ代用書ナリ讀書科ノ代用書ハ前二書中其ノ一二代ル者トス

小學簡易科用圖書配當表

學科	讀書	作文	習字	算術
第一年	小學指教圖 六マデ 文部省 短句 連語 十葉 太田謹 用 連語 十葉 太田謹 小學讀本 一冊 原亮策	課程表ニヨリ適宜ノ題ヲ撰ム可シ	初小學習字帖 一年前期 二冊 卷 菱潭	數字 圖 一枚 文部省 加算九九圖 一枚 同 筆算九九圖 一枚 同 珠算二千題 尾關正求
第二年	小學讀本 二冊 原亮策 同 一冊 田中義廉 同 一冊 榑原芳野	同上	同上 二年前期 二冊	珠算二千題 尾關正求
第三年	同 同上 二冊 同 同上 二冊 同 同上 二冊	同上	同上 二年後期 二冊	同上

備考表中△印ハ代用書ナリ

小學校規則 (小學校規則) 學校規則に關して明治十九年八月廿一日本縣に於て之を定め公布した。本校に於てもこれに準據したもので、其の概要を摘録すれば學年に關しては十一月一日に始まり、翌年十月三十一日終る休業ものとす、始業はその日の長短によつて午前七時乃至九時とし、休業の日は日曜日・大祭日・祝日・縣

社祭日・夏期(七月十六日ヨリ)及び冬期(十二月二十五日ヨリ)とした。疾病其の他の事故によつて休む時は通告簿を以て其の旨を届け出で、事故あつて退學せんとする場合は、其の事由を明記して願出でしめた。

生徒心得 生徒の心得に關しては勿論規則を遵守して、職員の訓戒に服従し、常に其の言行を修め、書籍器械等は互に貸借することを許さず、己むを得ざる時は教員の指揮に従つた。

罰則 生徒に對する罰則として、若し生徒にして其の行狀の修まらざる時、或は職員の訓戒に背くものは夫々譴責・貶席・課役・留置の罰を科した。學校に於て教育しがたき事情の生徒は本縣知事の指揮に従ひ、學校に於て罰を科したる場合は其の父母・後見人に通知すべきであつた。

試業規則

〔試業規則〕 試業規則も縣の定めに従つたもので、明治十九年八月布達にかゝる本縣管内小學校、試業規則を略述するに、試業は小試業(一月四月七月施行)と學年試業(每學年ノ終ニ施行)とに分ち、試業は受持教員が執行し、學年試業には郡吏縣官の臨席することがあつた。成績は點數を以て示され一學科の定點を百點と定めた。

學科試業は小試業の様にして行はれ、小試業の約點を加へて二分し、其得點が五十點以上のものは合格とした。但し五十點以上あつても、學年試業每學科の評點二十點に満たざる場合は不合格とした。

又第一・第二・第三學年試業(小學簡易科は第一第二學年試業)に合格のものには第一號書式、第四學年試業(小學簡易科は第三學年試業)に合格のものには第二號書式の證書を授與した。

第一號書式

證書	岐阜縣何國 何郡何々 高等何々 尋常小學 簡易科	族籍	姓	名	何年何月生
高等小學科(小學簡易科)第何年修業候事	尋常	高等小學科	何々高等尋常小學	校長	姓
年	月	日	何々高等尋常小學	校長	名印
番號					

第二號書式

證書	一號同様	族籍	姓	名	何年何月生
高等小學科(小學簡易科)卒業候事	尋常	高等小學科	何々高等尋常小學	校長	姓
年	月	日	何々高等尋常小學	校長	名印
番號					

授業料

〔授業料〕 授業料も縣令の定むる所によれば尋常科は最低五錢、最高三十錢、高等科は貳拾錢以上七拾錢以下と定めてゐるが、本校に於ては尋常科最高十五錢、最低八錢と定め、高等科に於ては最低二十五錢、最高五十錢と定めた。勿論多少の増減改変はあつた。

御眞影と勅語謄本奉戴

〔御眞影と勅語謄本奉戴〕 興文尋常小學校に於ては明治二十二年四月三日明治天皇及び昭憲皇太后兩陛下の御眞影を宮内省より下賜せられ、謹んで奉戴し、翌明治二十三年三月十五日興文高等小學校にも兩陛下の御眞影を下附せられ、興文高等小學校及び興文尋常小學校兩校職員生徒一同は禮服を着用して謹んで郡役所より奉迎し奉つた。

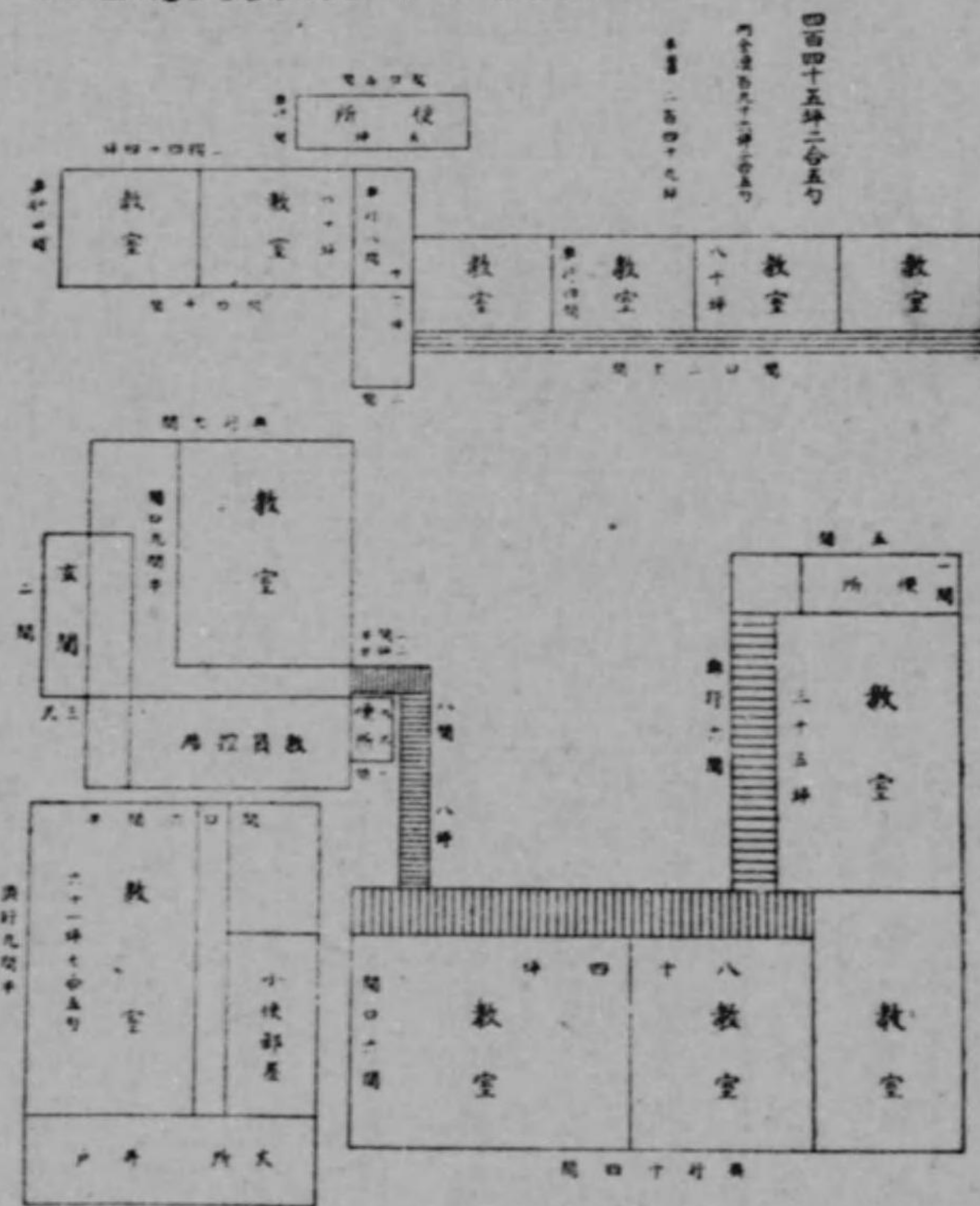
次いで同二十三年十二月二十九日には兩校に教育に關する勅語謄本を下賜せられ、謹んで奉戴し奉り、聖旨に副ひ奉らん事を期した。

興文學校校舍と興文尋常小學校の増築

〔興文學校校舍と興文尋常小學校の増築〕 當時に於ける興文學校校舍に就いて見るに、興文高等小學校にあつては間口十七間・奥行五間半の校舍と、間口二十間・奥行八間の一舎とを有し、前者は裁縫室(四十七坪)、玄關・教員控室・小使室・教場一教室等を有し、又後者は教場九教室を有するものであり、其の他校地の東北隅には土藏一棟を構へてゐた。

興文尋常小學校にあつては、間口九間半・奥行七間の一舎、その内に二間に三尺の玄關をそなへ、其の他教員控室・一教場を有した。その南隣りに間口六間半・奥行九間半の一舎を有し、一教室・小使室・火所・井戸が設けられ、その東隣りに間口六間・奥行十四間・八十四坪の校舎、その内容は教室三、更に其れに接して北側に別棟間口五間・奥行六間の一教室があつた。以上が明治二十四年興文尋常小學校の増築前の姿であつた。

興文尋常小學校震災前圖

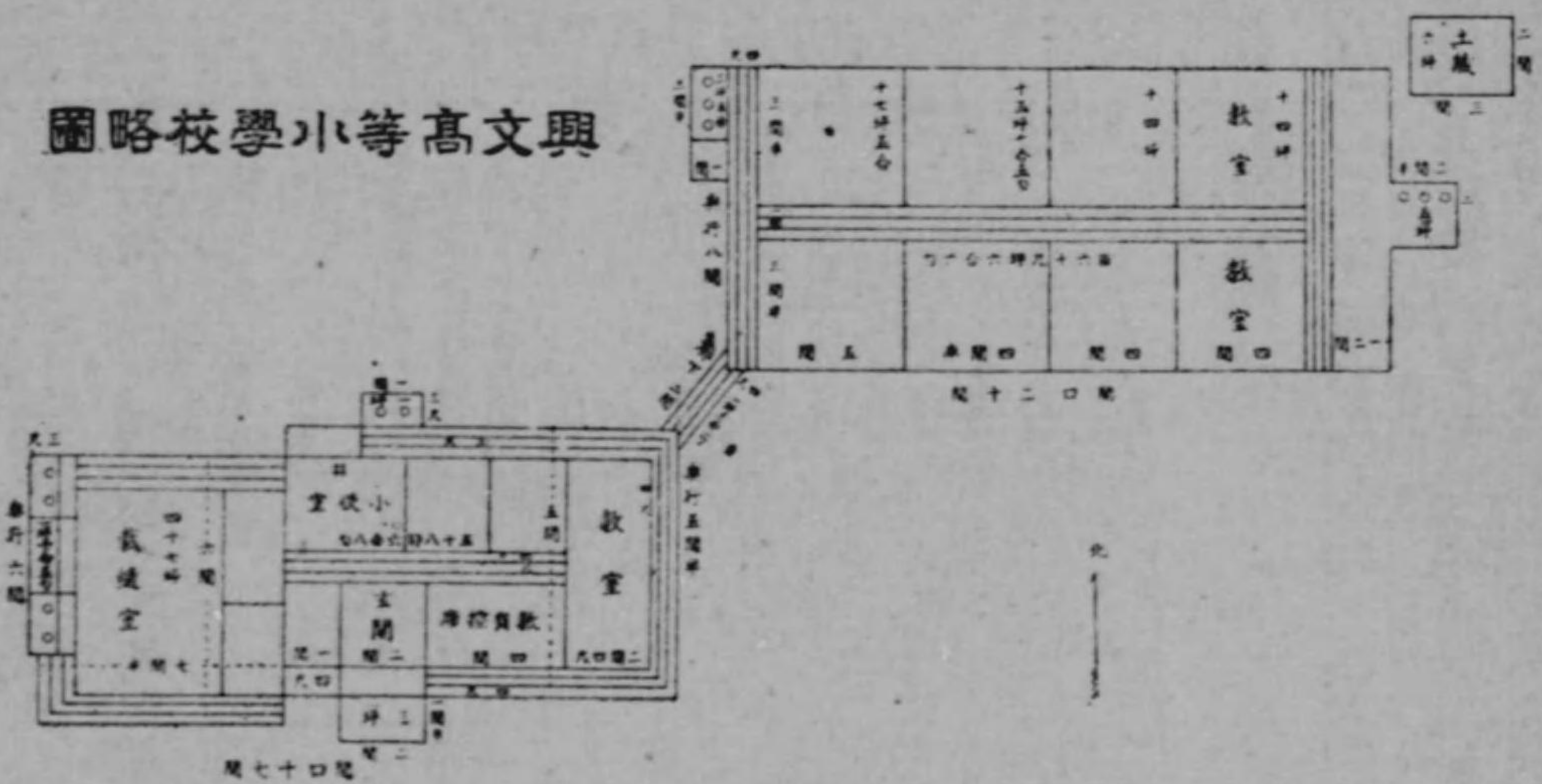


郭町の興文尋常小學校にあつては先の學校令の發布によつて尋常高等の分離によりて、尋常科のみを收容することになり、且つ年々の入學兒童増加によつて校舎の狹隘を告げ、明治二十四年校舎の増築を見るに至つた。増築校舎は舊校舎の北側に建てられ、二階造(桁行二十間梁行四間)及び平屋造(桁行二十間梁行四間)の二棟の建築であり、三月起工し、六月二十五日竣成し、

七月廿一日開校することになつた。該校建築費は千十六圓九十二錢にして、建築委員及監督者として管理者大垣町長筒見初三・掛員矢橋庄三・大澤鐵三・本校幹事高橋友爾・場所係渡部賢・建築委員淺野新・中島武三・八代政良・小野完吾・中西庫造・河地重助・戸田銳之助の諸氏で、東奔西走この増築に盡力した。

濃尾大震
災と其の
被害

興文高等小學校略圖



新装なつた興文尋常小學校及び興文高等小學校の姿は圖に示す様であつた。

〔濃尾大震災と其の被害〕 明治二十四年十月二十八日午前六時三十分頃俄然大轟音と共に襲つた強震こそ濃尾地方未曾有の一大慘事であつた。地は裂け家は倒れ、人は壓せられて火炎は天に沖し、阿鼻叫喚の修羅の巷と化した。

この震災によつて大垣の蒙つた損害は殊に甚だしく、我が興文學校校下の慘狀亦見るに忍びざるものがあつた。今左に大垣町の被害と我が校下との被害一覽表を示して、其の一斑を伺ふことにする。

震災の被害と校下

校	戸數	全燒	全潰	半燒	半潰	破損	被害合計	死亡	重傷	死傷合計
大垣町	四、五九七	九三七	二、四一九	五	九六三	二五七	四、五八〇	七九	一、三〇〇	二、〇五九
校下	一、八八五	一九六	二四〇	一	三九四	五	一、八八五	一八四	一六	三五〇

前表中負傷は重傷者のみを記したが、輕傷者を加ふれば五千人以上であつた。

職員生徒
の被害

此の日は小雨の日であり、震災は生徒登校前であつたから、學校に於て死傷せし者は職員生徒中幸に一人もなかつた。

當時兩校の教職員は、高等小學校に於ては首席訓導石川孫七郎を始め、片山尙夫・安達菊郎・井倉越・吉田曾太郎・吉村駒雄・北村勝次郎・中島清作・大野鐵之助・田代弼次郎・村田トヨ・柿本ミネ・幹事小島文彌等十三人、尋常小學校に於ては校長長屋由郎を始め河村道之助・細井道太郎・安藤正通・岩瀬道二郎・竹中修吾・中島充策・小林安吉・津田實穂・月岡峯之助・中川清之、幹事高橋友彌の十二人であり、その内吉村駒雄・中島文彌・安藤正通の三人は負傷したが、何れも輕傷にして、類焼の災に遭ひたるは石川孫七郎・河村道之助・大野鐵之助の三氏であつた。

生徒に就いて見るに當時在籍兒童高等科生三百四十四人の内高等科四年生堤文彌・海野廣・三年生平野清次・森多喜藏・黒田サク・高橋シブの六名は終に壓死の慘に遭ひ、其の他重傷者十一名であつた。

尋常科生徒は當時在籍兒童總數六百八十六名中四年生大橋孝次郎・片山孝之助・奥田トモ三年生金岩岩次郎・木島作平・高橋ノヅ・中島テツ・一年生片山マツ・杉崎カク・安藤ミツの十名は慘死し、重傷者合計六十五名に及んだ。

校舎の被害

興文學校の校舎に一度目を轉ずれば、高等小學校に於ては二棟の校舎、一棟の書籍庫倒潰し、

器械器具の破損は勿論、大垣藩校時代より遺存せし書籍は殆んで烏有に歸してしまつた。尋常小學校にあつては校舍五棟の中二棟は倒れ、一棟は半潰し、二棟の新校舍は大破したけれども倒潰には至らず。ために翌日臨時假設病院に充て、尋で町役場直間税分署がこゝに移されるに至つた。

この惨禍にあたつて、急速御眞影を無恙避難奉還しまつり、一時警察署に奉置し、數日を經て假町役場に奉還した。

學童はこの災變にあつて教を受くるにも家はなく、臨時休校の憂目にあひ、教育を害する事も亦大であり、復舊の見込みも當分は立たなかつた。職員は東奔西走教育の復興に盡瘁したが、救恤施療等の當面の事に忙殺せられて用ひられず。十一月中旬に至つて教職員等一同に會して教育將來の方針について凝議し、八方畫策陳情したが用ひられず。竟に教職員は一時經濟上の徳義よりして一同辭職するに至つた。

尋常小學校にあつては二棟六教室が残つて居たが、前述の如く施療院に充てられ、又慰問勅使毛利侍従の休憩所にあてられた程で、これも兒童教育に使用することも出來ず。教育を阻害する事亦大と云はねばならなかつた。又施療病室も狹隘を告げために、河合・平川兩氏の義捐建築によつて、板屋板葺三棟(梁四間、棟十五間、梁四間)外に方二間半のもの一棟、其の他藥を以て覆ふ假屋二棟、浴室便所等の建築成り、益々擴大せられて治療につとめた。

恩賜

淑聖至仁にわたらせらるゝ明治天皇に於かせられては、いたくこの度の濃尾震災に宸襟を惱まし給ひ、侍従をしてこの慘狀を委曲詳細に奏上せしめ給ひ、又十一月十日小松宮彰仁親王殿下及毛利侍従を勅使としてこの地に御差遣遊ばされ、一々御巡視御慰問せしめられ、辱なくも天皇皇后皇太后三陛下より内帑金三萬圓を本縣に下賜せられ、大垣に對しては七百四十餘圓を賜はつた。又教育にも深く御軫念遊ばされ、主務省に命じて檜垣視學官を特派し、再三、縣内教育を巡視せしめられ、就中小學教育困難の狀上聞に達するや、縣下小學校へは特に一千五百圓の恩賜あり、後復東園侍従を勅使として教育狀況を巡視せしめらるゝなど、實に皇恩の辱さに感泣せざるものはなかつた。政府に於ても總理大臣松方伯は舊藩主戸田伯と共に親しく慰問巡視し復舊に努力せられた。

義捐金品

この災變によつて地方慈善家の義捐も多く、戸田伯の三千圓を始めとし、其の額一萬五千六百七圓餘、物品の寄與も多く、其の額も亦六千餘圓の多額に上つた。これ等はそれ〴〵分配せられた。本校に關するもののみを摘記すれば左表の通である。

特別恩賜金 大日本教育會より負傷教員へ	摘要	高等		尋常	
		金額	物品	金額	物品
		六・九三九 三・五七八		一・六一二 三・五七八	

各地篤志者より 同上	一・七八九		一・七八九	
信州飯田小學校々友會より負傷入院生徒へ	・二〇一			
大日本教育會より學校へ	一六・一八七		一六・一八七	
各地篤志者より校舎建築費として	三〇・三〇二		五八・二四一	
各地篤志者より生徒救助及學用品費として	一・五八六		三・〇四九	
滋賀縣東坂田郡第五區尋常小學校生徒より生徒へ			・五五九	衣類 五三
長野縣上伊那郡高等小學校箕輪分教場教員生徒より同				雜書一括、尋常讀本十七冊、雜品一點
石川縣博物館内臨時慈善會より生徒へ	四・九六五	雜書二括、紙二括、石版四十板、雜品九冊、三十八冊、雜品二點		雜書廿六冊、雜品一點
金澤市小學生徒より生徒へ		小兒シャツ七枚		小兒シャツ十七枚
京都府下龍池尋常小學校生徒より生徒へ				尋常讀本九十冊
大日本圖書會社より 同上				小學習字帖三十冊
東京廣岡幸介、西田傳介より 同上				

震災善後

災變以來休校すること既に三十餘日、石川・長屋・河村等の職員は校下父兄の輿論を以てして、開校の速かならん事を數次に涉つて陳狀し、漸く其の宿意を達して、十二月上旬頃より尋常科を開校することに決したが、また十一月廿八日又裂震あつて輿論も一頓挫し、一月上旬を以て開校することとなつた。

翌明治二十五年一月十一日遂に尋常小學校を開校し、始めて教育は其の緒に就いた。是れより先、新教室二棟六教室は十二月返附せられ、こゝに開校するに至つたものであるが、當時尋常科の學級數十二で、到底一時に收容することは出來ず、二部教授を以て三・四年生は午前四時間、一・二年生の六學級は午後四時間として授業を進め、長屋・井倉・河村・細井・岩瀬・竹中の六人がこれにあつた。

高等科は二月十六日始めて郭町元興文尋常小學校に合併して開くこととなつた。これより先一月中旬議員の決議によつて兩校不用の古木材・古瓦を集めて尋常校内に梁四間・棟十五間・埋込柱・千枚葺の假屋を建築して、三教室に分割し、尋常科三教室六學級を移し、新教室の二室を以て高等科生の教室に充て、震災前十一學級であつたが、男女或は同年は總て合併し、四學級として、午前午後の二部教授を行ひ、長屋・吉田の二氏が擔當した。

教室並びに教員の不足は其の學科に影響し、英語・體操・唱歌・裁縫等の數科を缺き、授業料も各級共五錢を減じた。三月に至つて追々整備し、石原欽造に英語教授を囑託し、柿木ミネを復職せしめて裁縫科を擔當せしめた。

五月上旬負傷患者は全部退院したので、其の病室を借りて板葺のもの三棟を教室に修繕し、六教室に劃し、六月一日より其の假設病院の病室を以て教室に充用し、授業時數學科等も略々震災前に復した。

三月末長屋由郎高等小學校校長を兼任するに至り、大垣興文尋常高等小學校と改稱するに至つた。

一月末、本縣被害小學校の教員數十名は岐阜に會して小學教育の善後策を講究し、先づ代表として岐阜尋常小學校校長稻垣知剛、笠松高等小學校校長榎本利通、佛生寺尋常小學校校長河合廣外一名は二月末上京して、主務大臣及び要路の人々に岐愛兩縣被害小學校教育費の國庫補助を仰がんことを要請し、漸く其の端緒を開いて三月中旬歸縣した。尋いで岐阜縣教育會春期大會に於て其の要請を貫徹せんことを決して、前記稻垣・榎本・河合三氏の外に、岐阜縣尋常師範學校附屬小學校主幹柴崎鐵吉・佛生寺村長堀部義徳・高富高等小學校校長渡部次郎・本校校長長屋由郎の七人、本縣被害小學校陳情委員として三月三十日上京した。主務大臣・貴衆兩院議員の門を敲いて、東奔西走すること凡そ三十日、五月十四日に至つて突然議會の停止に會ひ、其の目的を達することも得ず、五月二十三日本校校長も歸垣し、委員等も次いで歸縣した。然し其の後願意も幾分は達せられて、國庫より本縣下へ拾萬一千拾八圓八拾五錢の補助を得、この配當額興文高等小學校へ一千六百六拾七圓參拾錢貳厘、同尋常小學校へ一千貳百六拾貳圓五錢八厘、合計貳千九百參拾九圓參拾六錢であつて、其の初め要請額は本縣下貳拾八萬七千四百拾參圓拾九錢であつたが、主務大臣から會議に提出せられた額は拾四萬四千九百八拾六圓參拾貳錢で、議會に於て更に削減せられたものであつた。

第三節 興文尋常高等小學校

尋常科
高等科の
合併

未曾有の大災變に依つて興文高等小學校・興文尋常小學校は其の難に遭ひ、特に高等小學

校は校舎全潰して其の慘狀最も甚だしかつた。こゝに於て止むなく高等科尋常科の合併が成つて、高等科は郭町元興文尋常小學校に合せられ、前述の如く明治二十五年二月十六日に至つて初めて高等科の開校を見、尋常高等兩科揃つての開校であつた。校舎は勿論不完全なるもので、教職員生徒の努力は一方ではなかつた。この災變による學力の退歩を挽回せんものと、職員生徒は精勵し、三月に於ける學年試業の結果は意外の好成績であつた。ついで興文尋常高等小學校と改稱し、熱心に教育を續けた。四月に至つて、學校はこの災害による不就學者の増加を憂へて居たが、校下父兄の教育の熱度は益々固く、入學にあつて高等科一年生は百名以上、尋常科一年生は貳百餘名に上つて、前年よりも寧ろ幾分の増加を見た。當時大垣接續村の小學校の多くは未だ開校にも至らざりしに想到する時、如何に其の教育復興の速かなりしと、關係諸士並びに校下父兄の潜在的教育熱が如何に旺盛なりしとに滿腔の敬意を表せざるを得ない。

興文尋常
高等小
學校一覽

〔興文尋常高等小學校一覽〕 學校の復舊も進捗して、明治二十五年に於ける高等科の狀況は次の様であつた。

學科	高等科
教員	學校長一人 教員男四人
學生	授業生 男一人・女二人
校長	長屋由郎

第四章 學校令時代

生徒總數	男 二百十七人	女 六十三人
一年生	男 九十三人	女 四十七人
二年生	男 三十三人	女 七人
三年生	男 五十七人	女 六人
四年生	男 三十四人	女 三人

明治二十六年に於ける高等科一覽表は次に示す様であつた。

學科	高等科
修業年限	四箇年
學級數	七學級
教員	男五人 准教員男二人・女二人
校長	長屋由郎
生徒數	男 二百十八人 女 八十五人
一ヶ年授業料	一千一百四十九圓八十七錢
歳費	一千二百十三圓五十九錢

次に尋常科に就いて見るに、明治二十五年に於ては、左表に依つて一斑を知ることが出来る。

學科	尋常科
教員	學校長一人 教員男五人 授業生男六人
校長	長屋由郎

生徒數	男 四百十人	女 三百三十八人
-----	--------	----------

一年生	男 百四十三人	女 九十六人	二年生	男 九十七人	女 九十五人
三年生	男 九十人	女 七十一人	四年生	男 八十人	女 七十六人

明治二十六年に於ける狀況は次表に示す通りであつた。

修業年限	四箇年
學科	尋常科
學級數	十學級
教員	正教員男六人 准教員男四人
校長	長屋由郎
生徒數	男 三百八十四人 女 三百二十九人
一ヶ年授業料	九百四十一圓六十四錢
歳費	八百九圓六錢

校下の狀

〔校下の狀況〕 この頃の校下の狀況について見るに、戸數千八百三十戸、興文學區として郭町・外側町・馬場町・新馬場町・切石町・西代官町・西長町・鷹匠町・牛屋町・番組町・鳩部屋町・鳥見町・室町・宮町・桐ヶ崎町・弓町・栗屋町・田口町・旗町・歩行町・袋町・高橋町・東長町・清水町・東代官町・新地町・東今岡町・西今岡町・田町・堤田町・西田町・

校舎

東水主町・西水主町・西船町・東船町・俵町・竹島町であつた。

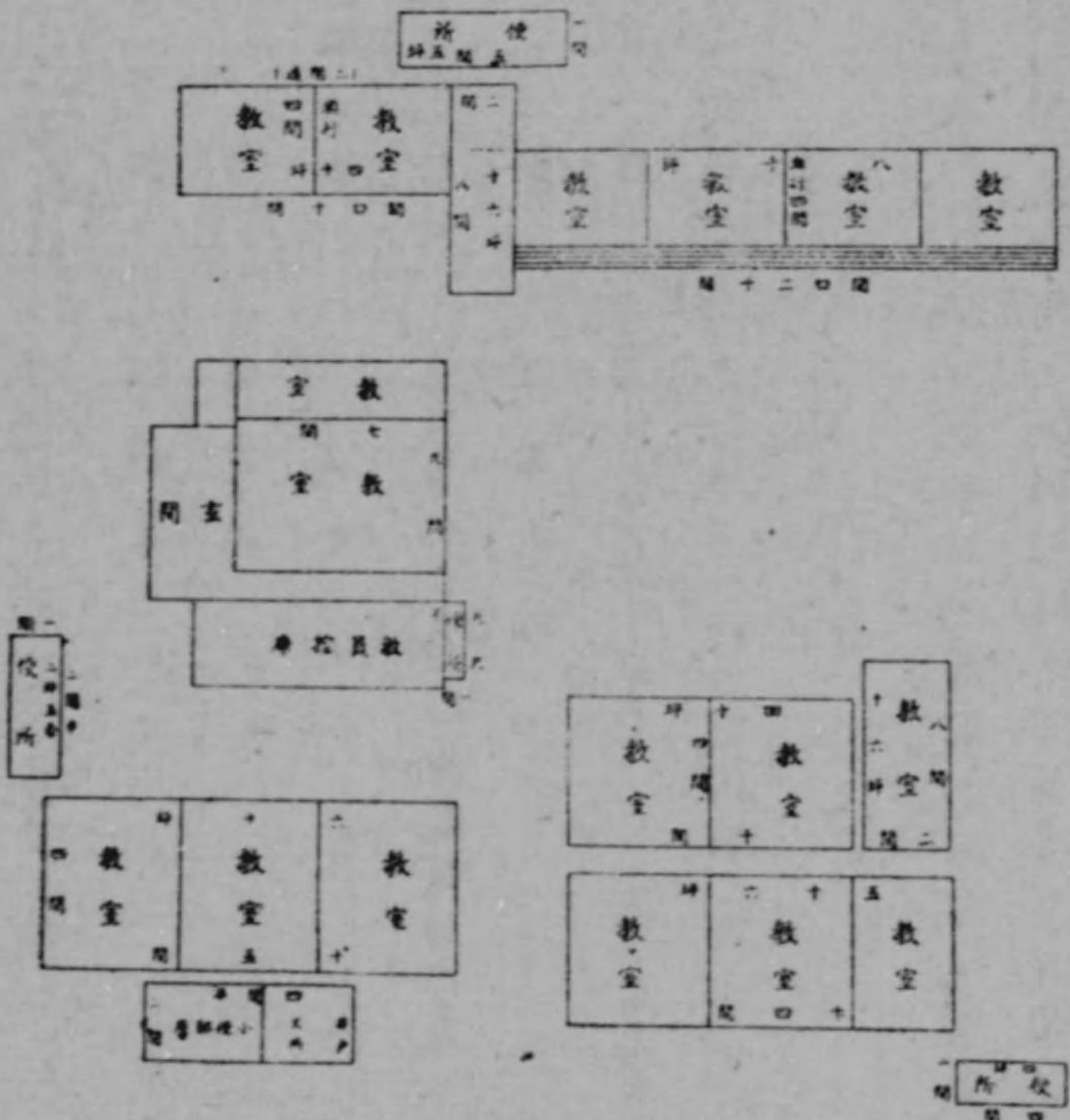
〔校舎〕 當時興文尋常高等小學校に於ける校舎の變遷に就いては、略々前節に記して置いたからこれを省略するが、其の建物坪數四百四十五坪二合五勺、和風二階造一棟、其の他は和風平屋造りのものであつた。

二階は本町會の議場が先の罹害によつて倒潰したので、適當な箇所もなく、ためにこの頃議場に貸與し、又岐阜中學校大垣分校にも二階を貸與して授業を行はしめた。

上圖興文尋常高等小學校略圖を参照されたい。

高等科
舍の新築
と高等科
分離

興文尋常高等小學校略圖



は全潰したから、其の後一日も早く建設して兒童教育の隆盛を希求したが、震災による被害の復舊も亦急にして、容易に其の願望は入れられなかつたが、明治二十六年に至つて機愈々熟し、中西庫造・小野完吾・二和田以直・淺野新・勝野平三郎・中島友彌・高橋友爾・矢橋

庄藏・大澤鐵二・渡部賢・戸田銃吉・戸田銳之助・川地重助等の諸氏によつて着々其の準備に着手せられ、六月に至つて、町會に於ては、「舊敷地に新校舎を設立するにあたり其の地形西方の奥行は曲折して、それがために不便少からず」として、舊敷地西部凡二百八十坪を賣却し、其の代償として東隣に市街宅地四百十六坪六合四勺を購入することを議決し、官に申請して許可を得た。かくして七月に至つて建築に對する入札も終つて、いよいよ本建築に着手することになつた。

總建築費豫算額參千四百七拾六圓、これについては辱くも先に下賜せられた恩賜金を始めとし、被害小學校補助金其の他篤志者の寄附金を以てこれに充てられた。その内譯は次表の通りであつた。

年 月 日	摘 要	高
明治二十六年六月十二日	前年度繰越金	七三二・二二六
八月十四日	恩賜金	一八・五五六
九月二十日	篤志者寄附金	二三一・一三〇
全	雜入	三三・二七二
十一月十三日	地方稅補助金半額	一一二・一五二二
明治二十七年二月八日	計	一一二・一五二〇
		三四五八・二二六

豫算額參千四百七十六圓の中、建築費豫算參千七十一圓二十五錢、雜費百五十圓、門塀新築費百七十圓が起算せられた。かくして工事は進捗し、二月初旬に至つて略々落成を見るに至つた。新に成つた校舎の概要は次の様であつた。

一、教室 一棟 桁行三十六間五合、梁間四間五合

此建坪百六拾四坪貳合五勺

軒高、自土臺至桁上端十三尺、軒出三尺、和風寄棟造瓦葺、屋根勾配五寸五分

一、昇降口一ヶ所 桁行三間、梁間一間半

此建坪四坪五合

軒高、自土臺至桁上端九尺、軒出三尺、和風切破風造瓦葺、屋根勾配四寸

一、教員室一棟 桁行四間、梁間三間

此建坪拾貳坪

軒高、自土臺至桁上端拾七尺、軒出貳尺五寸、和風寄棟造二階建瓦葺

一、小使室及湯沸所一軒 桁行四間、梁間二間

此建坪八坪

軒高、自土臺至桁上端九尺、軒出貳尺、附庇造瓦葺

一、厠屋 一棟 桁行三間、梁間二間

此建坪六坪

軒高、自土臺至桁上端九尺、軒出貳尺、和風切破風造瓦葺

一、厠屋 一棟 桁行二間五合、梁間二間

此建坪五坪

一、土間廊下二ヶ所 桁行五間、梁間一間

此建坪五坪

軒高、自土臺至桁上端九尺、軒出貳尺

合計建坪 貳百四坪七合五勺

其の他

一、石門、垣

三月五日、こゝに全く工を終つて落成式を舉行し、縣知事・郡長を初め來賓百餘名、生徒九百五十一名相會して、其の落慶の典を祝つた。來賓・諸顯士よりは懇篤なる祝詞を賜はり、興文尋常高等小學校校長代理蒲生頼次は謹んで叡聖至仁なる 天皇陛下の御幫助と、此の度當局者の精勵とを陳謝し、本日本校の光榮は至つて大なるものなることを陳べ、將來 陛下の鴻恩と諸士の盛意を永く失墜する所なく、益々力を竭し國家有用の材を輩出せんことを代表して答へた。

興文尋常高等小學校一覽

斯くて、震災以來郭町元興文尋常小學校校舍に於て尋常科・高等科合併して狹隘且つ不備の校舍に於て教育せられてゐたが、新築校舍成つて高等科は之に移轉分離し、興文高等小學校と稱し、郭町校舍は尋常科のみを收容して、興文尋常小學校と改稱するに至つた。

〔興文尋常高等小學校一覽〕 明治二十六年に於ける興文尋常高等小學校の概況を見るに左の如くであつた。

尋常科	歳費	八百九圓六錢
	授業料總額	九百四十一圓六十四錢
	修業年限	四箇年
	學級數	十學級、教員數 十一人
	生徒數	男 三百八十四人 女 三百二十九人
	卒業生徒數	男 六十人 女 五十一人
高等科	歳費	一千二百十三圓五十九錢
	授業料總額	一千一百四十九圓八十七錢
	修業年限	四箇年

興文尋常小學校一覽

〔興文尋常小學校一覽〕 明治二十七年年度に於ける興文尋常小學校の概況は左表の通りである。

第四節 興文尋常小學校・興文高等小學校

學級數	七學級、教員數 七人
生徒數	男 二百八十八人 女 八十五人
卒業生徒	男 二十六人 女 三人
歳費	一千二百十圓三十錢
授業料	八百七十一圓八十一錢五厘
修業年限	四箇年
學級數	十一學級
教員數	十一人
生徒	男 三百六十二人 女 三百二十九人
卒業生徒	男 七十八人 女 四十七人
職員	
校長	長屋由郎
正教員	日比野五百三・井倉越・堤道太郎・河村潤二・安藤正通

第二編 明治維新後の本校

准教員 曾根直彦

雇 川本基三郎・月岡峯之助・柿本ミネ

興文高等小學校一覽

〔興文高等小學校一覽〕 同二十七年に於ける興文高等小學校の概況は左の通りである。

歳費	一千三百五十二圓二十八錢
授業料	一千五十二圓六十五錢
修業年限	四箇年
學級數	八學級
教員數	九人
生徒數	男 百八十七人 女 九十一人
卒業生徒數	男 四十人 女 四人
職員	
正教員	蒲生頼次・古井恒助・河村道之助・竹中修吾・勝村 弘
准教員	稻葉 茂
雇	大野鉄之助・津田實穂・西脇諦賢・大野トヨ

大垣に於ける尋常小學校一覽

〔大垣に於ける尋常小學校一覽〕 一度目を轉じて全大垣に於ける學校の狀況を見るに、左表の通りである。興文尋常小學校が常に其の優位を示してゐることを察知することが出来る。

尋常小學校一覽

(明治二十七年現在)

町村學校組合	位置	校名	修業年限	戸數	人口	學齡兒童	經費
元大垣町ノ内岐阜・本・傳馬・中・魚屋・北新・南新ヲ除ク其ノ他南寺内・世安	大垣郭町	興文	四年	一、九一一	七、三五五	一、三二八	一、六八四・〇〇
元大垣町ノ内岐阜・本・傳馬・中・魚屋・北新・南新	大垣郭町	六街	四年	七二六	二、九六一	五九二	六一二・〇〇
大垣町・藤江・林本郷・宮村・高屋・室村・南類・高橋村	大垣郭町	七聯	四年	八三六	三、七六四	六〇五	七〇六・〇〇
大垣町・久瀨川・切石・今・西崎・若森・南杭瀬村・若森・青柳・今・他木・戸村及ビ不破郡・里村・久徳村ノ委託ヲ受ク	久瀨川	久瀨川	四年	一、〇九五	四、六四八	九四〇	八三九・〇〇
南杭瀬村・外花・割田・友江・外野	南杭瀬村	外花	四年	一六六	八三一	二一〇	三〇九・〇〇

校名の改稱

〔校名の改稱〕 明治二十七年五月尋常小學校校名改稱の議が起り、組合會に於て協議し、其の決議に基いて興文尋常小學校は大垣第一尋常小學校・六街は大垣第二尋常小學校・七聯は大垣第三尋常小學校・久瀨川は大垣第四尋常小學校と改稱されるに至つたが、興文小學校は特に外側町學校を興文第一・郭町學校を興文第二と稱ふる事とした。

岐阜縣尋常中學校大垣分校と興文小學校

〔岐阜縣尋常中學校大垣分校と興文小學校〕 大垣の地には中等學校として曩に師範研習學校があつたが、既述の通り岐阜に移り、其の後華陽學校分校が設けられ、地方人士の中等教育

にあてられたが、明治十八年に至つて廢校となり、地方青年修學の便を失ふに至つた。爾來有志者學校設立について百方計畫したが、時機未だ到らず、十星霜を経るに至つた。

二十七年に至つて大垣地方有志者の熱心なる願意は僅かに通され、寄附金を以て岐阜中學校の一分校を設置し、岐阜縣知事の管理を請ふ状態に迄達し、三月七日中西重造・小野完吾・戸田鼎耳・戸田銳之助・淺野新・鈴木徹等大垣町有志者惣代の名を以て、知事會我部道夫に請願書を提出し、次いで四月二日岐阜縣尋常中學校大垣分校設立の認可を得た。

校舎は郭町の興文尋常小學校の一棟を貸與することとなり、四月生徒を募集して百三十名を入學せしめ、五月一日に假開校式が行はれた。爾後興文尋常小學校に於て授業が行はれ、翌二十八年四月新入生百三十名をも收容して教育をして居たが、やがて郭町に新築の校舎も出來、九月初めてこれに移つた。

岐阜縣尋常中學校大垣分校創立よりこゝに至る迄、凡そ一ヶ年半の長期に亘つて、教場を貸與し、其の便宜を計り、其の發達に力を盡したものである。

校章の制定

〔校章の制定〕 明治二十八年校章制定の事が議せられ、種々論議せられたが、竟に校章を制定するに至つた。由來大垣は柿の名産地として知られ、大柿と稱した事もあり、それに因んで三個の文の字を組み合せて柿の形態をとり、又三個の文の字は興を圍んで興文の校名をあらはし、各三個の文は、智・徳・體の三徳を表示するものにして、本校の精神を象徴した意

義深遠なものである。

斯くて永年歴史ある意義深き興文小學校の校章は制定せられたものである。

興文第二校の改築

〔興文第二校の改築〕 明治二十八年興文第二校、即ち興文尋常小學校校舎改築の議が起り、設計委員として戸田銳之助・中島武三・中西庫造・淺野新・小野完吾・河合治平・河地重助等が擧げられ、東奔西走して其の議を纏め、玄關及びそれに附隨する二階造一棟の校舎（職員室）の改築を行ふことになつた。その經費總額五百六十九圓十三錢七厘、内百五十一圓五十六錢は舊使用の古材木を賣却して支辨した。

二十八年七月漸く着工し、同年十二月其の落慶を見た。改築なつた校舎は階下玄關、その奥に二十坪の土間を有し、十二坪の教員室、十二坪の物置及び小使室、階上は二室で三十坪のもの一、他に取外しの出来る境を設けて應接室を作つた。

興文第一校の増築

〔興文第一校の増築〕 明治二十八年興文第二校の改築に次いで、興文第一校の増築が論議せられ、戸田銳之助等の設計委員は引きついで力を盡し、當時興文小學校の児童數、尋常科六百四十一名・高等科三百二十一名、學級數尋常科十學級、高等科七學級、教室數に至つては尋常科九教室、高等科十一教室の状態にて、將來これ等児童を收容するには校舎狹隘を告ぐるは必然で、更に年々増加の傾向を有する入學児童數を考慮する時、教場の増築を必要とするに至つた。

こゝに於て興文第一校校舍増築の議を決し、明治二十九年二月二十日増築の認可を縣より得て、同月着工し、五月竣成した。

増築の校舍は瓦葺二階造、桁行十二間、梁行五間一尺、建坪六十二坪の建築であり、普通教室三、裁縫室一、昇降口一を構へ、總建築費一千五百八十九圓十七錢五厘であつた。時の校長は稻垣知剛であつた。

技藝專習科特設

〔技藝專習科の特設〕 興文第一校興文高等小學校に於ては、曩に校舍の増築を行ひ、明治二十九年五月こゝに技藝專習科を加設するに至つた。

明治二十年の風水害

〔明治二十年の風水害〕 明治二十九年九月三、四日より天候不穩となり、六日は終日降雨、午後より雷鳴暴雨盆を覆す様で、諸川漲溢、警報頻りに至り、終には諸堤防決潰して、逆流追々大垣に浸入した。翌九日天尙霽れず、終日雲行迅く、驟雨屢々至り、其の夜は大垣市中高地も浸水床上二尺餘に及んだ。翌十日天候尙定まらず、半曇半雨、市内家屋は浸水檐を没し、低地は二階を浸し、皆難を天主閣に避けた。階上は多數の避難民及び避難運搬物資で充満した。興文・六街・七聯等小學校の狼狽は言ふも更なり、教室は倒潰し、或は大破損を蒙り、本校校長稻垣智剛・大橋文之助・水谷健太郎は安八郡教育會頭八木信守より安八郡内小學校に於ける被害事項調査方を囑托せられ、一方大垣町長中西庫造は知事榊山資雄に大垣町被害小學校補助金交付を具申するに至つた。

學校一覽

この慘禍による本校の被害は、其の見積金額總計四百七十二圓、其の他流失及水腐圖書數二百三十冊、此代價二十一圓九十八錢、同じく器具個數十三個、代價十五圓四十錢であつた。

〔學校一覽〕 明治二十八年より同三十年に至る學校の概観は左の通りである。

興文尋常小學校 (明治二十八年)	興文高等小學校 (明治二十八年)
歳費金額 四千百二圓五十一錢七厘 (高等科と共通)	歳費金額 尋常科に同じ
一ヶ年授業料 八十一圓四十七錢五厘	一ヶ年授業料 一千九十一圓八十二錢
修業年限 四箇年	修業年限 四箇年
學級數 十學級 教員數 十人	學級數 七學級 教員數 十人
生徒數 男 三百四十二人 女 二百八十五人	生徒數 男 百九十六人 女 百十七人
卒業生徒數 男 七十三人 女 六十四人	

第四章 學校令時代

第二編 明治維新後の本校

卒業生徒 男 十四人 女 三人
校長 興文尋常高等小學校長 稻垣知剛

興文尋常小學校 (明治二十九年)

修業年限 四箇年
學級數 九學級 教員數 十人
生徒數 男 二百九十九人 女 二百六十六人
卒業生徒 男 八十五人 女 五十五人
一ヶ年授業料 五十五圓九十九錢

興文高等小學校 (明治二十九年)

修業年限 四箇年
學級數 七學級 教員數 八人
生徒數 三百二十一人
一年 男 百四十二人(二組) 二年 男 九十六人(二組)
三年 男 四十五人(二組) 四年 男 三十人(一組)
授業料總額 百四十六圓五十錢

興文尋常小學校 (明治三十年二月)

修業年限 四箇年
學級數 八學級、教員數九人
生徒數 男 三百一人 女 二百七十六人
一年 男 七十五人 女 七十人(二組) 二年 男 七十二人 女 七十二人(二組)
三年 男 七十二人 女 五十九人(二組) 四年 男 八十二人 女 七十五人(二組)

興文高等小學校 (明治三十年二月)

修業年限 四箇年
學級數 九學級、教員數九人(外に裁縫專科教員二名)
生徒數 男 二百八十一人 女 百四十九人
一年 男 九十五人 女 五十四人(三組) 二年 男 八十五人 女 四十一人(三組)
三、四年 男 百一人(二組) 三、四年 女 五十四人(一組)

校長 興文尋常高等小學校長 稻垣知剛
職員 (三十年五月末)

高等科調導

稻垣知剛 志知初三郎 渡邊幾治 井倉 越 山川 環 河村道之助

第四章 學校令時代

第二編 明治維新後の本校

一九四

堤 道太郎 守屋基三郎 水谷徳三郎 本多さと 石原ヤサ

尋常科調導

小川圓次郎 河村潤二 安藤正通 大澤竹次郎 桑原 靜 稻葉 茂
近藤 需 月岡峯之助 竹井正巳

興文同窓會

〔興文同窓會〕 興文小學校に於ては未だ同窓會の設立がなく、明治二十九年六月、當時少壯ではあつたが、酒井道也・小倉兼吉の兩氏が之を慨歎して、其の設立を計畫し、小倉泰造・石田治市・伊藤由郎・森島富三郎・木島精造・樋谷佐太郎等と通じて東奔西走、一方當時興文學校長稻垣知剛の助力を得て、終に同年八月十六日第一回興文同窓會の發會を見、興文尋常小學校内に於て開會した。ついで興文同窓會規約等も設け、逐次隆盛に向ひ、明治三十年九月、興文同窓會誌第一號の發刊をさへ見、年二回の發行とした。興文同窓會設立主旨及び同規約は次の様であつた。

興文同窓會設立主旨

古人謂ヘルアリ、曰ク去ル者ハ日ニ疎シト、宜ナル哉。我等興文小學校ニ在ルヤ、其ノ間苦樂ヲ共ニシ、其親ミ兄弟ノ如クナリシモ、一朝學窓ヲ退クヤ、其ノ交情ハ日ニ疎キヲ加ヘ、復タ往時ノ如クナル能ハズ。豈ニ慨嘆ノ至リナラズヤ。予等茲ニ感アリ。同窓會ヲ組織シ以テ舊誼ヲ温メ彼我ノ氣脈ヲ通ジ、併セテ知識ヲ交換シ、身體ノ健全ヲ圖ラントス。請フ同窓ノ諸氏來リ、本會ヲ贊セラレシコトヲ。

興文同窓會設立主旨

興文同窓會規約

興文同窓會規約

- 第一條 本會ハ興文同窓會ト名付ケ事務所ヲ興文小學校内ニ置ク
- 第二條 本會ハ會員ノ交誼ヲ厚クシ、併セテ知識ヲ交換シ、身體ノ健全ヲ計ルヲ以テ目的トス
- 第三條 會員ハ興文小學校ノ關係者及ビ出身者ニ限ル
- 第四條 本會ノ目的ヲ達センガタメ毎年三回(一、四、十一月)通常會ヲ開キ夏期(八月)一回總會ヲ開會ス但シ開會期日ハ評議員決議ノ上之ヲ定ム。必要アルトキハ臨時總會ヲ開會ス
- 第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會頭 一名、幹事 二名、會計 二名、書記 二名、評議員(内六名ハ幹事會計書記ヲ以テ之ニ充ツ)

第六條 本會役員ノ職務左ノ如シ

- 一、會頭 本會ヲ總理ス
- 一、幹事 本會ノ事務ヲ處理ス
- 一、會計 專ラ會計ニ關スル記録ノ事務ヲ取り扱フ
- 一、書記 幹事ヲ輔佐シテ記録ノ事務ヲ取り扱フ
- 一、評議員 本會ノ維持及施行ノ方法ヲ協議ス

第七條 會頭ハ興文尋常高等小學校長ヲ推戴ス。校長欠員ノトキハ首席調導ヲ推薦ス、其他ノ役員ハ總會ニ投票ヲ以テ選舉シ其ノ任期ヲ一ケ年トス
但シ幹事會計書記ハ其三職ノ中執レヲモ兼任スルコトヲ得ズ

第四章 學校令時代

一九五

但シ缺員ヲ生ジタルトキハ次點者ヲ以テ之ニ充ツ

第六條 本會内ニ評議員會ヲ置ク

第七條 本會ノ備品金員ハ會計係其ノ責ニ當ルモノトス

興文同窓
會役員

興文同窓會役員

- 會 頭 興文尋常高等小學校長缺員 小川調導代理
- 幹 事 志知初三郎 安藤良治
- 會 計 桑原 靜 守屋基三郎
- 書 記 桐山誠一 小倉泰造
- 評議員 柴崎鐵吉 羽根田信次 日比野俊雄 飯沼憲吉(創立當時)

かくて成立した同窓會は、年々隆盛に向ひ、同窓生は來堂して互に歡談し、益々親善を加へ、意見發表に、或は著名講師の講演を傾聴して、智徳の啓發に努め、裨益する所大であつた。又特に母校を思ふの心厚く、常に校の發達に貢献した其の功大なるものがあつた。

毎年多くは盛夏の候に開會し、集ふ者回を重ねる度に増加し、既に明治四十四年に至つては第十二回の隆盛を見るに至つた。

校長の轉補 (校長の轉補) これより先明治二十八年高山高等小學校長より大垣興文高等尋常小學校長に補せられた稻垣知剛は、明治三十年七月廿一日岐阜地方視學に拔擢せられた。思ふに氏はよく前

校長長屋由郎の意圖を繼紹し、校のためにつくし、興文第一・第二共に増築の期に際してよく其の擴充に努め、夙に女子教育に見る所あつて技藝專習科を特設し、又二十九年の風水害に際しては、其の復興に努め、其の功勞大なるものがあつた。後任として同年十一月揖斐郡小島小學校長廣瀬三策が本校校長として來任した。

第五節 興文男子部・興文女子部

男子部
女子部の分

〔男子部・女子部の分離〕 明治三十年四月男女を別けて教育するが便宜なりとの議が起り、終に其の決定を見、郭町小學校には男子のみを收容し、興文尋常高等小學校男子部と稱し、外側町校舎には女子のみを收容して興文尋常高等小學校女子部と稱した。

教科目の
増加と課
程表

〔教科目の増加と課程表〕 大垣に於ては、是より先き時代の進運に隨つて、尋常小學の課程に於て唱歌・裁縫の兩科を修得せしめるの議が起つて、明治三十一年四月町長より知事に加設許可を申請し、同年五月許可せられて、興文小學校・六街小學校・久瀬川小學校・七聯小學校の尋常科に唱歌・裁縫の二科を加設した。當時に於ける本校尋常科の教科課程は次表に示す様であつた。

毎週教授時間並教科課程表

(尋常科 明治三十一年)

學年	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年	
	時間	課程	時間	課程	時間	課程	時間	課程
修身	三	依本縣小學校教則	三	依本縣小學校教則	三	依本縣小學校教則	三	依本縣小學校教則
讀書	九	同上	六	同上	六	同上	六	同上
作文	九	同上	三	同上	三	同上	三	同上
習字	五	同上	五	近易ナル漢字交リノ 短句日用文字	五	日用文字 日用書類	五	日用文字 日用書類
算術	六	同上	七	依本縣小學校教則	七	依本縣小學校教則	七	依本縣小學校教則
體操	四	遊 戲	三	依本縣小學校教則	三	同上	男三 女二	普通體操 兵式體操 遊戯・普通體操
唱歌	一	單音唱歌	一	單音唱歌	一	單音唱歌	一	單音唱歌
裁縫	〇		〇		〇		女三	運針法
計	二八		二八		二八		男二八 女三〇	

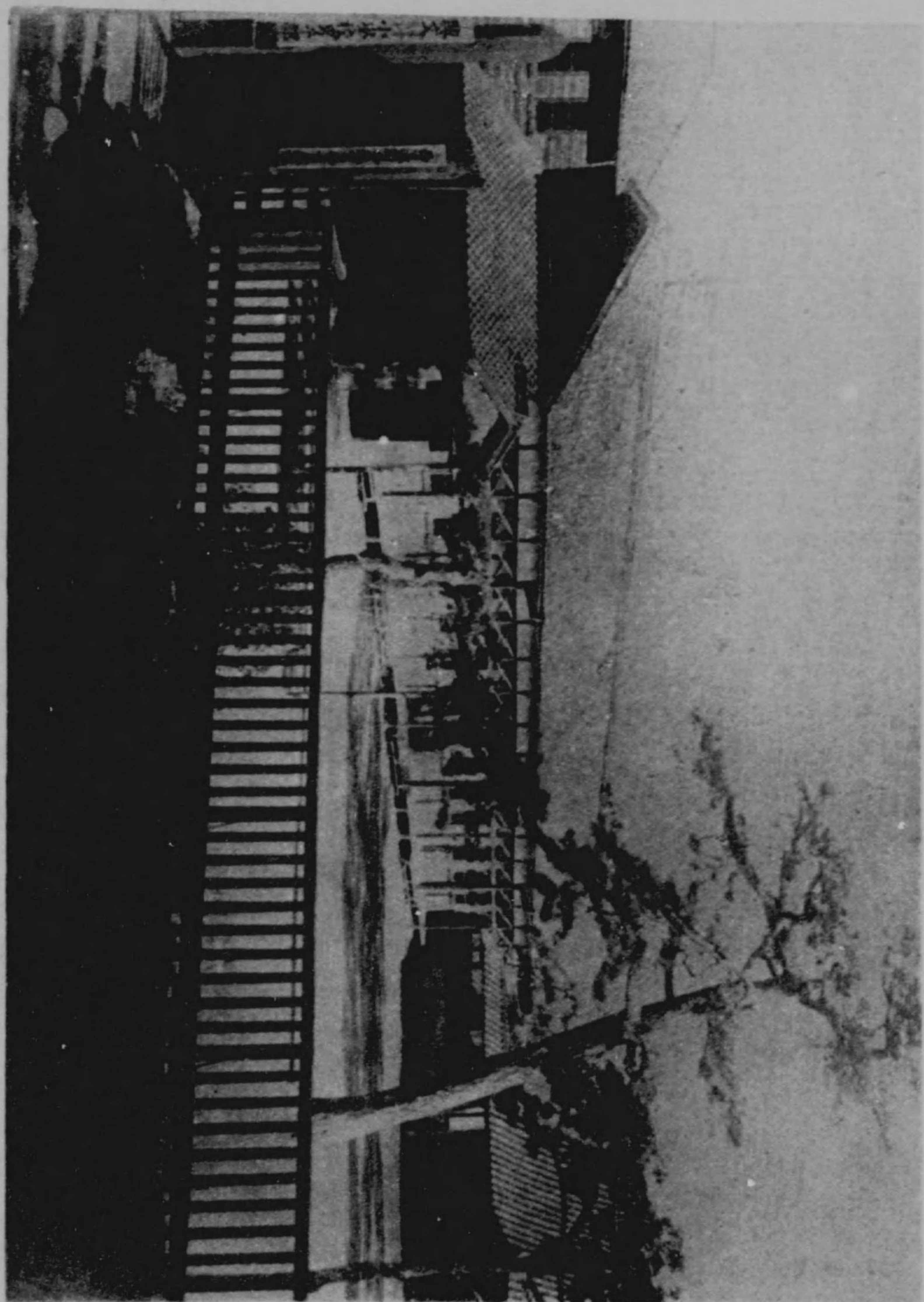
樓上墜落
事變

〔樓上墜落事變〕 明治三十一年十二月一日、大垣町島川せん外七名の孝子義僕の表彰を縣知事より受けた。

興文小學校に於ては、是等善行者を兒童に紹介して其の來歴を知らしめ、美德を表彰して兒童の品性陶冶に資したいと思ひ、同年十二月十三日をトして表彰式を行ひ、兩興文校兒童にも參列せしむる事とした。會場として豫め興文尋常高等小學校女子部校庭が充てられてゐ

たが、前夜來の大雨に禍せられて、遽に會場を變更し、女子部西部樓上にて舉行し、興文兩校全生徒中尋常科第四學年以上の生徒、男子三百二十八人、女子二百四十八人、計五百七十六人、外に來賓四名、善行者七名、職員十三名が參列する事となつた。然るに式始まつて間もなく、一大音響と共に會場の二階梁(厚六寸八分五厘 幅一尺二寸五分)中央より折斷して階上の床は大破し、參列者の内三百五十餘名は雪崩を打て墜落した。このために負傷者百八十餘名を出し、中重傷者三十餘名、他は輕傷者であつた。この不慮の災禍に、幸にも死者一名も出さなかつた事は、不幸中の幸と云はねばならぬ。この變災勃發するや、直に應急救助處置宜しきを得て、醫員淺井俊員・今井光齋・吉益雄太郎・仁林虎治郎・松野熊輔・田中令吉・菅原廣の諸氏急遽馳せつけ、治療に従つた。縣に於ては當日稻垣知剛縣屬を派して實地を調査せしめ、翌十四日安樂本縣知事は稻垣縣屬と共に實地視察をなし、假療養所に臨んで、親しく患者を見舞ひ、職員一同に對して懇切なる慰藉の辭を與へた。この度の災禍に對し各地方の同情頗る集り、縣知事を初めとして多額の見舞金・治療金の寄附を得、其の總額凡そ五百三十餘圓、百九十餘件に上つた。それ等は患者の治療費に充てられた。

時の校長は廣瀬三策であつたが、深く其の責めを感じ自ら決する所があつたが、各地方の絶大なる同情に遇ひ、感謝恐懼措く能はず、東奔西走、患者の見舞慰問に力を盡し、復舊に努め、以て世の熱誠に對へた。



(町郭) 部子男校學小 常高 文興

學校一覽
〔學校一覽〕

興文尋常高等小學校（明治三十一年）

學校所在地 郭町男子部・外側町女子部
 校下町區名 郭・袋・外側・牛屋・馬場・新馬場・切石・番組・鳥見・鳩部屋・室・弓・旗・桐ヶ
 崎・栗屋・步行・田口・田・東長・西代官・東代官・新地・高橋・西長・清水・東今
 岡・西今岡・堤通り田・西田・東水主・西水主・鷹匠・宮・西船・東船・俵・竹嶋・
 南寺内・世保

校下戶數 二千七十七戶

校下人口 九千五百五十四人

男 四千七百八十三人

女 四千七百七十一人

校舍校地

教 室	教 室	其 他	敷 地	體 操 場
男子部	女子部	男子部	男子部	男子部
九十三教室	四十五室	十五室	六百二十五坪	四百六十二坪
百七十一坪	四十二坪	百二十五坪	六百六十一坪	六百六十二坪
			六百六十八坪	六百六十八坪

第四章

學校令時代

第二編

明治維新後の本校

其 他 男子部 二百三十八坪
女子部 五百十三坪

修業年限 尋常科四箇年、高等科四箇年

學級數 尋常科八學級、高等科八學級 裁縫專修科一學級

授業料 尋常科一年八錢、同二年十錢、同三年十二錢、同四年十五錢
高等科一年二十五錢、同二年三十錢、同三年三十五錢、同四年四十錢
(但し外來生に對しては尋常一二年には二錢、三年には三錢、四年には五錢、高等科には五錢増徴收のこと)

在籍兒童

各學年兒童

總計	九百八十人
尋常科兒童	五百一十一人
高等科兒童	四百六十九人
各學年兒童	
尋常科	
一學年	男 六十九人 女 五十三人
二學年	男 六十六人 女 六十四人
三學年	男 七十六人 女 六十三人
四學年	男 六十九人 女 五十一人
高等科	
一學年	男 百三十人 女 七十三人

外來兒童 尋常科 男 三十八名 女 四十二名
高等科 男 八十名 女 十九名

裁縫專修科 教員數 三人 組數 三組 在籍生徒 四十五人

教科目 修身・讀書・裁縫・作文・習字・家政・算術

每週授業時數 三十四時間 授業料 校下十五錢 外來二十錢

學校經費 四千一百圓四十三錢

學校職員

廣瀬三策	小川圓次郎	竹井正巳	篠田錦策	谷恒助
井倉越堤	道太郎	河村道之助	安藤正通	大澤竹次郎
桑原靜稻	葉茂	守屋基三郎	河村潤二	近藤需
犬飼勘市	本多さと	水谷徳三郎	石原やす	仙波すま
高木常雄	月岡峯之助	魯せい		

學校所在地 興文尋常高等小學校 (明治三十二年六月)
三十一年度に同じ

第四章

學校令時代

校下戸數	二千七十戸
校下人口	九千五百一九人
校下町區名	三十一年度に同じ
校舍校地	同
修業年限	同
學校數	男子部 尋常科四學級、高等科五學級 女子部 尋常科四學級、高等科四學級 裁縫專修科一學級
授業料	三十一年度に同じ
在籍兒童	一千六人

總計	一千六人
尋常科兒童	五百三十八人
高等科兒童	四百六十八人
各部學年兒童	男 三百二名 女 二百三十六名 男 二百八十一名 女 一百八十七名

男子部尋常科	一學年 八十三人	二學年 六十九人
	三學年 六十九人	四學年 八十一人
男子部高等科	一學年 七十一人	二學年 百十四人
	三學年 五十七人	四學年 三十九人

女子部尋常科	一學年 六十人	二學年 五十三人
	三學年 六十六人	四學年 五十七人
女子部高等科	一學年 五十九人	二學年 六十四人
	三學年 三十二人	四學年 三十二人
外來兒童	尋常科 男子二十人 女子十八人	高等科 男子百二十一人 女子五十五人

裁縫專修科

學級數 一學級 生徒數 五十人

教員數 專任一人 兼任五人

每週授業時數 三十四時間 授業料 校下十五錢 外來二十錢

學校經費 四千二百二十圓五十八錢五厘

學一校職員	廣瀬三策 近藤乙吉 竹井正巳 堤道太郎 河村道之助
大澤竹次郎	稻葉茂 河村調二 近藤需 大飼勘市 清水經造
堀部小一郎	村田とよ 水谷徳三郎 月岡峯之助 石原やす 田中休藏
魯せい	岡田謙之助 山田貞吉 永井きん 矢橋莊藏 篠田錦策(休職)
渡邊幾治(同)	谷恒助(同) 井倉越(同) 守屋基三郎(同)

第五章 改正學校令時代

第一節 教育制度の整備

教育制度の整備

日清戦役後の我國は一般國民の自覺を高めたのみでなく、産業界は全くその形を更へ、新しい時代に轉向した。各種産業の活潑なる活動は明治維新後求められてゐた産業生活の世界を、國民の前に展開したのである。この状態は教育事實の上に反映し、教育制度の國家的統一へと急速な進境を示した。現在の我が學校教育制度はこの時に成立したものであつて、その後部分的な改正を経てゐるが、その根本規定はその儘に明治大正に及んだものが多い。明治維新後要求されて來た近代的學校教育制度は明治三十年代に入つて初めて整備されたものであつて、その間三十年を經過してゐる。而して又その後國民學校制が布かれる迄四十年間、この學校教育制度が我が國の教育を統制して來たものである。

小學校に就いて見るに、明治三十三年八月勅令を以て小學校令が改正せられ、同時に小學校令施行規則が公布せられ、小學校の教育が統轄の下に置かれることゝなつた。

改正小學校令は、これを分つて、第一章總則、第二章設置、第三章教科及編制、第四章設置、第五章就

總則

學、第六章職員、第七章費用負擔及授業料、第八章管理及監督、第九章附則となつてゐる。左に其の要旨を掲げて其の整備の跡を見る事にする。

〔總則〕第一條に「小學校ハ兒童ノ心身ノ發達ニ留意シテ、道德教育及國民教育ノ基礎並其ノ生活ニ必須ナル普通ノ智識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トナス」と云ひ、第二條に「小學校ハ之ヲ分テ尋常小學校及高等小學校トス、尋常小學校ノ教科ト高等小學校ノ教科トヲ一校ニ併置スルモノヲ尋常高等小學校トス、市町村町村學校組合又ハ其ノ區ノ負擔ヲ以テ設置スルモノヲ市町村立小學校トシ、私人ノ費用ヲ以テ設置スルモノヲ私立小學校トス」云つてゐる。

教科及び編制

〔教科及び編制〕尋常小學校の修業年限は四箇年とし、高等小學校の修業年限を二箇年、三箇年又は四箇年とした。尋常小學校の教科目は修身・國語・算術・體操とし、土地の情況に依つて、圖畫・唱歌・手工の一科目又は數科目を加へ、女兒の爲には裁縫を加へることを得るものとした。又高等小學校の教科目は修身・國語・算術・日本歴史・地理・理科・圖畫・唱歌・體操とし、女兒の爲に裁縫を加へた。而して修業年限二箇年の高等小學校に於ては、理科・唱歌の一科目若しくは二科目を缺き、又手工を加へることを得るものとし、修業年限三箇年以上の高等小學校に於ては、唱歌を缺き、男兒の爲に、手工・農業・商業の一科目、若しくは數科目を加へた其の一科目を學習せしめ、女子の爲に手工を加へることを得るものとし（明治三十六年三月二十六日改正）修業年限四箇年の高等小學校に於ては、英語を加へることを得るものとした。また小學校の教科目中、兒童身體の情況により學習すること能はざるものは、これを缺くことを許した。

新令の特
色
〔新令の特色〕

- (一) 教科目の数を成る可く減じて、力を必須科目に集注せしめ、日常生活の用に役立たしめんとしたこと。
- (二) 尋常小學校の教授に用ふる漢字を凡そ千二百字内外に制限して、兒童の學習を容易有効ならしめんとしたこと。
- (三) 従來の試験による方法の弊害を認め、之を廢して日常考査による方法を探りしこと。
- (四) 小學校の毎週教授時間数を減じて、一層兒童心身の發達に適應せしめんとしたこと。
- (五) 義務教育年限を四箇年としたこと。
- (六) 高等小學校は修業年限に應じて、その教科目を斟酌し得るやうにしたこと。
- (七) 雇傭に依て學齡兒童の就學を妨ぐることをなからしめたこと。
- (八) 義務教育の性質より小學校の授業料は徴收しない事を本體としたこと。
- (九) 小學校圖書審査委員會の組織を改正したこと。
- (一〇) 小學校教員として、正准教員以外に代用教員を認めたこと。

小學校令
施行規則

〔小學校令施行規則〕「小學校令」の改正に伴つ、同月二十一日「小學校令施行規則」を定めた。同規則は(一)教科及び編成、(二)設備準則、(三)就學、(四)教員檢定及び免許狀、(五)職員、(六)授業料、(七)

等である。

教科書制
度

學務委員、(八)代用私立小學校、(九)幼稚園及び小學校に類する各種學校、(一〇)附則の十章二百二十三條より成り、「小學校令」の實施上必要な事項を詳細に定めた。

〔教科書制度〕小學校令に於ては、教科用圖書に關しては小學校圖書審査委員會を設けて決定せしめることとしたが、小學校の教科書に就いては従前より問題があつた。帝國議會に於ても明治二十九年より教科用圖書編纂に就いて建議が提出されてゐた。明治三十三年四月には修身教科書調査委員會が出来て、修身教科書の編纂に着手してゐた。然るに明治三十五年に所謂教科書事件が起きて、従來の教科書採用に關する暗黒面を暴露するに至つた。こゝに於て教科書國定の議が起り、直ちに文部省に於て編纂に着手し、明治三十七年より國定教科書が使用されるに至つた。こゝに於て教育制度が整備されたと共に、國民教育の内容も國家の統制下に立つこととなり、制度内容共に完全な統一を受けることとなつた。

第二節 興文尋常小學校・興文高等小學校

〔興文尋常小學校・興文高等小學校の改變〕明治三十二年の頃は漸く市民に國民教育の必要を痛切に感ぜしめ、高等科に入學するものは連年増加の傾向を示した。従來當町内に於ては尋常小學校は、興文・六街・久瀬川・七聯の四校があつたが、高等科の設置は僅かに興文・六街の二校に止まつた。こゝに於て久瀬川・七聯小學校兒童にして高等科に入學せんとするものは、興文、或は六街の二校の内、其の一つに入學して教育を受けねばならなかつた。然

興文尋常
小學校、
興文高等
小學校の
改變

し高等科入學兒童數の少い明治三十年前迄は、部内の高等科生徒を兩校に收容する事も出来たが、教育の進歩は連年益々高等科入學兒童數増加の勢を見せ、三十二年に至つては最早や興文・六街共に他校區の高等科兒童を收容する事が困難となり、終に轉入兒童を拒絶するに至つた。こゝに於て折角其の進展を見た教育も大に憂慮すべき難事に遭遇し、高等科志望生徒は兩校區に寄留或は轉籍等の煩事を要し、かくては高等科入學兒童數の減退を將來するの痛恨事を免れなかつた。七聯・久瀬川兩校區に於てはいたくこれを遺憾とし、各區に高等科設置を要請したが許されず。又大垣町當局としても此等紛議の收拾に躍起となり、部内小學校の廢置分合を行ひ、六街・興文兩校の高等科を合併し一大校舍を建築することを町會に附議したが、是亦事情の許さざる所となり、遂に其の成立を見ることを得なかつた。

斯る狀勢の下に校舎の新増築は許されず、校舎は現狀維持を以て、興文尋常高等小學校に高等科併置を解除し、更に大垣町内久瀬川、及び七聯小學校區と興文小學校區を合併し、更に興文高等小學校區を設け、興文高等小學校を設置することとなり、明治三十三年三月十九日岐阜縣知事野村政明の認可を経て、こゝに興文尋常高等小學校の高等科を廢止し、新に興文高等小學校區を設けて、七聯・久瀬川・興文三校合同の興文高等小學校を設置することとなり、同校は元興文尋常高等小學校女子部の跡外側町に位置し、高等科男子の教育にあたり、元興文尋常高等小學校男子部は、興文尋常小學校と改稱して、従前通り郭町にあつて尋常科

の教育にあたり、高等科の女子も收容した。

扱て開校にあつて七聯・久瀬川・興文・三區の高等科を一校に收容することは、到底其の校舎狹隘のため、忽ち支障を生じて、終に同年三月三十日高等科分教場の設置を申請し、興文高等小學校分教場として、久瀬川小學校内に二教室、七聯小學校内に一教室の分教場を設置するに至つた。

斯くの如く分教場を設置して教授してゐたが、本校より分教場迄の距離も遠く、兒童數の増加、收容難等、教授管理の統一を缺き、教育を阻害する點が多かつた。かくて輿論は又沸騰し、各校共に高等科併置を主張するに至つた。町會も亦此の意見に一決し、終に明治三十三年十二月縣に申請して、先きに設置したる、興文・七聯・久瀬川合併になる興文高等小學校を廢し、新に明治三十四年四月一日より各校に高等科を併置することとなり、併せて分教場をも閉鎖することとした。

こゝに於て興文小學校は又郭町外四十五ヶ町區より成る興文校區の獨立となり、單獨の興文高等小學校は新に組織を變更することなく、舊位置外側町に、興文尋常小學校は従前通り郭町にあつて益々其の發展を見たのである。

加設科目
〔加設科目〕 改正小學校令に準據して本校に於ては明治三十四年四月高等科に英語を加設し、尋常科には唱歌科、裁縫科を加設して教授した。

高等科の英語は一年より四年迄教授し、教科書として齋藤秀三郎著、プライマーを使用する事となり、時間数は一週二時間とし、一時間は國語科中より採つたもので、一週全科の教授時間数を二十九時間とした。

又尋常科の加設科目唱歌は男子に於ては一週間教授時數二時間とし、體操科より一時間、國語科より一時間を減じて之に充て、女子に於ては唱歌は男子と同じくし、裁縫に於ては尙ほ一時間は體操科中より採り、一時間は増設することとなり、全科一週の教授時數を二十八時間とした。

大垣町立
小學校
業務
徴收
細則

〔大垣町立小學校授業料徴收細則〕 改正小學校令に準據して大垣に於ては小學校授業料細則を左記の様に定めた。

第一條 本町各小學校授業料左ノ如シ

尋常小學校月額金十錢 高等小學校月額金三十錢

第二條 授業料ノ納期ハ毎月十日トス、但休日ニ當リタルトキハ翌日トス

第三條 兒童ノ保護者貧窮ニシテ公費ヲ免除セラレタル者ニ對シテハ町長ハ調査ノ上免除又ハ輕減スルコトアルベシ

第四條 尋常小學校ニ於テハ一家ノ兒童同時ニ二名以上就學スルトキハ其一名ハ全額ヲ徴收シ他ハ半額徴收ス

第五條 一ケ月中授業日數二週間ニ滿タザルトキハ其月分半額ヲ徴收ス

第六條 兒童ノ出席一ケ月中一週日ニ滿タザルトキハ其月分半額ヲ徴收ス

教育勅語
及本配付
心及児童
得制定

〔教育勅語謄本配付及び児童心得制定〕 明治三十三年五月皇太子殿下御成婚の御慶事に當り、本校に於ては其の紀念として児童に教育勅語謄本を謹製配付し、職員生徒一同益々 聖旨に副ひ奉らむことを誓ひ、又同日児童心得を制定配付し、朝夕之を服膺し、光輝ある興文校の歴史に顧みて其の體面を汚損することなく、益々學業に勉勵せしめた。

勅語謄本及び児童心得は濫りに喪失せしめざる様絶えず大切に保存せしめ、若し紛失したるときは、特別の事情を除くの外、再下附は許さず、修身教授の初めにあたつて一同に之を朗誦せしめた。

當時制定せられた児童心得を左に摘記して置く。

児童心得

児童心得

我が校児童たるものは常に教育に關する勅語の旨趣を奉體し忠孝至誠を旨として左の條々を守るべし

- 一、朝夕帝國の臣民たること興文の児童たることを省思すべし
- 二、父母師長の訓誨及法令規則を遵守すべし
- 三、男兒は剛毅なるべく女兒は貞淑なるべし

四、上級の者は下級のものを愛し下級のものは上級のものを敬ふべし

児童貯金の奨励

我が校児童たるものは常に教育に關する勸諭の旨趣を奉體し考案を旨として左の條々を守らるべし

- 一、朝夕諸國の臣民たること興文の児童たることを省思すべし
- 二、父母師長の訓諭及法令規則を遵守すべし
- 三、男兒は剛毅なるべく女兒は貞淑なるべし
- 四、上級のものは下級のものを愛し下級のものは上級のものを敬ふべし
- 五、容儀は端正を主とし言語は明晰を旨とし
- 六、私慾を抑へ公徳を守らるべし
- 七、廉恥を重んじて言行を一致せしむべし
- 八、節儉を尙び清潔を重んずべし
- 九、課業を怠るなく其應用に留意すべし
- 十、心を快活にして運動を盛にすべし

〔児童貯金の奨励〕興文校に於ては夙に質素儉約を奨励し、児童心得中にも之を定めた。

既に明治二十八年に於て其の服制を定め、高等科生は總べて着袴、着帽となし、それ以下の學年に於ても可及的に之を奨励したのに就て見るに、極めて質素を旨としたものであつた。即ち絹其の他華美の服裝を禁止し、容姿を整へ、清潔を旨とし、手拭鼻紙等を所持せしめた。寒氣激烈、雨

雪の時と雖も、病氣或は身體虛弱者以外の者には、絶対に外套・肩掛・襟巻・手袋・足袋・上草履等の使用を禁止し、質實剛健の氣風の養成に勉め、冗費の節減を計つた。

かくて明治三十三年に至り、積極的に児童貯金規定を作り、児童小遣錢の貯蓄を奨励した。児童貯金に就いては現金は一切學校に於ては取り扱はず、時々學校に於て其の成績を檢閲し、引出しの際は必ず學校の認印を要することとした。其の奨励法宜しきを得て、年々其の成績向上し、貯蓄の美風を馴致した。三十三年以降數年間の貯金成績は左の様であつた。

貯金成績統計

年 度	在 籍 數	貯 金 數	貯金人員百分比	貯 金 總 額	前年度に對する百分比
三十三年	五三五	二五六	四七・三	一〇一・五三二	—
三十五年	五七三	三八〇	六六・三	一二七・一四〇	〇・二〇九
三十八年	五七三	四〇八	七一・二	二二六・四一八	〇・四五九
四十年	五七二	四三八	七六・六	三〇〇・四一〇三	〇・二一七
四十一年	六〇二	四八六	八〇・七	四七六・四・五七七	〇・三六九

〔興文尋常小學校・興文高等小學校一覽〕

校下町村區名	興文高等小學校 (明治三十三年)
校下町區名	興文校下・久瀨川校下・七聯校下
校下戸數	三千四百十二戸
校下人口	一萬五千七百九十五人

四、上級の者は下級のものを愛し下級のものは上級のものを敬ふべし

児童心得

我が校児童たるものは常に教育に關する勸諭の旨趣を奉體し忠孝至誠を旨として左の條々を守らるべし

- 一 朝夕帝國の臣民たること興文の児童たることを思ふべし
- 二 父母師長の訓諭及法令規則を遵守すべし
- 三 男兒は剛毅なるべく女兒は貞淑なるべし
- 四 上級のものは下級のものを愛し下級のものは上級のものを敬ふべし
- 五 容儀は端正を主とし言語は明晰を旨とすべし
- 六 私慾を抑へ公徳を守らるべし
- 七 廉耻を重んじて言行を一致せしむべし
- 八 節儉を尚び清潔を重んずべし
- 九 課業を怠るなく且つ其の應用に留意すべし
- 十 心を快活にし運動を盛にすべし

興文小學校

雪の時と雖も、病氣或は身體虚弱者以外の者には、絶対に外套・肩掛・襟巻・手袋・足袋・上草履等の使用を禁止し、質實剛健の氣風の養成に勉め、冗費の節減を計つた。

児童貯金の奨励

かくて明治三十三年に至り、積極的に児童貯金規定を作り、児童小遣錢の貯蓄を奨励した。児童貯金に就いては現金は一切學校に於ては取り扱はず、時々學校に於て其の成績を檢閲し、引出しの時は必ず學校の認印を要することとした。其の奨励法宜しきを得て、年々其の成績向上し、貯蓄の美風を馴致した。三十三年以降數年間の貯金成績は左の様であつた。

貯金成績統計

年 度	在 籍 數	貯 金 數	貯金人員百分比	貯 金 總 額	前年度に對する百分比
三十三年	五三五	二五六	四七・三	一〇一・五三二	—
三十五年	五七三	三八〇	六六・三	一二七・一四〇	〇・二〇九
三十八年	五七三	四〇八	七一・二	二二六・四一八	〇・四五九
四十年	五七二	四三八	七六・六	三〇〇・四一〇三	〇・二一七
四十一年	六〇二	四八六	八〇・七	四七六・四・五七七	〇・三六九

〔興文尋常小學校・興文高等小學校一覽〕

興文尋常小學校・興文高等小學校

- 校下町村區名 興文校下・久瀨川校下・七聯校下
- 校下戸數 三千四百十二戸
- 校下人口 一萬五千七百九十五人

修業年限	四箇年
學級數	十一學級 教員數 十五人
生徒數	男 三百二十二人 女 百七十六人
校舍校地	一年 男 百四十人 女 九十五人 二年 男 六十九人 女 五十一人 三年 男 八十七人 女 二十七人 四年 男 二十六人 女 十三人 教室十一(二百坪) 諸室五(百二十坪) 其他七(三十七坪) 敷地八(二百二十四坪) 體操場四(千十六坪) 其他二(百九十四坪)
分校數	二
學校經費	三千六百九十六圓三十九錢
校長	近藤乙吉
職員	近藤乙吉 窪田信之 堤 道太郎 松野惣市 河村道之助 松久千代松 勝野金吾 水谷徳三郎 篠田錦策 渡邊幾治 守屋基三郎 守屋健藏 川瀬卯三郎 河村琴惠
興文高等小學校 (明治三十四年)	
校下町村區名	郭町外四十五ヶ町
校下戸數	二千二十四戸

校下人口	九千四百六十二人
修業年限	四箇年
學級數	七學級 教員數 十二人
生徒數	男 二百四十七人 女 百四十四人
校舍校地	一年 男 六十七人 女 五十一人 二年 男 六十四人 女 五十七人 三年 男 六十五人 女 二十六人 四年 男 五十一人 女 十人 教室十二(百六十九坪五合) 諸室四(六十四坪) 其他(二十坪八合) 敷地一(三百九坪三合) 體操場(七百六十二坪) 其他(五百二十四坪五合)
學校經費	二千四百四圓九十五錢
校長	近藤乙吉
職員	近藤乙吉 窪田信之 堤 道太郎 石原賢三 河村道之助 片山健策 勝野金吾 野村喜一 魯 せ い 川上信次郎 篠田金作(休職) 飯尾駒太郎
興文尋常小學校 (明治三十三年)	
生徒數	男 二百七十一人 女 二百三十一人
校長	竹井正巳

興文尋常小學校 (明治三十四年)

校下町村區名	興文高等小學校に同じ	
校下戸數	同	
校下人口	同	
修業年限	四箇年	
學級數	八學級 教員數 九人	
生徒數	男 三百十三人	女 二百六十七人
校舍校地	一年 男 九十四人 女 八十三人	二年 男 七十九人 女 七十三人
學校經費	三年 男 七十六人 女 五十七人	四年 男 六十四人 女 五十四人
職員	校長 竹井正巳	教室九(百六十九坪) 諸室八(六十坪五勺) 其他五(七十二坪一合九勺)
	竹井正巳	敷地一(三百六十坪五合九勺) 體操場二(一千三百坪) 其他(百八十五坪六合五勺)
	土井良貫 月岡峰之助 栗田重次 多賀義雄	竹内順作 近藤 需 清水經造

第三節

興文男子尋常小學校・興文女子尋常小學校

〔高等小學校増設と校名改稱〕 興文學校區に於ては、從來興文尋常小學校と、興文高等小學校の二校を設置してゐたが、連年の就學兒童の増加と高等科修學生徒の増加と相俟ち、又其の教育上より見て、男女同一學校の設置と、男女分設學校設置との適否を考へる時、各男女に適應せる教育は男女分設に依るべきが適切なりとの意見に基づいて、明治三十五年三月、興文尋常小學校、及び興文高等小學校を廢止し、新に興文男子尋常小學校(郭町)、興文女子尋常小學校(外側町)を設置し、二校に各高等科を併置して、前者を興文男子尋常高等小學校、後者を興文女子尋常高等小學校と改稱した。かくて興文學校區には高等小學校の増置を見、男女を分離して適性な教育をすることゝし、同年四月一日開校なつた。

〔外側町に校舎新築〕 明治三十五年の始、本校郭町校舎、即ち興文男子尋常高等小學校は明治二十三年建設以來の儘であつて、時代の進運につれて最早や設備不完全、教室狹隘、且つ位置不適當等不都合な點が多かつた。縣は是が増新築を命じたが、大垣町に於ては事情未だ是が實行を許さず。是に於て大垣町長代理吉村八は縣に請うて増新築の延期を願ひ出で、三十五年度中には増新築移轉を行ひ、教育の發展を期する旨を述べ、其の計畫をも縣に具申し

た。

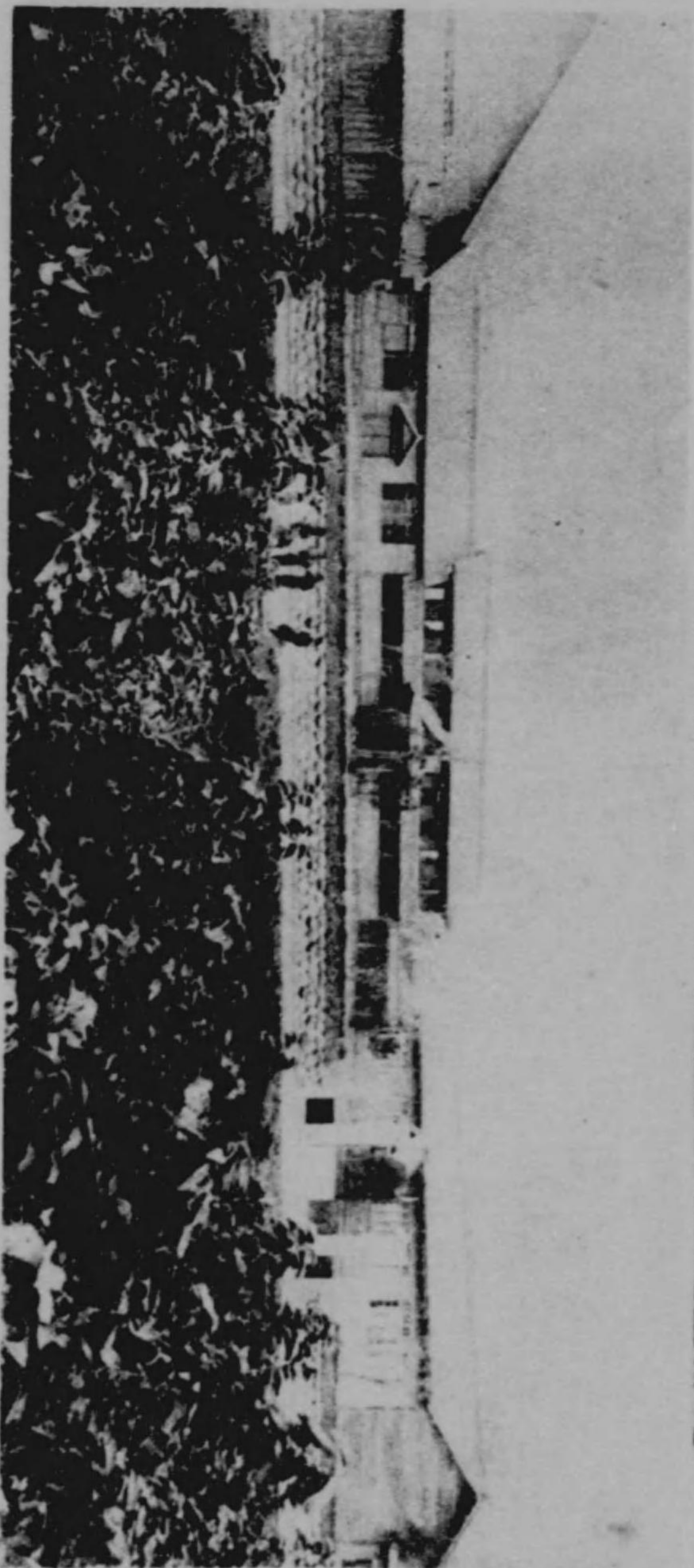
次で直に、興文男子尋常高等小學校移轉新築増築の事業に着手し、現在位置の不適當なるに鑑みて、閑靜なる外側町地内百八十八番ノ一・百八十九番ノ二ノ一・百八十九番ノ二ノ二・百八十八番ノ二・百八十六番ノ一・百八十六番ノ二・百八十九番ノ一等の田畑・山林千六百七坪九勺の地(圖面参照)を買入れ、校地と定めた。

此の事業にあたつて、大垣町長鈴木徹・矢橋庄藏、移轉改築委員監督者となり、安田全左衛門・中島武三・淺野新・早川啓一・河地重助等建築委員に任命せられ、日夜事業に奔走して其の進捗をはかつた。

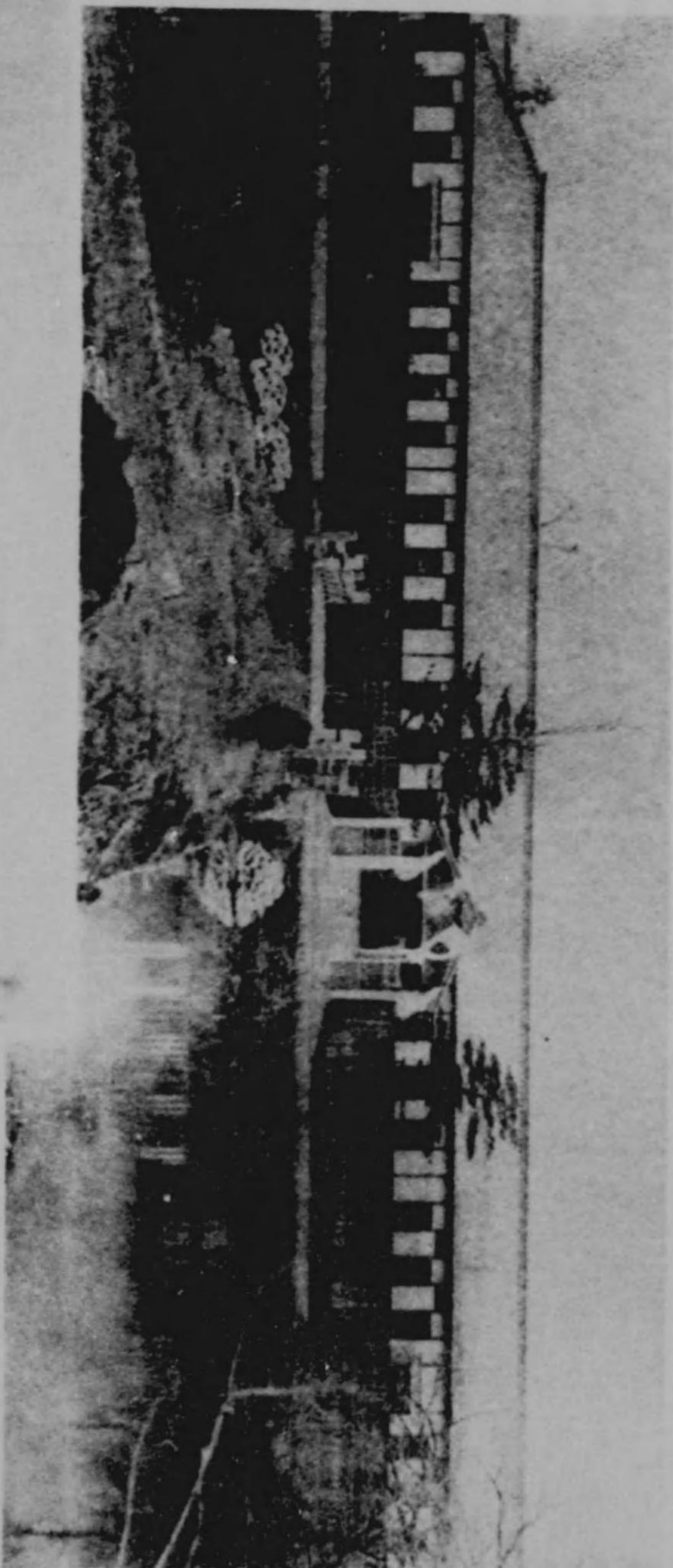
建築費總額一萬二千二百三十五圓九十六錢五厘であつた。先の郭町校舍敷地一千四百六十六坪二合五勺を一萬一千四百六十餘圓で賣却し、外側町敷地を三千六百八十餘圓で買收し、殘金八千餘圓を建築費の中に入れて建造する事となつたものであつた。

尤もこの建築事業は郭町校舍の使用に耐へ得るものはこれを改築移轉し、他は概ね新増築によつたものであつた。今其の新に建築せられた校舎は坪數三百二十一坪二合五勺、御眞影室(二坪)、講堂(五十坪)、教室(百九十坪)、職員室(十五坪)、當直室(二坪二合五勺)、小使室(五坪)、湯沸所(六坪)、物置所(六坪)、應接所(四坪)、圖書標本室(二十坪)、器械室(十五坪)、便所(十六坪)等であつた。(圖版参照)

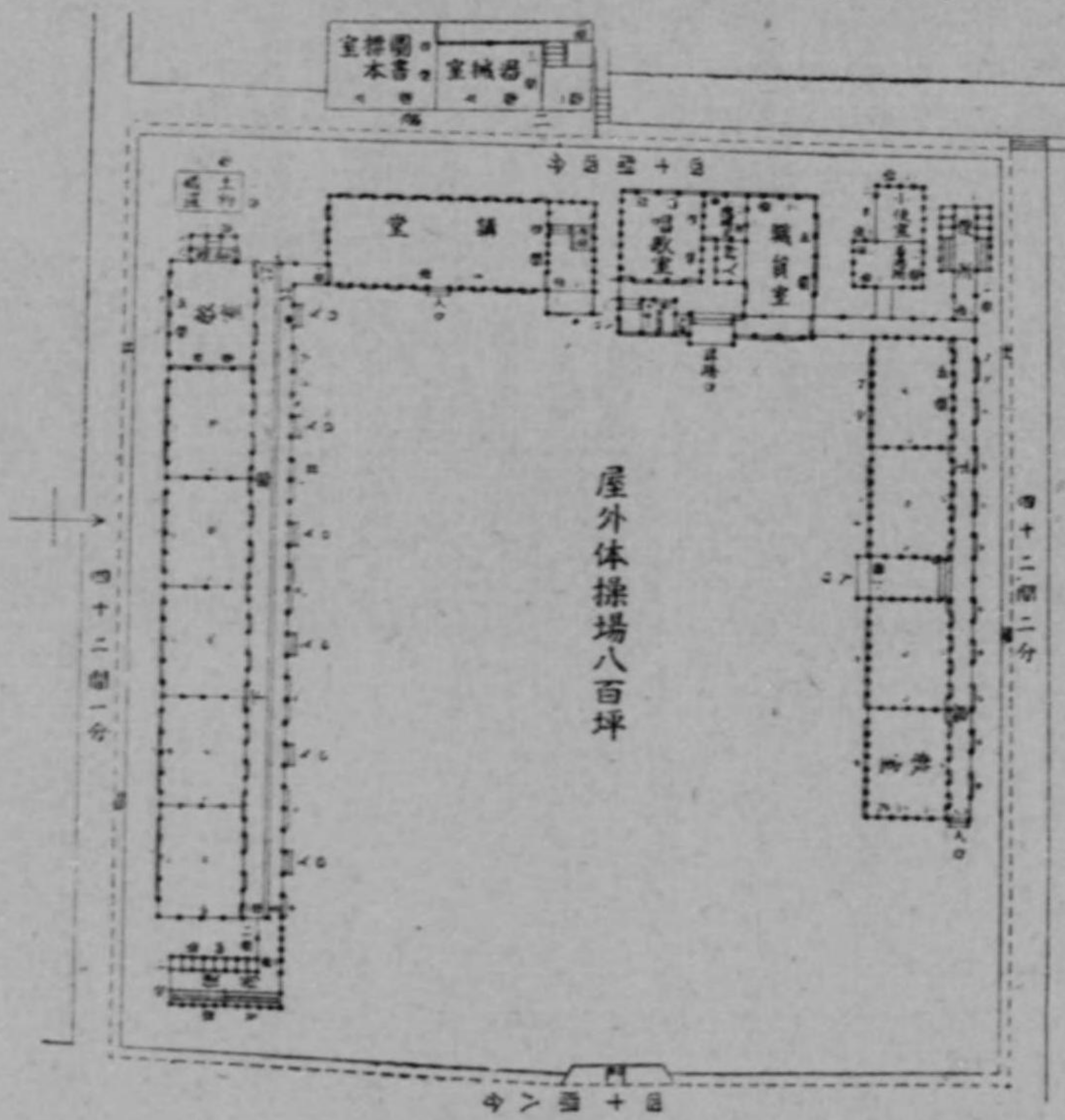
興文女子尋常高等小學校



移轉當時の興文男子尋常高等小學校



興文男子尋常高等小學校平面圖



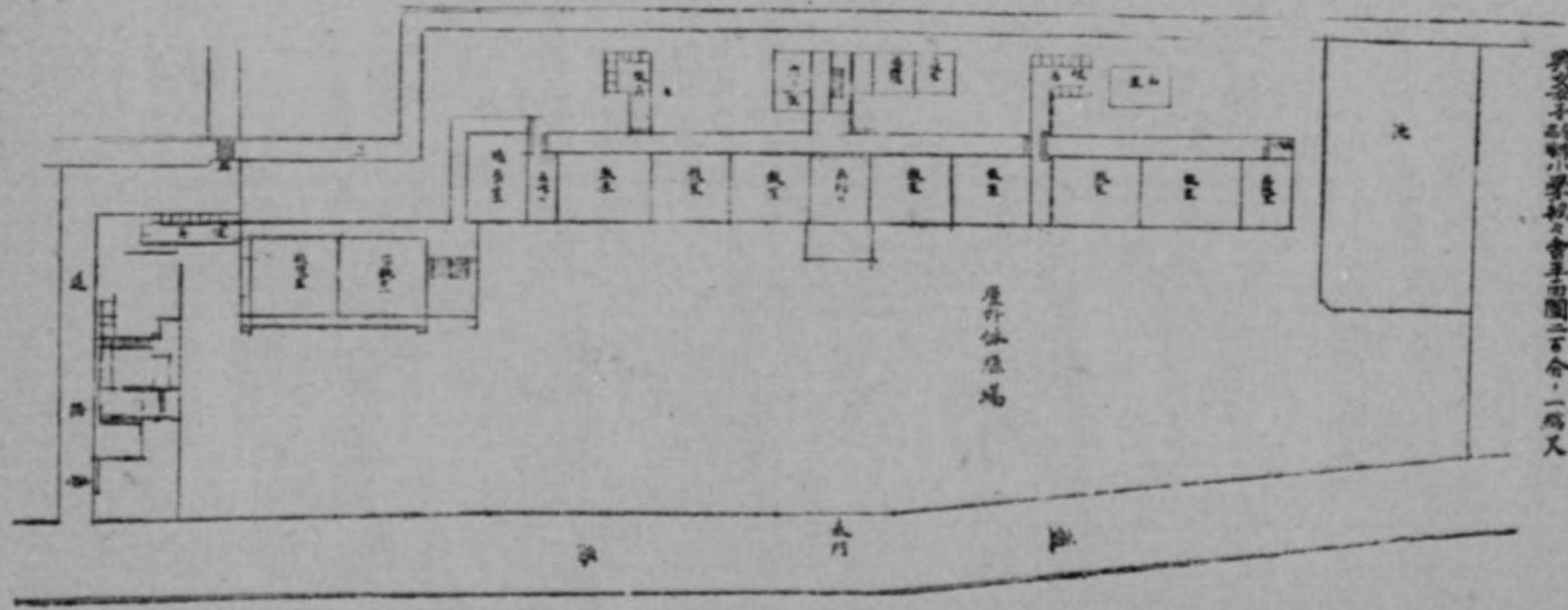
かくて建設を急ぐ外側町校舎は、三十五年十二月十五日校舎の一棟が竣工して、郭町校舎より男子尋常科児童、及び高等科一學

年を茲に移して教授することとなり、翌三十六年八月工事は全部竣工して、全児童を移して教授することとなり、十月十五日多數顯官の臨場を仰ぎ、興文小學校全生徒参列し、盛大なる移轉落成式を舉行了。同日又男女合同第一回大運動會を新校庭に舉行し、

第五章

改正學校令時代

興文女子尋常高等小學校平面圖



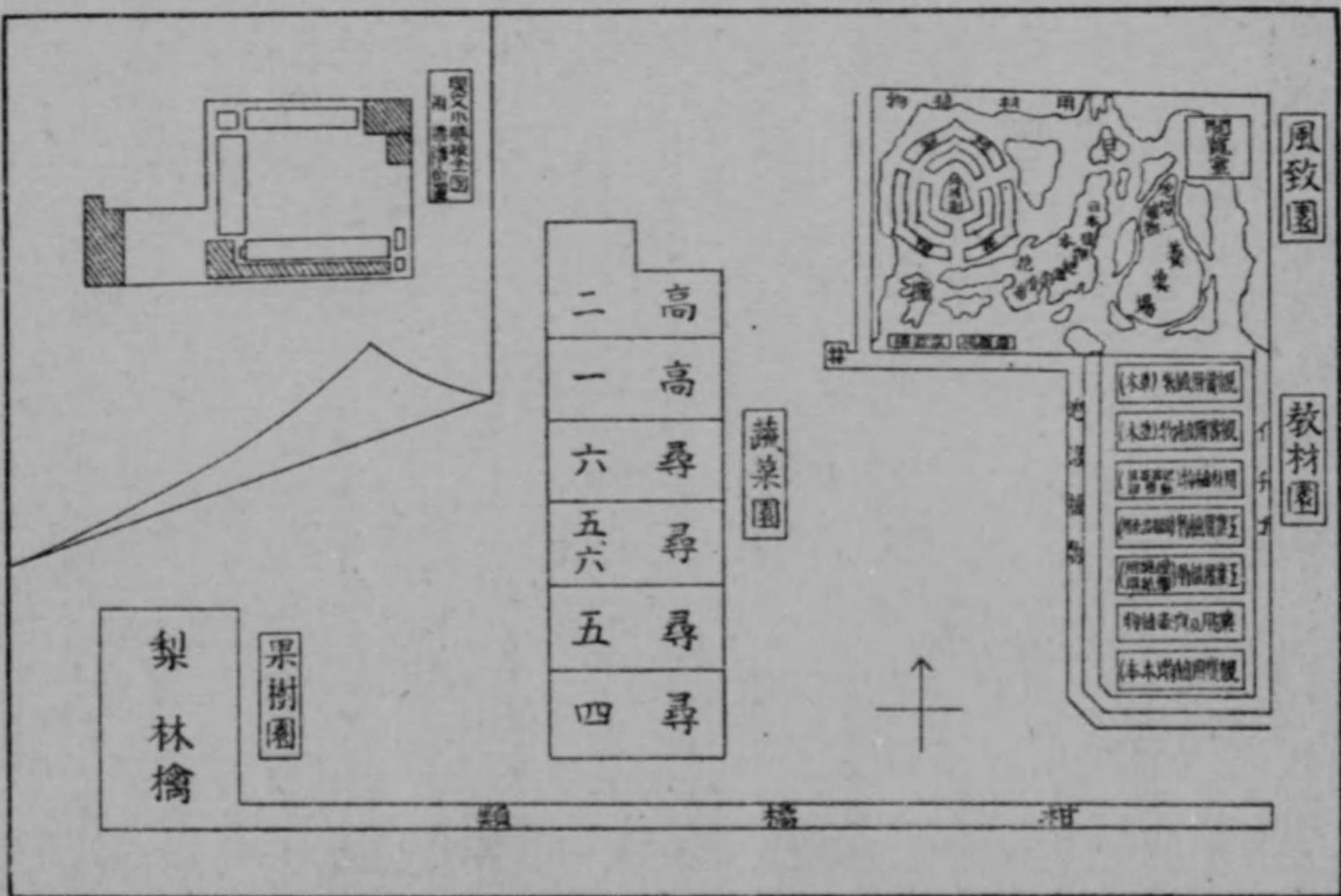
二二二

盛會を極めた。

學制の頒布以來郭町にあつて、幾多俊才を輩出せしめた學校は今は全く廢せられる事となり、新に外側町に移され、爾來今日に至る迄、三十餘年又幾多の變遷を重ねて、今日の隆盛をなすに至つた。

興文學園

〔興文學園〕明治卅六年十月、校下特志者の寄附に依りて學校園を創設し、興文學園と稱した。其の後同三十七年校下父兄並に卒業生等の紀念植樹による樹木草本の寄附に依りて擴張し、更に同三十七八年戰役にあたり、本校西脇訓導出征し、其の紀念に金若干を寄附したので、これによつて更に擴張し、明治三十九年十一月又校下有志者藤田與助氏が金壹百二十圓を寄附せられ、茲に躍進的學園の發展を見たものであつた。興文學園の總坪數二百七坪五合、校内東南隅、及び西北隅の空地を限つて設け、この學園を類別して、風致園(八十八坪)・教材園(三十五坪)・果樹園(四十二坪)



興文學園の略圖



蔬菜園(八十二坪五合)とした。風致園は校章花壇・日本花壇・寄植・池沼生植物・盆栽欄・養魚場・閱覽所等を設け、校章花壇は校章を象つて花園を作り、月桂樹・松・竹・梅・つゝじ・尋櫻・紅葉・水仙・椿・ばら・蘭・まさ木・撫子・堇等の植物を植常え、兒童の精神教育の資料とした。又日本花壇に於ては帝國の高形狀を成せる植物園を作り、それに植物を地理的に分布して全部を北帶・中帶・南帶の三帶に區別して、其の各帶に生育する植物を植えて、國家的觀念の養成と、地理學の啓發に努めた。又寄植を設けて、觀賞用植物・食用植物・建築器具用植物・薪炭用植物・雜用植物に類別して植樹した。

の教材園は藥用植物及有毒植物・工業用植物其一(纖維用及製學紙用植物)、工業植物其二(染料・油・蠟・漆用)、觀賞用植物木本・園全草本・用材植物(建築・器具・薪炭用植物)に類別した。

果樹園は當地方に産出する梨・林檎・柑橘・柿等を栽培した。蔬菜園は郷土の蔬菜を栽培して、其の改良を攻究し、勤勞の精神、貯蓄の精神を涵養した。花壇の經營に關して兒童の作業を

以て之に充て、教員は之を監督し、學校園の整理發達に盡した。

當時學校園は近縣に迄其の聲譽高く、明治四十年五月、三重縣主催教育品共進會に、學校園圖面及説明書を出品し、三等賞を受けた。(興文學園圖參照)

興文圖書

(興文圖書館) 日露戰役記念事業の一として、興文校に於ては、明治三十八年興文圖書館を創立して、正面校舍階上(八坪餘)の一室を之に充て、兒童並びに一般の者の啓發に努めた。書籍の總數一萬餘冊、内舊大垣文庫の書籍中興文校の備品となりたるもの二千五百餘冊、兒童用雜誌、新刊書籍の寄贈に係るもの七千四百餘冊、全借受のもの二百餘冊、同じく買入のもの二百五十餘冊、其の他に繪畫・寫眞等をも備へ、當時中々隆盛を極めた。當時の入館者心得、及び一般縦覽者心得を左に摘記して置く。

入館者心得

入館者心得

- 一、本館開館は毎週月水金の授業後及毎日曜日の午後とし、一時間乃至三時間を限りとする。
- 二、入館し得る學級は尋三以上とし高二より以下順次交替入館し得るものとする。
- 三、入館中は常に靜肅を保つべきものとする。
- 四、書籍は監督教師の許可を得て取り出すべきものとする。
- 五、借覽すべき書籍は一度に二冊以内とする。
- 六、書籍は必ず丁寧に取り扱ふべきものとする。

七、讀み終りたる書籍は必ず元の處に整頓し置くべきこと。

一般縦覽者心得

- 一、一般縦覽者は圖書館掛に申出で許可を得て入館するものとする。
- 二、入館中は常に靜肅を保つべきものとする。
- 三、借覽書籍は帳簿に記入するものとする。
- 四、借覽書籍は必ず丁寧に取り扱ふべきものとする。
- 五、館外借用をなさんとするものは掛員に申し出で許可を受け、記帳捺印の上三日以内に返戻するものとする。但し一度に一部以内とする。
- 六、書籍を汚損し或は紛失したるときは相當辨償せしむることあるべし。(其の他細則は略す)

校旗、校歌の制定

〔校旗・校歌の制定〕 明治三十一年度卒業生の發議に依り、明治三十六年興文校校旗制定の事が起り、竟に其の議を纏め、其の制定を見た。制定せられたる校旗の體裁について見るに、地は緋色の鹽瀬を以てし、輪廓は金絲の縫、中央に校章を白を以て配し、總は紫、竿は眞槍の柄で木製黒漆塗、竿頭は眞槍をそのまま、劍先としたものであつた。鹽瀬は柔にして剛なるべきを表し、緋は赤心、白は潔白、無垢、金は進取の氣象を表示し、紫は悠遠にして温雅なるを示すものであつた。

この制定に依り燦然と輝く校旗は、明治三十一年度卒業生の喜捨によつて製作せられ、爾來今日に至る迄、之を受け繼いで其の下に全校は統率せられ、校名校章は幾多變遷に遭つて

来たが、獨り校旗に於てのみ其儘の歴史ある興文校の校章は鮮麗なる緋色の中に輝いてゐる。寄附者一同の純真なる愛校の熱情は此の校旗贈呈式に於ける寄附狀にて窺ふことが出来る。

我等が第二ノ家庭トモ言フ可キ親シク懐カシキ校門ニ別レ
ヲ告ゲテヨリ日月ヲ經過スルコト既ニ五年有餘益々校縁ニ
遠ザカリテ愈々校恩ヲ感ズルコト深ク日夜一矢報ゼント思
フコト久シカリキ時ナル哉本校ヤ日々盛大ニ此改築移轉ノ
祝典ヲ生ゼシカバ余等同級者一同粗惡ナガラモ校旗一旒ヲ
寄進シテ其ノ祝典ヲ祝スルコト、ナリヌ
請フ幸ニ受納ノ榮ヲ得ンコトヲ

明治三十六年九月四日

- | | |
|-------|-------|
| 市川眞次郎 | 稻津孫曾 |
| 早野 壽 | 林 眞司 |
| 石原 弘 | 奥富準一 |
| 大橋庄七 | 奥田佐一 |
| 渡部正美 | 河合勝次郎 |
| 谷 雄太郎 | 高木純吉 |
| 中村孫三 | 永田正孝 |
| 安田竹次郎 | 松岡久吉 |
| 後藤儀作 | 小林作平 |
| 江馬春介 | 松野一雄 |
| 正木乾一 | 江馬春介 |
| 久世弘之 | 松岡久吉 |
| 中村寛吉 | 永田正孝 |
| 田中收吉 | 高木純吉 |
| 岡安勝次郎 | 渡邊佐一 |
| 戸田直温 | 奥田佐一 |
| 稻川祐七 | 早野 壽 |



校 旗

安藤 諒 佐藤常吉 佐久間藤太郎 三輪徳三郎 森 右作 森 十九造 鈴木傳七

爾來三十八年興文三二同級會(明治三十二年度興文學校卒業生)の愛校の熱情は聊かの變化もなく再び校旗第二世とも稱すべき同型のものを新調寄附をなし、第一世は額に收め永く校寶として傳へる事となつた。(寫眞参照)左記は同旗贈呈式の辭である。

曩キニ本校移轉改築セラレ、ヤ我等興文三二同級會員三十七名ハ明治三十六年其ノ記念トシテ校旗一旒ヲ寄贈シ茲ニ三十八年ノ星霜ヲ經タリ其間寒風炎暑ヲ問ハス全校生徒ノ動スル所必ス其勇姿ヲ繼シ今ヤ漸ク使用ニ堪ヘサルモノアリ時恰モ輝ク皇紀二千六百年ヲ迎ヘ母校ノ校運愈々隆盛ヲ極メ校齡正ニ百年、記念事業トシテ講堂ノ建設ヲ見ツ、アルノ秋同志相謀リ名古屋松坂屋ヲシテ之カ修理調製セシメ再ヒ寄贈スルノ光榮ヲ得タリ
幸ニ我等カ母校ニ對スル謝恩ノ微意ヲ諒トセラレ領納セラレ、ト共ニ校旗ノ下學童諸子カ明朗ナル精神ト剛健ナル身體トヲ以テ益々學業ノ修習ニ智能ノ啓發ニ邁進セラレンコトヲ希フ

昭和十五年二月十日

興文三二同級會 後藤儀作 外二十六名

これより先明治三十六年六月校歌を制定した。作詞者は當時岐阜縣師範學校教諭飯塚八百太、作曲は同高井徳造であつた。歌詞は左に示す様であつた。

校 歌

興文學校校歌

- 一、古の賢き人の創めけむ 教の庭は永久に榮えむ
- 二、我が友の頭に翳す 興文の記をあだになさで學ばん

手工科の
架設

〔手工科の加設〕 本校に於ては明治三十八年四月一日より、小學校令の認むる所に依て、高等科に手工科を加設することゝなつた。加設學年は高等科の三、四學年と定め、一週の教授時数は三時間であり、一時間は毎週教授時數二時間であつた唱歌中より一時間を削減して之に充て、毎週教授時數二時間の圖書科中より一時間を削つて一時間を得、他の一時間は増設して、毎週教授時數を一時間増し、從來二十九時間であつたものが三十時間となつた。教室に就いては普通教室を充當してゐたが、進歩につれて特別教室を設置するの考を持つてゐた。

教員住宅
の新築

〔教員住宅の新築〕 明治三十八年興文女子尋常高等小學校内に、教員住宅建設の議が起り、十一月縣の認可を経て、建坪十七坪七合五勺、瓦葺平屋建木造の建築にかゝつた。其の價格參百八十五圓で、元興文講社理事事戸田銳之助の寄附によるものであつた。

運動場の
擴張

〔運動場の擴張〕 興文男子尋常高等小學校にあつては、連年兒童増加し、運動場は稍狹隘の向きがあり、不便であつたが、明治三十八年十一月校舎の西南隅牛屋三百八十番地、總坪數三百五十二坪の地を得て運動場の擴張を行つた。此の地はもと大垣商業學校の敷地であり、同校は三十八年九月南寺内に移轉し、其後畑となつて居た土地で、開豁乾燥、兒童の屋外體操場としての好適地となつた。

明治三十
七八年戦
役と學校

〔明治三十七八年戦役と學校〕 明治三十七年二月十日 天皇は露國に對して宣戰を布告し給ひ、國民皆歡喜踴躍し、敵愾心彌増に高潮し、大本營は宮城内に設置せられ、學國一致此の

國難にあつた。

此の戦役に於て、興文校に於ても益々職員兒童一致團結の歩武を以て進み、銃後の結束を固め、戦線諸勇士の勞苦に對へた。此の役本校に於ては三十七年五月訓導矢橋圭一・溝口辰吉兩人動員召集せられ、十二月又西脇由太郎も召集せられて戰に参加し、矢橋圭一は奮戦苦闘二龍山の戦闘に於て十月十日終に名譽の戦死をし、又西脇由太郎も三月五日名譽の戦死をした。

此の戦役中大垣より出征せる者總計四百四十名、戦死者四十名、病死者十二名、傷痕軍人十二名の多數に上り、特に此役本校出身者にして幹部將校として各地に轉戦し、武功を奏したる者少からざりしは實に本校の名譽と云はねばならぬ。第四師團長陸軍中將塚本勝嘉・第三旅團長陸軍少將可兒春琳・歩兵第三十八聯隊長陸軍大佐關谷銘次郎・陸軍少將今津孝則等は本校出身者であつた。又後日名をなし將官に累進した當時の海軍少尉小倉泰三（後海軍少將）、主計官横幕直好・歩兵大尉中島虎吉（現在陸軍中將）・歩兵少尉野田豊（現在歩兵大佐）・砲兵中尉郷竹三（後陸軍中將）等も出征し、赫々たる武勳を奏した。

本校に於ては學國一致の實を擧げ、三十七年五月以降出征者の子弟に對しては授業料を免除し、實業科目を加設して實業思想の涵養に努め、冗費の節減に、進んで貯蓄を奨励し、勤儉の美風養成に資した。當時兒童貯金總額一千二十五圓七十五錢を算し、其の兒童數五百三

十人、學校職員の國債應募總額九百五十圓、同貯金高百三十七圓四十五錢に上り、戦時に於ける國費援助の實を擧げ、出征軍人、並びに遺家族の慰藉に努め、軍人子弟教育に就いては特に留意し、學年末成績は學校より出征軍人父兄に報告し、又軍人子弟中成績不良なる者は特別授業を行つて學業の向上をはかり、又植樹を行つて利殖を行ひ、其の植樹數約四百五十本に上つた。

戰禍收まつて國民の自覺昂揚し、教育も一大進展を見るに至つたが、本校に於ては興文學園の擴張、興文圖書館の設立等を行ひ、教育の發展に資した。

明治三十九年三月一日、校長土方乙吉は文部省より明治三十七八年戦役中職務格別勉勵功勞不勤に付、其の賞として金三十圓を授與された。

同年六月十三日、本校職員として在職中出征戦死せし、矢橋圭一・西脇由太郎兩士の追悼法會を興文談話會、職員發起者となり、外側町圓通寺に於て執行し、興文兩校兒童、及び校下諸有志の參拜を得て、英靈を懇に弔つた。

岐阜縣より表彰

〔岐阜縣より表彰〕 興文男子尋常高等小學校は、先きに校舎の移轉新築増築を行ひ、大に面目を草め、職員は精勵恪勤し、専ら兒童教育向上の任にあたり、校下諸士の教育に對する理解は益々施設の完備となり、既述學校園の設置、其の他新式體操器具等の設備大に整ひ、爲めに兒童教育に多大なる便益を與へ、こゝに學ぶ兒童は成績向上の一途をたどり、縣内は勿

大垣小學の變遷

論、縣外に迄に其の聲譽を誦はれ、歴史ある興文校は彌榮に、隆運目覺しきものがあつた。縣に於ても屢々視察し、其の施設經營共に完備せるを賞讃し、明治四十年三月十八日、特に教授訓育の成績佳良なるを以て金五十圓を下賜せられ、優良校を以て目せられるに至つた。これより先、明治三十六年三月、興文女子尋常高等小學校にあつては、設備優等成績佳良を以て岐阜縣より賞金五十圓を受け、興文校の名聲は嘖々として世に傳へられた。

〔大垣小學校の變遷〕 大垣には興文・六街・七聯・久瀬川の諸校があつた事は前述の如くであるが、其の内興文小學校に就いては前掲の如く發展して來たものである。然らば他の諸校はと云へば、大垣藩大手多門跡に藁を並べて居たのが、六街學校の雄姿である。明治二十六年興文學校と共に高等科を併置せられ、此の兩校以外の大垣に於ける小學校は、何れも尋常小學校であつた。

然るに各校共年々就學兒童の増加と高等科入學兒童の激増は、明治三十二年七聯・久瀬川校にも高等科を設置する運動となつて現はれたが、時勢は未だ之を許さず、結局興文・六街兩校の高等科に收容することゝなつた。其のため、興文校に於ては教場の狹隘をつけ、久瀬川・七聯兩校に分教場を設置するの止むなきに至つた。爾來高等科設置に關しては、紛諍停止する所を知らなかつたが、七聯小學校、(二十七年創設、郭町舊小原氏邸)及び久瀬川小學校には、明治三十四年四月多年の懸案たる高等科設置成り、こゝに大垣の小學校には四校の高

等科併置校を見るに至つたのである。然るに大垣町に於ては、相接近して七聯小學校、及び六街小學校の兩校を存置するは、經濟上の不利及び相互感情上より來る教育上の進展を沮害する弊亦大であるとし、戰時人心協同の時機にあつて、三十八年四月、六街・七聯兩小學校の合併を行ひ、新に關東小學校を設置し、元六街校を男子部、元七聯校を女子部とした。

こゝに於て大垣の小學校は、興文男子尋常高等小學校・興文女子尋常高等小學校・關東尋常高等小學校・久瀬川尋常高等小學校の四校となつたのである。

學校一覽 (明治三十五年—明治三十九年)

興文男子尋常高等小學校 (明治三十五年)

校下町村區名	郭町外四十五町
校下戸數	二千七十二戸
校下人口	九千五百三十一名
修業年限	尋常科 四年 高等科 四年
學級數	尋常科 五學級 高等科 四學級
生徒數	尋常科(男生) 一年 九十人 二年 九十三人 三年 七十九人 四年 七十九人 高等科(男生) 一年 七十七人 二年 八十人

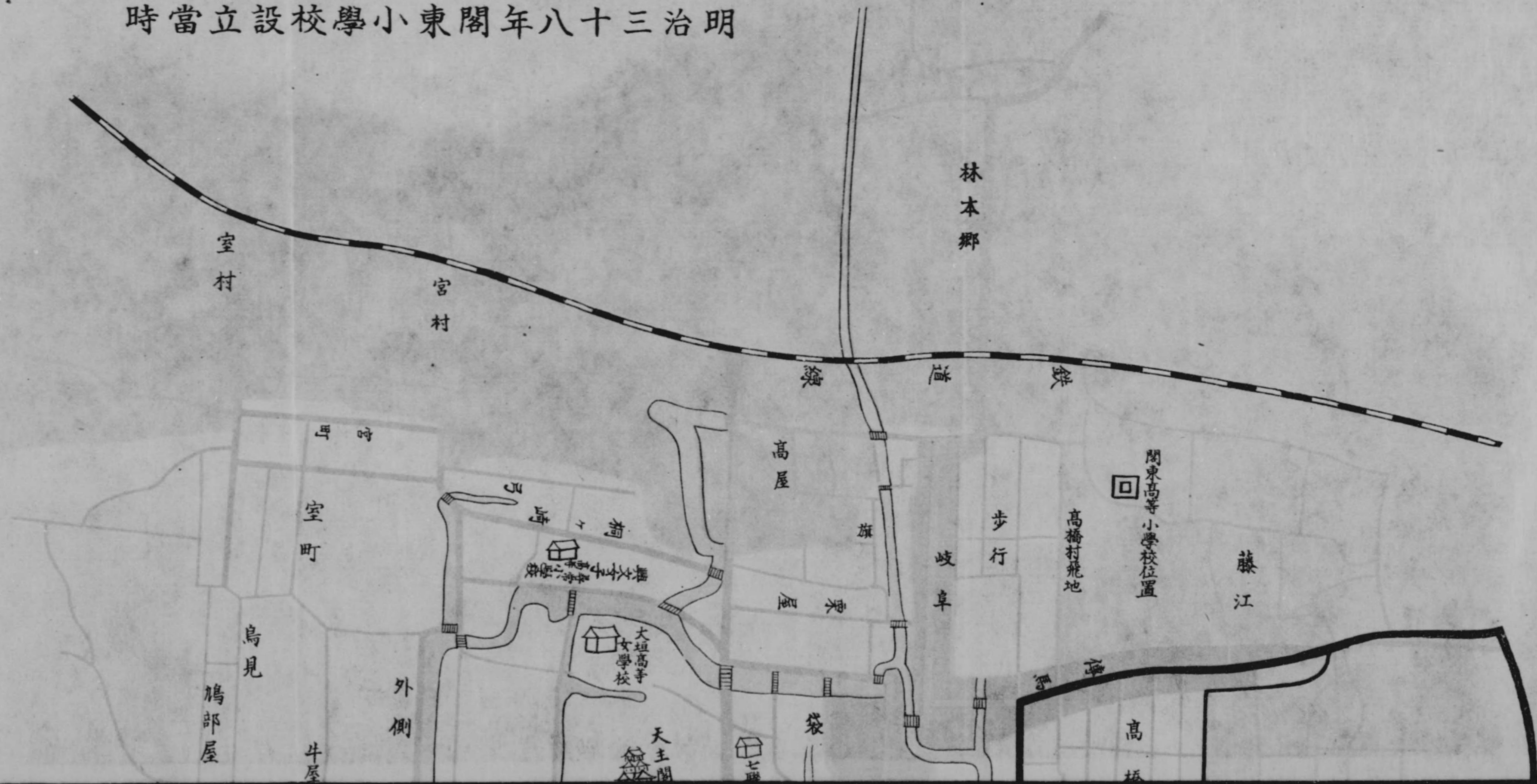


大垣町各小學校下色分圖

明治三十三年八月閣東小學校設立當時

各大字中新設學校地ニ至ル最遠距離左ノ如シ

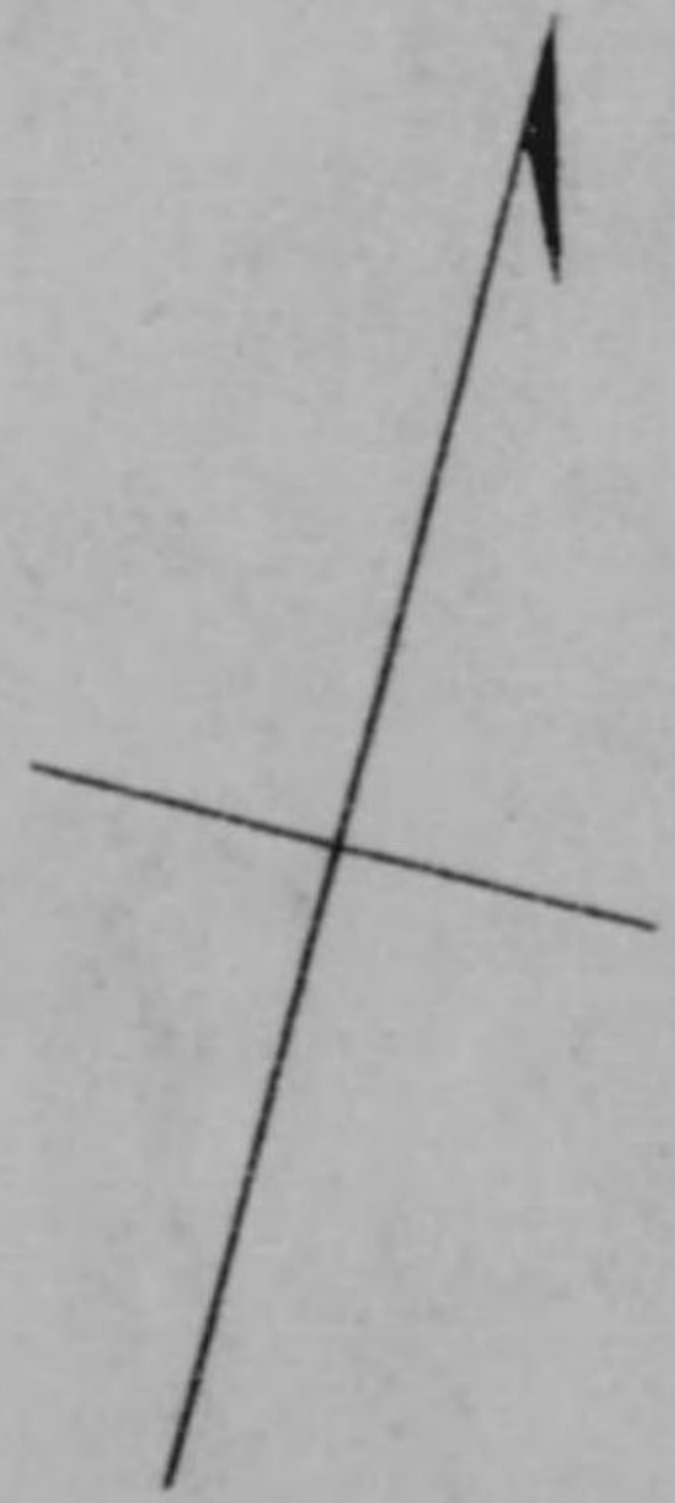
大字室村ヨリ七百三十間
 大字南類ヨリ六百八十間



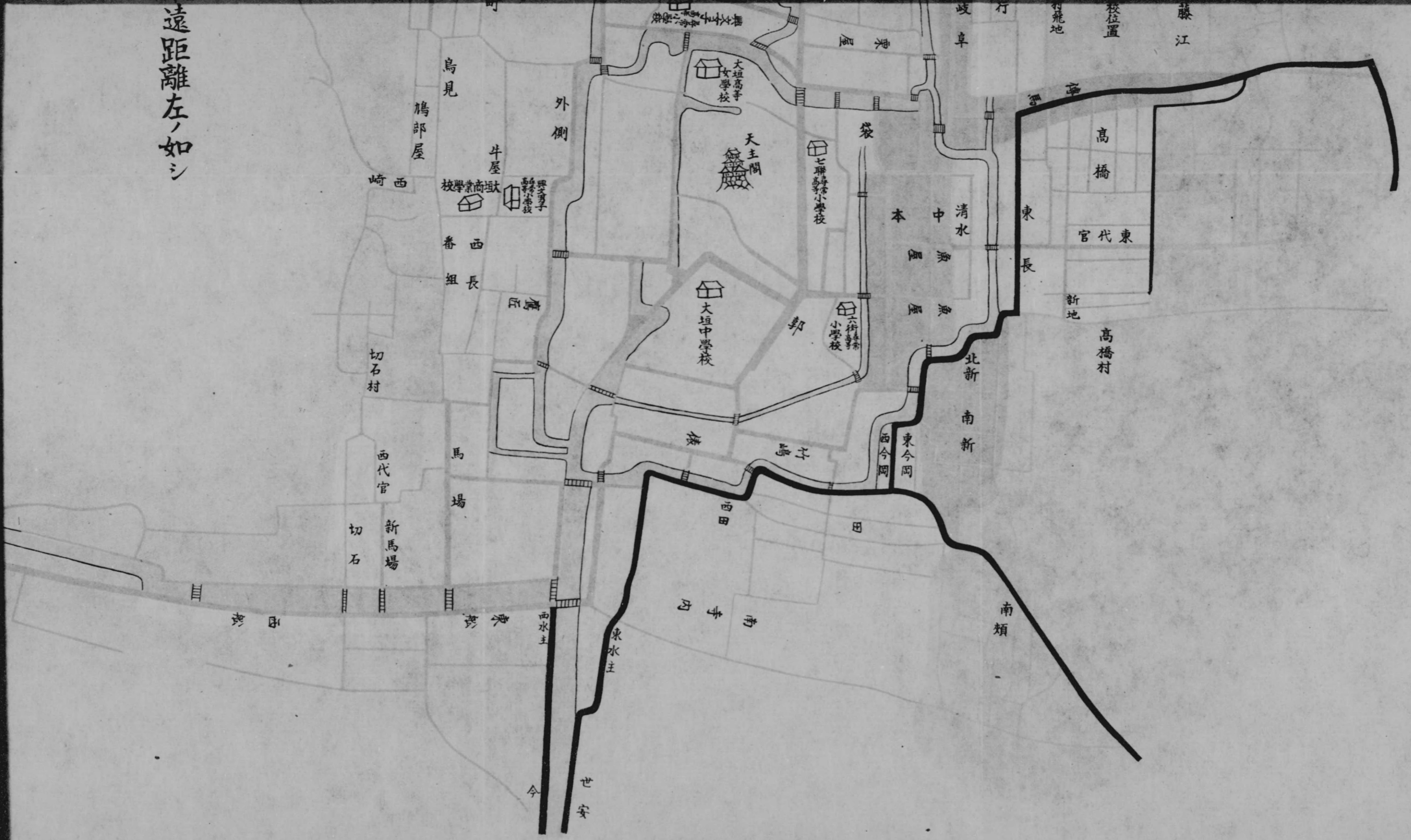
大垣町各小學校下色分圖

明治三十三年八月閣東小學校設立當時

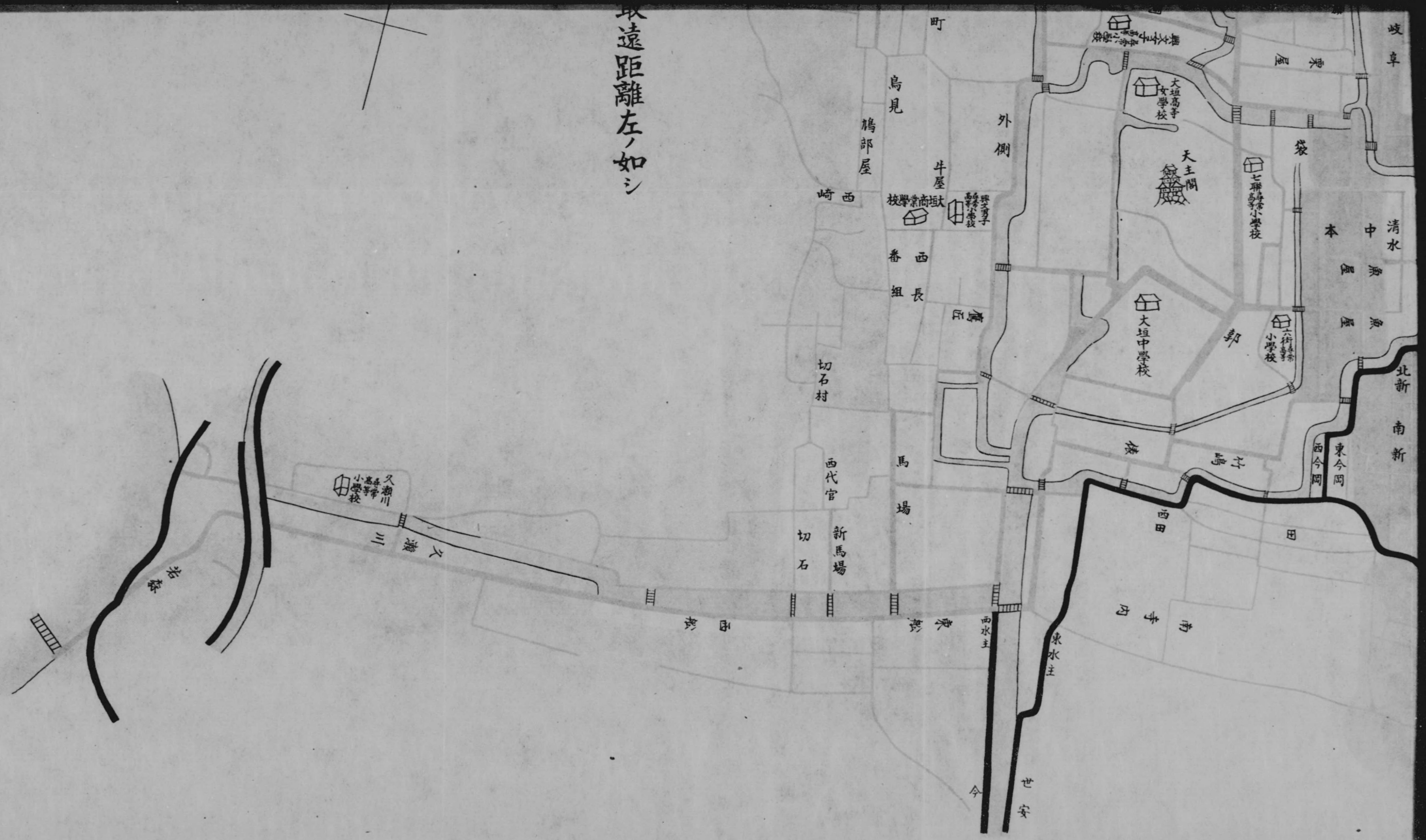
各大字中新設學校地ニ至ル最遠距離左ノ如シ
 大字室村ヨリ七百三十間
 大字南頬ヨリ六百八十間

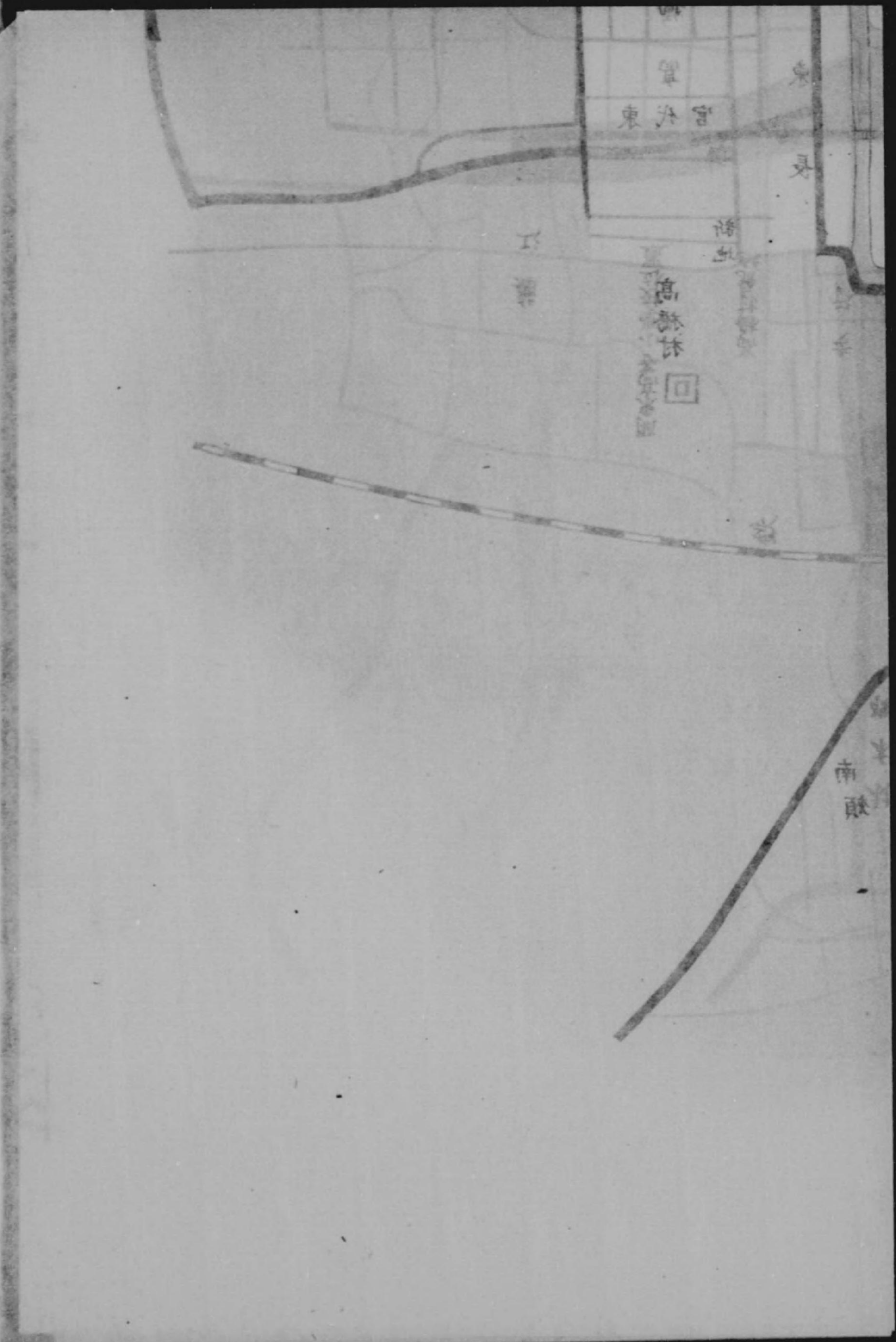


遠距離左ノ如シ



取遠距離左ノ如シ





校舍校地
 三年 七十二人
 四年 四十人
 教室十二(百六十九坪五合) 諸室四(六十四坪) 其他二(二十坪八合)
 敷地一(三百九坪三合) 屋外体操場二(七百六十二坪) 其他(五百二十四坪五合)

學校費
 二千四百五十七圓二十四錢
 近藤乙吉
 近藤乙吉 石原賢三 杉野惣一 石田 登 勝野金吾
 山田仁平 久保田藤市 西村圭一 月岡峯之助 飯尾駒太郎
 溝口辰吉 篠田錦策 渡邊幾治

興文男子尋常高等小學校 (明治三十六年六月)

校下町村區名	前年に同じ
校下戸數	二千百三十五戸
校下人口	九千九百八十四人
修業年限	前年度に同じ
學級數	前年度に同じ
生徒數	尋常科 一年 七十六人 二年 九十二人 三年 八十九人 四年 七十七人

校舍校地	高等科 一年 七十五人 三年 六十一人 四年 二十九人	教室十(百八十三坪) 敷地(五百三十五坪九合) 屋外體操場(八百五十五坪) 其他十(百七坪) 其他(二百八十坪)
學校經費	二千四百七十五圓二十三錢	
校長	近藤乙吉	
職員	近藤乙吉 石原賢三 杉野惣一 勝野金吾 山田仁平 久保田藤市 矢橋圭一 溝口辰吉 月岡峯之助 中村政治 平山氏博 國枝友治 飯尾駒太郎 篠田錦策(休) 渡邊幾次(休)	

興文男子尋常高等小學校 (明治三十七年六月)

校下町村區名	郭町外四十五町
校下戸數	二千百三十五戸
校下人口	九千九百八十四戸
修業年限	前年度に同じ
學級數	尋常科 五學級 高等科 五學級
生徒數	尋常科 一年 七十八人 二年 七十五人

校舍校地	前年度に同じ	三年 八十七人 四年 八十九人
學校經費	二千七百四十八圓九十三錢	一年 九十九人 二年 七十二人
校長	近藤乙吉	三年 六十八人 四年 三十七人
職員	近藤乙吉 石原賢三 杉野惣一 勝野金吾 横山隆一 久保田藤市 矢橋圭一 西脇由太郎 溝口辰吉 月岡峰之助 平山氏博	

興文男子尋常高等小學校 (明治三十八年)

校下町村區名	郭町外四十五町
校下戸數	二千百三十四戸
校下人口	九千六百三戸
修業年限	前年度に同じ
學級數	尋常科 六學級 高等科 五學級
生徒數	尋常科男子 三百三十七名 高等科男子 二百五十九名

校舎校地 前年度に同じ
 學校經費 二千八百四十九圓十七錢
 校長 土方乙吉
 職員

興文男子尋常高等小學校 (明治三十九年六月)

校下町村區名 郭町外四十五町
 校下戸數 二千八百八十六戸
 校下人口 一万五十六人
 修業年限 前年度に同じ
 學級數 尋常科 六學級 高等科 五學級
 尋常科 一年 八十七人 二年 八十三人
 三年 七十四人 四年 七十九人
 高等科 一年 九十三人 二年 八十八人
 三年 七十八人 四年 三十一人
 校舎校地 教室十一(百九十九坪) 諸室七(百十六坪五合) 其他十(百七坪)
 敷地九(五百三十五坪九合) 屋外體操場(八百五十五坪)

學校經費 三千百九十六圓八十一錢
 校長 土方乙吉
 職員 土方乙吉 石原賢三 横山隆一 勝野金吾 可兒五郎一
 清水 廉 久保田藤市 松村幾平 加納 連 溝口辰吉
 月岡峰之助 淺井周三 佐竹貞一 大橋 清

興文女子尋常高等小學校 (明治三十五年六月)

校下町村區名 郭・外側・袋・牛屋・新地・馬場・新馬場・切石・步行・弓・東長・西長・室・
 桐ヶ崎・旗・梁屋・田口・清水・東今岡・西今岡・西田・田・田堤通・東水主・宮
 西水主・依・鷹匠・東船・西船・番組・鳥見・高橋・鳩部屋・東代官・西代官・
 南寺内・竹島・世安

校下戸數 二千七十二戸
 校下人口 九千五百三十一名
 修業年限 尋常科 四年 高等科 四年
 學級數 尋常科 四學級 高等科 三學級
 生徒數 尋常科女子 一年 七十八人 二年 七十七人
 三年 六十七人 四年 五十五人

校舎校地	高等科女子 一年 四十二人 二年 四十人 三年 二十二 四年 十七人 (三四年一學級)
教室九(百六十九坪)	諸室八(六十坪) 其他五(七十二坪一合)
敷地(三百六十坪五合)	其他(百八十五坪六合五勺)
學校經費	二千二百六十九圓十九錢
校長	竹井正己
職員	竹井正己 桑原松太郎 宮戸俊一 岡田瀧之助 近藤 需 久保田藤市 山田仁平 西村圭一 清水經造 魯せい 月岡峰之助 栗田重次

興文女子尋常高等小學校 (明治三十六年)

校下町村區名	前年度に同じ
校下戸數	二千百三十五戸
校下人口	九千九百八十四人
修業年限	前年度に同じ
學級數	尋常科 四 高等科 三
生徒數	尋常科女子 三百人 高等科女子 百二十二

校舎校地	敷地 一千五百九十五坪五合 屋外體操場 七百六十九坪	教室 百七十九坪
學校經費	二千二百四十一圓四十五錢	
校長	竹井正己	
職員	竹井正己 堤 道太郎 宮戸俊一 澤藤 循吉 河村道之助 岡田瀧之助 清水經造 魯せい 栗田重二	

興文女子尋常高等小學校 (明治三十七年)

校下町村區名	前年度に同じ
校下戸數	二千百三十五戸
校下人口	九千九百八十四戸
修業年限	前年度に同じ
學級數	尋常科 五學級 高等科 三學級
生徒數	尋常科女子 三百十五人 高等科女子 百四十九人
校舎校地	前年度に同じ
學校經費	二千三百八圓七十八錢
校長	竹井正己

第二編 明治維新後の本校

二四〇

職員 竹井正巳 堤 道太郎 澤藤循吉 河村道之助 岡田瀧之助
 清水經造 矢部千代 河村ゆう 魯 せい 栗田重二

興文女子尋常高等小學校 (明治三十八年)

校下町村區名 前年度に同じ
 校下戸數 二千三百三十四戸
 校下人口 九千六百三戸
 修業年限 前年度に同じ
 學級數 尋常科 六學級 高等科 三學級
 生徒數 尋常科女子 三百七人 高等科女子 百六十五人
 前年度に同じ
 校舎校地 二千三百七十三圓七錢
 學校經費 竹井正巳
 職員 竹井正巳 堤 道太郎 河村道之助 岡田瀧之助 清水經造
 矢部ちよ 河村ゆう 稻葉 徂 吉田さく 魯 せい
 奥富千代

興文女子尋常高等小學校 (明治三十九年)

校下町區名 前年度に同じ
 校下戸數 二千八百八十六戸
 校下人口 一萬五十六人
 修業年限 前年度に同じ
 學級數 尋常科 六學級 高等科 五學級
 生徒數 尋常科女子 三百二十一人 高等科女子 四百八十八人
 前年度に同じ
 校舎校地 二千六百五十八圓八十二錢
 學校經費 竹井正巳
 職員 竹井正巳 堤 道太郎 河村道之助 岡田瀧之助 清水經造
 河村ゆう 稻葉 徂 中野壽衛 大橋み津 魯 せい
 栗田重二

第四節 教育の發展

義務教育年限の延長と學校充實

〔義務教育年限の延長と學校充實〕 明治三十七八年の日露戦争に於ける大捷の影響は、我が國民生活の上に有形無形に多大の變化を來したことは今更説く迄もない。東洋日本をして世

界日本たらしめた戦勝こそ、又教育史上に一時期を劃するものでなければならぬ。明治三十三年に制定された小學校令が同三十六年に比較的多くの部分改正を見たるに拘らず、更に明治四十年一月二十日を以て施行せられるに至つた小學校令の改正中義務年限の延長、然も二箇年の延長を斷行したことは我國普通教育發達史上特に注目されねばならぬ事實であり、これぞ戦勝による國民的自覺の深化と教育意識の尖鋭化に基づく寧ろ當然の要求であつた。

同月二十五日小學校令施行規則の改正を行つた。改正の方針に就いては、訓令第一號より其の要点を摘記するに、從來の高等小學校の二年迄を尋常小學校の範圍に移したもので、その教科目も大體は高等小學校のものを移したものである。従つて高等小學校は二箇年となり、土地の状況に依つてはこれを三箇年に延長することが出来るとした。又土地の状況によつて直ちに實施し得ない所には其の延期をも認め、又教育費の増大に對しては便宜の方法を講じて輕減を計り得るやうにし、補習教育、實業補習教育の普及を奨励し、特に手工科の重視を勸めてゐる點は一面將來の日本の進むべき方向を暗示してゐる。この教育方針は普通教育の充實に非常な力となつたもので、小學校令中に示された教育方針が充分にその効果を示すことになつたのである。義務教育年限に關しては

固ヨリ今回ノ改正ハ未ダ之ヲ以テ足レリトスルニアラスト雖モ我國現下ノ情況ハ速ニ之ヲ六箇年以上ニ延長スルコトヲ許サザルヲ以テ暫ク之ニ満足シ其ノ完成ハ更ニ之ヲ他日ニ期

セントス

として將來の延長を約して居るが、昭和十六年に至る迄その儘にとゞまつてゐた。明治四十年のこの改正は我が國の教育制度を充實せしむる端をなしたもので、これより大正初年にかけて各種の教育機關が著しい發展をなしたのを見ることが出来る。

この後小學校に於ては明治四十四年七月三十一日、再度小學校令、並に小學校令施行規則に改正が加へられた。その改正の要旨は大體次の如くである。

- 一、高等小學校の目的から見、從來隨意科目であつた、手工・農業・商業を必須科目として兒童には必ず手工・農業・商業の何れか一科を課することとし、その教授時数を増加した。
- 二、從來獨立の一教科目として加設することを許してゐた英語を商業中に加へて教授することを認めた。
- 三、代用教員制規定の改正、即ち從來その進退は郡市長をして行はしめたのを今回府縣知事をして之を掌らしめることとし、小學校教員改善の實を挙げしめるやうにした。
- 四、小學校の教則、休業日、教員檢定等に關する規定の改正。

是等の改正を見るに至つた専由は勿論從來の實驗に徴した結果であるに相違ないが、曩の明治四十年の改正精神と等しく、小學教育内容の充實改善を期せんとするにあつた。

本縣と義務教育年限の延長

〔本縣と義務教育年限の延長〕 本縣に於ては小學校令の改正、義務教育年限の延長に關して四十一年二月廿七日左の施設要項の通牒を發して其の徹底を期した。

施設要項

施設要項

- 一、尋常小學校ハ明治四十一年四月一日ヨリ第五學年ヲ、全四十二年ヨリ第六學年ヲ設置スルモノトス
- 尋常高等小學校ハ明治四十一年四月一日ヨリ尋常科第五學年ヲ設ケ本學年高等科修業兒童ヲ舊令高等小學校第二三四學年トシテ存置シ明治四十二年四月一日ヨリ全部新令學年ヲ設クルモノトス
- 但シ土地ノ狀況ニヨリ本學年高等科第一學年修業兒童ヲ尋常科第六學年ニ編入シ第二三學年修業兒童ヲ新令ノ高等小學校第一二學年ニ編制スルモノトス
- 一、前項ノ場合ニ於テ明治四十一年度末ニ授與スル卒業證書又ハ修業證書ニハ左ノ裏書ヲナスモノトス
本證書ハ明治四十年勅令第五十一號附則末項ニヨリ之ヲ授與ス
- 一、高等小學校ハ土地ノ情況ニ依リ修業年限ヲ延長シ第三學年ヲ置クモノトス
- 一、既設ノ高等小學校ハ總テ新令高等小學校トシテ繼續スルヲ要ス
- 一、本年度尋常小學校ヲ卒業スルモノハ義務トシテ就學ヲ強制スルコト能ハザルモ成ルベク全部ヲ第五學年ニ入學セシムルヲ要ス
- 一、義務教育年限延長後ニ於ケル兒童ノ就學及ビ出席ニ關シテハ多少困難ナル事情アルベキニヨリ一層嚴重ニ督勵ヲ加フルト共ニ適宜ノ特殊教授又ハ獎勵方法ヲ設ケテ義務教育ノ完成ヲ期スルヲ要ス
- 一、手工科ハ成ルベク將來各小學校ニ加設スルヲ要ス
- 一、尋常小學校ニ於ケル授業料ハ徵收スルコトヲ得ザルモノトス

一、各小學校ニ成ルベク補習科又ハ補習學校ヲ設置シ益々補習教育ノ發達ヲ圖ルヲ要ス

一、町村又ハ町村學校組合ハ尋常小學校ニ於テ明治四十一年四月一日ヨリ收容スベキ第五學年ノ兒童數ヲ調査シ校舍校具等ニ差支ナキ様適當ノ設備ヲナスヲ要ス

本縣に於ては小學校令に準據し、土地の事情を充分に斟酌して、教育の充實發展に萬遺漏なきを期したものであつた。

第五節 興文男子尋常小學校・興文女子尋常小學校の推移

興文小學校の推移
學校の充實發展

〔學校の發展充實〕 興文小學校に於ては本縣の指令に準據して明治四十一年四月一日より義務教育年限の實施を斷行し、尋常科修業年限を六箇年、高等科修業年限を二箇年と定めた。四十年舊令による尋常科卒業生を獎めて明治四十一年度に於ては新令に依る第五學年とし、又明治四十年在學の高等科第一學年を四十一年度に於ては高等科第二學年に進め、尙ほ舊令に據る高等科第三學年、第四學年はその儘存置せしめた。

義務教育年限延長による就學並びに出席の歩合は極めて良好にして、就學歩合三十七年度には九八・〇四％、三十八年度には九八・〇七％、三十九年度には九八・〇九％、四十年には九

九・二一%、四十一年度には九九・六%、四十二年度は九九・八三%であつて、漸年就學率の向上を示してゐる。出席歩合に就いても明治三十九年度に於ては尋常科九六・七一%、高等科九六・八一%であつたが、四十一年度には更に向上して尋常科九六・七五%、高等科九六・九六%を示した。これは町民の教育の必要を自覺した結果であらねばならぬが、又一面學校當局は屢々父兄懇談會或は通俗教育談話會等を開催し、適切な就學獎勵をしたのが與つて力あつたものであつた。

設備の方面に於ても從來縣下に誇る設備を有し、ために其の筋から賞せられた事もあつたが、この期に於ては更に諸方面の設置に涉つて充實整備し、教授上の便益を得たが、就中明治四十年校庭に運動器具の増置を行ひ、鞦韆・廻轉塔・遊動圓木・平行杆・固定圓木・テニスコート・ピンボン・シーソー・跳越台・鐵棒・角力場等の増置を行ひ、明治四十年七月水泳練習會は杭瀬川に初めて行はれ、後永く實施せられるの基を開いて、兒童の身體の發達をはかり、學校園たる興文學園は完備の域に迄進み、日常兒童教育に益裨する所大なるものがあつた。

教授方面に就いても、この時代に至つて劃期的進歩をなし、確固たる教育方針を樹立し、兒童心身の發達に留意し、土地の狀況に適應せしめ、絶えず我國內外開化の狀態を確理解せしむるに力を致し、品性の陶冶、智能利用實際方面の獎勵、教授細目の編成、個性の尊重等

其の教育の根幹ともなるべきものについて明示し、教育方針とした。

各科には各教授要領を定めて、教授の徹底を期し、校外教授をも行つて教室內教授の補足に、つとめ、調育方面に涉つては、教育勅語・戊申詔書・兒童心得等を各自に配布したことは既述の通りであるが、益々聖旨の服膺につとめ、講堂修身・兒童勤怠表・性行録・兒童調査簿を作成して調育に留意し、圓滿なる人格養成に資し、衛生方面にも亦多大なる關心を持ち常に清潔を保たしめ、室内の通風採光は勿論、座席についても絶えず養護方面より一段の注意をなし、トラホーム患者に對する處置、其の他の傷病者に對す處置も誠に行届き、特に父兄、兒童に自己の體位を認識せしめるために、兒童各自の身體發育狀態を文部省調査の中等發育表と對比記載して通告するなど、體育方面に留意し、其の發展充實を期せんとしたのであつた。

明治四十年義務教育年限の延長以來數年間に至る間の興文小學校の發展充實は一々枚舉に遑ない程であつた。今其の個々の事實に就いて一々詳説することは避けて、其の發展の真相を物語る重なる事に就いてのみ記述することにする。

張學校の擴
〔學校の擴張〕 興文小學校にあつては、男女兩校とも年々に其の兒童數は累加して特別の教室を假用するなどして過してきたが、明治四十三年に於ては男生徒凡七百人、女生徒凡六百人を算へ、從來の教室に於ては狹隘を告げ、到底これ等兒童を收容することは不可能とな

つた。こゝに於て兩校にあつては校舎の増築を行ふこととなり、明治四十四年四月興文男子尋常高等小學校にあつては南舎西側に二教室を建設することとなつた。總建坪五十五坪、桁行拾間、梁間五間三尺で、各教室の坪數二十坪、四間と五間（桁行二間・梁一間）とよりなり、西教室には、御眞影室・押入等を作り、北側には幅一間の廊下を造つた。教室の境は取外しに便にするため帯戸を以てした。

四月三十日落成し、六月兒童は新校舎に移つた。

興文女子尋常高等小學校にあつても、兒童の増加によつて教室の狹隘を告げ、明治四十四年又二教室の増築を見るに至つた。其の位置は屋外體操場の東南隅、外側町の道路に隣接して建設せられることとなつた。

其の主なるもの教室二室及び土間廊下昇降口、梁間四間三尺・桁行九間・建坪四十坪五合、便所梁間貳間・桁行三間建坪六坪、渡り廊下桁行二間三尺・桁間九尺・建坪三坪七合五勺と他の一箇所の分、梁間一間・桁行二間・建坪二坪のものであつた。教室の廣さ、各三間三尺に五間のものであつた。

兩校の校舎増築によつて、從來の不便は一掃せられ、益々教育の進展を見るに至つたが、兒童の増加は獨り校舎の不足のみには止まらず、兒童増加と加ふるに新校舎増築によつて校地は割讓せられて益々兒童の屋外運動場は狭められて、校地擴張は急務となつた。特に兒童

數の多い興文男子尋常高等小學校にあつては、其の必要を痛感した。こゝに於て明治四十五年、興文男子尋常高等小學校に於ては校地擴張を斷行するに至つた。即ち五月、本校敷地として隣接せる土地七百三十餘坪を百八十圓（畑坪二圓九十錢・其他坪一圓五十錢）にて購入して校地を擴張した。

商業科、
手工科の
特設

〔商業科・手工科の特設〕 興文男子尋常高等小學校・興文女子尋常高等小學校に於ては、實業教育の必要を認め、明治四十五年四月高等科に於て商業の實業科を設定し、又同年三月、勤勞の精神を涵養し、併せて手工科と他教科と其の知識技能相互關聯し、教育上必要なる學科として、尋常科に於ても手工科を課することとした。

學區の變
遷と統一

〔學區の變遷と統一〕 大垣は元數箇町村の廢合して成立したものであつて、區域は廣濶なものであつた。

隨つて學區も數區に分たれてゐて、明治二十七年興文・六街・久瀬川小學校の外更に七聯小學校の設立があつた。これは南寺内・南畑・藤江・高橋・林・室・西崎等の諸村が明治二十二年大垣に合併せられ、従前は此等隣接部落には各學校を有したが、諸村の中協同して學校を設立して七聯小學校と稱したものであつた。隨つて七聯學區には南畑・高橋・高屋・藤江・林・室・宮の校區があり、興文學校には舊大垣町より成る興文學校區（六街校下を除く）、六街小學校には南新町・北新町・中町・魚屋町・本町・傳馬町・岐阜町の六街校區があり、久

瀬川小學校には久瀬川・切石・今・西崎・若森を含む久瀬川校區があり、大垣には四小學校區が存在して、經濟は各自別途で施設經營共に其の學區に委任せられた形であつた。

明治三十三年七聯・久瀬川兩小學校に於て高等科を設置せんとしたが許されず、ために興文高等小學校は兩校の高等科兒童を收容することになり、隨つて興文校區に於ては高等科のみ兩校區を合併することになつたが、翌三十四年七聯・久瀬川兩校に高等科が設置せられるに及んで自然校區は始めに歸つた。

其の後明治三十八年六街・七聯合併して關東小學校となるに及び、三十九年四月四小學校區は變革せられ新に興文校區(郭・袋・外側・馬場・新馬場・切石・西代官・鑿匠・西長・牛屋・番組・鳥見・鳩部屋・室・弓・桐ヶ崎・栗屋・田口・旗・歩行・高橋・東代官・新地・西今岡・東今岡・田吳通・田・西田・東水主・西船・東船)・關東校區(南新町・北新町・中町・魚屋町・本町・傳馬・岐阜・依・竹島・宮・南寺内・世安・東長・清水)・久瀬川校區(久瀬川・切石)の三小學校區となつたが、從來の如く經濟は別途であつた。然るに明治四十三年頃、校區廢止の論やかましく、既成學區は同じく大垣町民でありながら殊更らに意志人情習慣等の疏通を缺き、且つは同町内の小學校にして均等に經營進歩せしめること能はざるは教育の發展を阻害するものであるとし、終に明治四十四年三月三十一日限り縣に請うて學區及使用すべき小學校指定を止め、町直接に經營することになり、經濟は全く共通となつた。

此に於て關東校區の内、宮村・室村・高屋の各字に於ける兒童を興文小學校の所屬とし、興文校區の内東代官・高橋・歩行・新地・東長・清水を關東小學校に編入し、久瀬川校區の内西崎・切石の兒童を興文學校に入れる事になつた。

各小學校區の財産は、この合同統一當時の相當の評價方法を以て計算し、各區の不平均は均一ならざる負擔を以て之を匡ふこととなり、徵集には各區民の負擔に堪へ得る程度に、一年若しくは數年間に於て賦課法を以て徵集することとなつた。

この合同統一に於て興文女子尋常高等小學校に於て新に編入せられたる兒童は、宮村・室村・高屋よりの兒童六十五人、北切石・西崎よりの轉入者十二人合計七十七人であり、同校より轉出するものは東代官・高橋・歩行・東長・清水の兒童六十八人であつた。興文男子尋常高等小學校にあつては、轉入する者、宮村・室村・高屋より八十五人、北切石・西崎より十三人、合計九十八人であり、轉出兒童は六十八人であつた。

〔藩校創立七十周年記念式〕本校の創立は極めて古く、前章に於て詳述した如く、氏庸公の世岡田主齡が始めて清水町の屋敷に於て公務の傍ら藩の子弟を教育して居たが、其の後天保九年多大なる藩の支援命令を受けて外側町に移つて教授をしてゐた。これぞ本校の濫觴と云はねばならぬ。たゞ費舎に於ては、未だ其の獨立したのを見なかつたのみにして、其の生徒・教育法・教師等も費舎設立後と大差なく、其の後天保十一年同位置外側町龍の口御門外

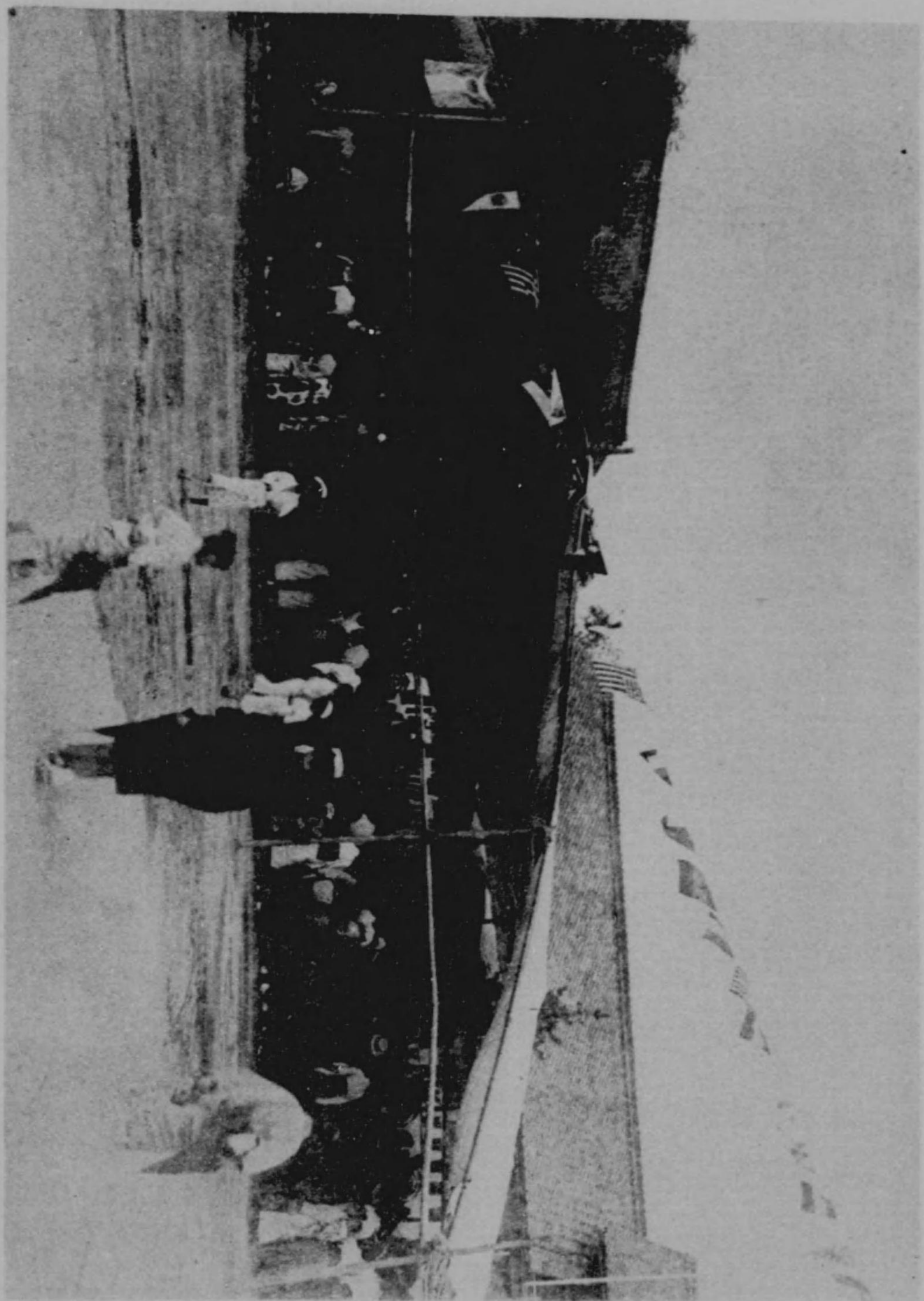
藩校創立七十周年記念式

に一字の贅舎の設立を見て、其の外面的體裁に一段莊嚴を加へたのであつた。

明治四十二年七月二十五日、興文男子尋常高等小學校、及び興文女子尋常高等小學校即ち藩校直系の兩校に於ては合同して、外側町にて教授開始の天保九年より滿七十年に相當するを以て盛大なる七十周年記念式を興文男子尋常高等小學校に於て舉行することゝなつた。

この七十周年記念式にあつて、戸田伯爵・小原男爵を初めとして、市内在住者は勿論、地方に於ける本校出身者等よりして意外に多額の寄附金を寄せ、總額四百九十七圓七十錢に達した。之を以て祝賀費に充て、兩校職員は勿論、市内在住者にして有力なる者を以て祝賀會の諸掛に充て、協心一致、萬般遺漏なきを期した。此の日來賓數多會し、縣廳よりは知事を初め、事務官・視學等五名・縣内各新聞社長、裁判所・稅務署・警察署・郵便局・大垣驛・郡役所・町役場等の諸官衙長、中等學校及び町内小學校は勿論、隣校の學校長・町會議員・學務委員・元本校校長等の臨席を仰いだ。遠く大阪毎日・大阪時事・岐阜日々等の新聞社よりは各特派員を差遣して、其の七十周年記念式の次第を全國に報道した。

七月二十五日午前八時祝賀式を舉行することゝなり、來賓・兩校兒童・同窓者等入場し、開會の辭、續いて君が代を合唱し、興文男子尋常高等小學校長土方乙吉は謹んで教育勸語を奉讀し、興文女子尋常高等小學校長竹井正巳式辭を述べ、次いで同窓者總代祝辭、來賓祝辭、生徒總代祝辭等あつて、校歌を合唱し、終つて大垣町長三原範治は祝賀式の閉式の辭を述べた。



本校創立七十年紀念寫真

祝賀式終つて兩校合同の大運動會を舉行し、一方校舎の一部を假用して展覽會場に充て、これより先きに全國に誇る數多本校出身諸名士の寫眞・遺墨等蒐集したる物を展覽し、以て後進の徒に教へた。此の時にあたり、文武官・實業家等にして其の名を爲し、寫眞を寄贈せる者百五十餘名に上つた。

七十周年記念撮影も終つて、祝賀饗宴となり、折詰と酒とを一同に配り、兒童には紅白の餅を頒ち、一般に本校沿革史大要の印刷物を配布した。

午後一時より物故職員之慰靈祭を神式を以て舉行し、來賓を始め、同窓者兒童參列し、校長祭詞を述べ、同窓會總代祭文、生徒總代祭文を以て終つた。

續いて餘興に移り、同窓會により運動場に於てはエルジツト式自轉車曲乘、同窓會員及び本校上級兒童の角力、雨天體操場に於ては能狂言(蚊相撲・瓜盜人)劍舞・擊劍・琵琶歌・軍談等が行はれ、夜に至つて兩校兒童の盛大なる祝賀提灯行列が行はれ、祝賀唱歌に歩武高く大垣町内は祝賀の火の海と化した。祝賀唱歌及び提灯行列順序は左の通りであつた。

提灯行列道順

男子校—女子校—外側—新道南—裁判所前—竹橋—西外側—船—西船—龜屋町—依—竹島—本—清水—東長
—傳馬—岐阜—采屋—停車場道—桐ヶ崎—宮町—中學校新道—八幡—龍之口—常葉神社

祝賀式にあつての諸掛を参考のために左に記して置く。

記念祝賀式役割

- 一、受付掛 河野三郎 樋谷佐太郎 清水廣吉 後藤元吉 牧村甚平
- 佐久間掛江 渡邊富次 三宅一也
- 一、來賓掛 早川啓一 戸田銳之助 木村喜間太 中島武三 河地重助
- 河合治平 海野新 國枝靜也 吉村八 安田 李右衛門
- 小野完吾 大澤鐵二 宇佐美雄也 森 彦太郎 河村長四郎
- 國枝 長左衛門 中村孫次郎 三原範治 佐々木榮作 兩 校長
- 安田 賢三 森川市太郎 清水邑夫 學校職員
- 一、式場掛 佐久間甚藏 渡邊松太郎 木島順三
- 一、慰靈祭式場 佐久間甚藏 谷 恒助 朝田龜吉
- 一、展覽品 高橋貞吉外十名 鳥本豪福 淺井周造
- 一、宴會 小川 祝作 奥田謙吉 上田万次郎 佐久間甚藏 白井鉄次郎
- 女子部職員
- 一、運動會係 男女學校職員
- 一、餘興 谷 恒助 五島傳吉 後藤儀作 細野 傳右衛門 加納弁
- 一、自轉車及煙火 平野金太郎 稻川祐七 森島喜六 清水廣吉
- 一、提灯行列 (生徒)男女學校職員 (同窓者)役員一同

- 一、意匠提灯行列 河野三郎 平本一彌 森島喜兵衛 宮田豊吉 藤田與市
- 藤田禎吉
- 一、庶務掛 後藤儀作 森 彦造 木島順三 竹内 連 河野三郎
- 松永信雄 工富岩三郎
- 一、會計係 佐久間甚藏 土方乙吉 樋谷佐太郎 竹井正巳
- 一、樂隊掛 樂隊員一同
- 一、裝飾掛 村瀬定司 森川市太郎 清水 廉 伊藤一雄 加納弁藏
- 安藤勝治郎 河本喜悅
- 一、角力掛 鳥本豪福 溝口辰吉
- 一、記録掛 河村道之助

興文創立七十年祝賀唱歌

(男子用)

我が興文の學校は 古き貴き歴史あり
 我が同窓の先輩に 知名の人は數知れず
 思へば天保十一年 氏庸公の御在世に
 設けられたる學問所 是ぞ抑も創始なる
 爾來校名幾度も 移り變りて致道館

敬教堂に郷學校

興文義校と稱へたり

尙も數回の變遷を

閱し來りて今茲に

明治つひのまじ己酉の年

正に記念の七十年

老弱男女打集ひ

昔語りも面白く

心の限り祝ふ身の

光榮何にたくらべん

さらば我友同窓よ

常磐に忘れじ此の年の

七月二十有五日

記念の團居舉げつるぞ

提灯行列勇ましく

記念の唱歌歌はなん

昔ながらの天主閣

木靈の響返すまで

我が同窓よ健氣なれ

我校益々振へかし

興文同窓萬々歳

興文學校萬々歳

(女子用)

祝へや祝へ今日の日を

今日は愉快に祝はなん

昔天保十一年

時の藩主の戸田侯が

臣子のために建てられし

たぐひ少なき學問所

うつる其の名や致道館

敬教堂に興文校

七十の年を閱し來て

源遠く末深し

蝨を集め雪を積み

出でし偉人は數知れず

茲に己酉の年

七月二十有五日

記念の會の開かれて

老いも若きも打ちつどひ

心の隔なきうちに

信あり義あり長幼の

別を正しくしとやかに

語るや千々の思草

嗚呼尊しの校の恩

あな頼もしの先輩や

遠きかんがみいそしみて

深き恵に答へなん

興文談話會

〔興文談話會〕 明治十四年、小原迪・林登門・小野完吾・後藤東等の諸氏によつて始められた興文學校後援團體、興文講社(興文講社の項参照)は其の後益々盛大に發達し、興文學校發達のために、名實共に支援を續けた。興文學校の隆盛の一因はこの講社に負ふ所尠くない。

興文講社の財産は公債證書額面五千圓あつたが、此の利子二百五十圓を毎年興文學校の經常費の中に組入れて經濟的援助を與へてゐた。然るに明治三十四年此の講會は満了したが、其の収益金保管のため、戸田銳之助等有志者は興文講社殘務整理の名を藉りて興文談話會を組織して、從來の講社本來の主旨に徹して、よく學校を補佐して來た。然し長年月の間には會員中死亡、轉籍の者も漸く多く、それに四十四年三月校區廢止實行と各校經濟共通とは、從來の興文談話會に一大改革と、一大決意とを促進せしめることとなり、飽くまで興文學校

支援を強調する興文談話會は、四十四年四月新に興文談話會會則を作り、其の面目を一新して講社従来の聲譽を失墜することなく、益々其の興隆發展の途を開いた。左に興文談話會會則を摘記して置く。

興文談話會會則

興文談話會會則

興文講社の由來

抑々明治十四年、初めて此の講社なるものを設立したる由來に就いては、其の當時の規則趣意書に詳細せし如く、當時吾が興文校の學費は、有志者の餘金により教育の譽を得たるも、賦課法に變更以來其の進路を遮り、學業不振、設備不整、維持困難等衰態の兆候を來たせり。時の有志者故小原男爵を中心として、東奔西走、寢食を廢して興文講社の設立に盡瘁し、終に此の衰態を挽回し、今日に至る發展の基礎を置けり。即ち講會の滿了するや、其の收益金保管のため、興文講社殘務整理の名の下に、上記有志者を網羅して談話會なるものを組織し、講社本來の目的に従ひ、當該收益の中より或は敷地を寄附し、或は校區々民の教育費賦課負擔を補助軽減して、赫々たる効果を挙げたり。故に現今保存する金額の性質たるも、毫も大垣町に關係を有せざるは勿論、區民より離出したる區有財産にも非らず。全然興文講社の收益金なるや言を俟たず。吾人當該講社の繼承者たる談話會は講社の遺志を體して、其の最後の目的に達するのみにあり。然るに歲月久しき、談話會員中病死轉籍漸く其の數を増し、多數の缺員を生じ、各校經濟共通の議成り、各校區も將に四十四年三月限り廢止せられんとする時運に際し、此の金額の前

途甚だ懸念に堪へず。茲に談話會を擴張して更に會則を設け、確實なる保管法を講じ、以て興文講社最後の目的に達し、先輩諸志の篤志を空しくせざらんと欲するにある耳と云爾

興文講社殘務繼承者談話會惣代

戸田 銳之助

第一章 名稱、位置

第一條 本會は舊會名を襲用して興文談話會と稱し、事務所は當分會長の邸内に置くものとす。

第二章 區域

第二條 本會は舊興文校三十九の大字を以て設置區域と定む。即ち大垣町大字郭・外側・馬場・新馬場・西代官・切石町・西長・鷹匠・牛屋・番組・鳥見・鳩部屋・室・弓・桐ヶ崎・栗屋・旗・歩行高橋・新地・東代官・東長・清水・東今岡・西今岡・田町堤通・田・西田・東水主・西水主・西船・東船・竹島・宮町・南寺内・世安・田口

第三章 組織

第三條 本會は舊談話會員、舊區會議員の全部及興文學校に對し功績ある名望家を以て組織し、其の數を二十五名以内とす。但し興文男女兩校長を加ふることあるべし。

第四條 死亡轉籍により缺員を生じたときは本會に於て舊興文校下より名望ある人士を推選し、限りに會員の増減をなさざるものとす。

第四章 目的

第五章 改正學校令時代

第五條 本會は元興文講社の意志を繼承して貫行するを目的とす。

第六條 前條の趣意により本會の有する資金五千圓に對等する金額を元關東・久瀨川兩校下より購出せしめ、これを合併して大垣町へ寄附し、町村各小學校の基本財産となし得る迄、確實に保管すること。

第七條 前條の目的を達し能はざる時は、最も適當なる時機に於て元興文校下の教育費賦課の負擔額を補助すること。

第五章 保管法

第八條 資金五千圓は之を勸業債券に換へ、本會の名を以て逓信省又は日本銀行へ保管となすこと。

第九條 資金より生ずる利子は第十八條の規定により處分す。

第六章 役員

第十條 本會に左の役員を置く

會長 一名 副會長 一名 理事 二名

第十一條 會長は本會を總理し、副會長は會長を補佐し、理事は會計庶務を掌る。

第七章 選舉

第十二條 本會役員は總て義務上任ずるを以て無報酬とす。

但し學校のため他出を要するときは、實費を支辨することあるべし。

第十三條 本會の役員は總會に於て選任す。

第八章 任期

第十四條 本會役員は任期を滿二箇年と定む。但し改選の場合、前任者を再選するは妨なし。

第九章 會議

第十五條 會議を分ちて、定時總會・臨時總會・役員會とす。

第十六條 定時總會は、毎年四月開會するものとす。臨時總會・役員會は必要を生じたる時之を開く。

第十七條 總會の議事は出席會員の多數を以て之を決す。

第十八條 本會に於て議すべき事項は左の如し

- 一、本會に於て保管する資金に關する件
- 二、保管資金より生ずる毎年の利子を興文男女兩小學校のため、若しくは舊校下の教育費賦課負擔を補助する件
- 三、其の他興文男女兩校兒童の獎勵及教育改善に關する件
- 四、決算報告認定の件

第十九條 本會の會計年度は毎年四月に始り翌年三月に至る。

第二十條 會員の三分一以上の同意を得ざれば本則を變更することを得ず。

明治四十四年四月

會員 氏名

戸田 銳之助 小野 完吾 大澤 鐵二 河地 重助 河合作次郎 河村長四郎
 吉村 八 樋谷 祐七 中島 武三 中村源治郎 那波 光儀 内田 謙作
 國枝 長左衛門 國枝 靜也 安田 左左衛門 香村 善一 小出 隈次郎 安藤 瀧雄
 木村喜間太 三輪 徳治郎 平野 衆次郎 森 彦太郎

學校一覽 (明治四十年—明治四十五年)

興文男子尋常高等小學校 (明治四十年)

校下町區名 郭町外四十五町
 校下戸數 二千二百戸
 校下人口 一萬三十七名
 修業年限 尋常科 四年 高等科 四年
 學級數 尋常科 六學級 高等科 五學級
 生徒數(男生徒) 尋常科 一年 百一人 二年 八十九人
 三年 八十二人 四年 七十一人
 高等科 一年 七十八人 二年 八十九人
 三年 六十四人 四年 四十二人

校舍校地 教室 十一 建物坪數 四百二十二坪五合

敷地坪數 五百三十五坪九合 體操場坪數 一千二百七坪
 其の他坪數 一百九十五坪
 學校經費 三千二百九十二圓五十一錢
 校長 土方 乙吉
 職員 土方 乙吉 石原 賢三 横山 隆一 勝野 金吾 清水 廉
 大橋 清 傍島 百藏 久保田 藤市 佐竹 貞一 溝口 辰吉
 月岡 峰之助 淺井 周造

興文男子尋常高等小學校 (明治四十一年)

校下町區名 前年度に同じ
 校下戸數 二千二百六戸
 校下人口 一萬百四十八名
 修業年限 尋常科 六年 高等科 二年
 學級數 尋常科 八學級 高等科 四學級
 生徒數 尋常科 一年 百二十四人 二年 九十二人
 三年 八十七人 四年 八十八人 五年 六十五人
 高等科 一年 無し 二年 六十九人

校舍校地	三年 六十五人	四年 三十人
教室 十二	建物坪數 前年に同じ	敷地坪數 前年に同じ
體操場、其の他坪數 前年に同じ	三千六百二十五圓四十七錢	土方 乙吉
職員 長	土方 乙吉	石原 賢三
職員 員	勝沼 百藏	津田 順吉
	佐竹 貞一	溝口 辰吉
	淺井 周造	加納 伊作
	富田 喜一	

興文男子尋常高等小學校 (四十二年)

校下町區名	前年度に同じ
校下戸數	二千二百五十八戸
校下人口	一萬六百十二名
修業年限	尋常科 六年 高等科 二年
學級數	尋常科 十學級 高等科 二學級
生徒數	尋常科 一年 一百八人
	二年 一百二十六人
	三年 八十六人
	四年 八十三人
	五年 七十九人
	六年 六十二人

校舍校地	高等科 一年 五十一人	二年 三十六人
學校經費	前年度に同じ	三千七百九十六圓九十一錢
職員 長	土方 乙吉	
職員 員	土方 乙吉	石原 賢三
	佐竹 貞一	大石 利一
	說田 武雄	溝口 辰吉
	月岡 峰之助	
	增島 周次	淺井 周造
	高橋 福三	河村 道之助

興文男子尋常高等小學校 (四十三年)

校下町區名	前年度に同じ
校下戸數	二千二百六十三戸
校下人口	一萬一千四十二人
修業年限	尋常科 六年 高等科 二年
學級數	尋常科 十一學級 高等科 二學級
生徒數	尋常科 一年 一百十三人
	二年 一百九人
	三年 一百二十四人
	四年 九十一人
	五年 八十六人
	六年 八十六人
高等科	一年 五十二人
	二年 三十一人

第二編

明治維新後の本校

校舎校地 前年度に同じ

學校經費 四千五百四十四圓九十一錢

校長 中島國吉

職員 中島國吉 島本豪福 清水 廉 小川武一 佐竹貞一

大石利一 説田武雄 青木彦次 増島周次 溝口辰吉

月岡峰之助 河村道之助 桐山正一 野村健三

興文男子尋常高等小學校 (明治四十四年)

校下町區名

(經濟共通トナリ、四十四年三月改ム)

郭・袋・外側・馬場・新馬場・切石・西代官・鷹匠・西長・牛屋・番組・鳥見・鳩

部屋・室・弓・桐ヶ崎・栗屋・田口・旗・新地・西今岡・東今岡・田堤・田・西田

東水主・西水主・西船・東船・依・竹島・宮・南寺内・世安・室村・宮村・西崎

四千四百八十九戸(大垣町全體)

校下戸數 二萬二千百五十人

校下人口 尋常科 六年 高等科 二年

修業年限 尋常科 十二學級 高等科 二學級

學生數 尋常科 一年 百二人 二年 百二十五人 三年 百三十人

校舎校地 高等科 四年 百三十人 五年 九十五人 六年 八十八人

教室數 十五年 七十二人 二年 二十六人

敷地坪數 五百九十坪九合 建物坪數 四百七十七坪五合

其ノ他坪數 百九十五坪 體操場坪數 一千百五十二坪

學校經費 一萬八千二十三圓(大垣町全體)

校長 中島國吉

職員 中島國吉 島本豪福 清水 廉 大谷利一 説田武雄

西脇金藏 青木彦次 井上政治郎 清水賢三 鈴木喜一

馬淵脩次 月岡峰之助 稻葉 直 河村道之助 増田貞吉

桐山正一

興文男子尋常高等小學校 (明治四十五年)

校下町區名 前年度に同じ

校下戸數 四千五百三十七戸(大垣町全體)

校下人口 二萬二千二百一名

修業年限 前年に同じ

第五章

改正學校令時代

學級數	尋常科 十二學級	高等科 二學級
生徒數	尋常科 一年 百二十五人	二年 百三人
	四年 百二十七人	五年 百四十人
	高等科 一年 六十三人	二年 五十一人
		三年 百二十二人
		六年 九十一人

校舍校地

教室數十五 三百十坪 校地總坪數 二千七十五坪九合
 校舍及附屬舍總坪數 四百二十七坪五合八勺 屋內體操場 四十五坪
 屋外體操場坪數 一千三百五十五坪一勺 學校園坪數 百二十三坪
 農業實習地坪數 百二十四坪五合

學校經費

一萬八千六百六十七圓(大垣全體)

職員

中島國吉	鳥本豪福	清水廉	西脇金藏	大谷利一
說田式雄	青木彦次	清水賢三	鈴木喜一	松永省三
堀領助	月岡峰之助	稻葉直	增田貞吉	河村道之助
安藤米三				

興文女子

興文女子尋常高等小學校 (明治四十年)

校下町區名 郭町外四十五町

校下戶數 二千二百戶

校下人口 一萬三十七名

修業年限 尋常科 四年 高等科 四年

生徒數 女生徒 尋常科 二百四十八名 高等科 三百四十六名

學校經費 二千八百十六圓也

校長

竹井正巳

職員

竹井正巳	堤道太郎	河村道之助	岡田瀧之助	清水經造
河村ゆゑ	稻葉徂	中野壽衛	大橋みつ	栗田重二
石井奈美				

興文女子尋常高等小學校 (明治四十一年)

校下町區名 前年度に同じ

校下戶數 二千二百六戶

校下人口 一萬百四十八名

修業年限 尋常科 六年 高等科 二年

學級數 尋常科 八學級 高等科 二學級

生徒數 尋常科 四百十七名 高等科 五百十八名

第二編

明治維新後の本校

學校經費 二千九百九十三圓八十八錢

校長 竹井正巳

職員 竹井正巳 山田孝三 堤 道太郎 河村道之助 岡田瀧之助

清水經造 河村ゆら 稻葉 徂 石井奈美 大橋みつ

栗田重二 里見いう 淺野ゆら

興文女子尋常高等小學校 (明治四十二年)

校下町區名 前年度に同じ

校下戸數 二千二百五十八戸

校下人口 一萬六百十二名

修業年限 尋常科 六年 高等科 二年

學級數 尋常科 九學級 高等科 一學級

生徒數 尋常科 一年 一百五人 二年 八十八人 三年 九十七人

尋常科 四年 八十一人 五年 八十五人 六年 五十三人

高等科 一年 三十一人 二年 十八人

學校經費 三千一百九十三圓七錢

校長 竹井正巳

職員 竹井正巳 山田孝三 堤 道太郎 吉田泰治 岡田瀧之助

清水經造 稻葉 徂 宮田かね 栗田重二 里見いう

淺野ゆら 西尾きん

興文女子尋常高等小學校 (明治四十三年)

校下町區名 前年度に同じ

校下戸數 二千二百六十三戸

校下人口 一萬一千四十二人

修業年限 尋常科 六年 高等科 二年

學級數 尋常科 十學級 高等科 二學級

生徒數 尋常科 一年 一百五人 二年 八十七人 三年 九十七人

尋常科 四年 七十九人 五年 八十三人 六年 不詳

高等科 一年 二十五人 二年 不詳

學校經費 三千五百三十五圓十四錢

校長 竹井正巳

職員 竹井正巳 杉野惣一 堤 道太郎 村瀬耕作 岡田瀧之助

清水經造 稻葉 徂 兒門靜尾 栗田重二 里見ゆら

西尾きん 高橋美津 小寺 禮

第五章

改正學校令時代

興文女子尋常高等小學校 (明治四十四年)

校下町區名

(經濟共通となり、四十四年三月改む)

郭・袋・外側・馬場・新馬場・切石・西代官・鷹匠・西長・牛屋・番組・鳥見・鳩
部屋・室・弓・桐ヶ崎・栗屋・田口・旗・新地・西今岡・東今岡・田堤・田・西田
東水主・西水主・西船・東船・俵・竹島・宮・南寺内・世安・室村・宮村・西崎

校下戸數

四千四百八十九戸(大垣全體)

校下人口

二萬二千百五十人

修業年限

尋常科 六年 高等科 二年

學級數

尋常科 十一學級 高等科 二學級

生徒數

尋常科 一年 百十六人 二年 九十八人 三年 八十八人
四年 百四人 五年 八十一人 六年 七十九人

學校經費

高等科 一年 二十五人 二年 十五人
一萬八千二十三圓 (大垣全體)

校長

竹井正巳

職員

竹井正巳 杉野惣一 堤 道太郎 村瀬耕作 岡田瀧之助
白井丈助 清水經造 稻葉 徂 西松之枝 兒門靜尾

栗田重二 里見ゆう 西尾きん 高橋美津 小寺 禮
田中令吉(校醫)

興文女子尋常高等小學校 (明治四十五年)

校下町區名

前年度に同じ

校下戸數

四千五百三十七戸

校下人口

二萬二千二百一名

修業年限

尋常科 六年 高等科 二年

學級數

尋常科 十一學級 高等科 二學級

生徒數

尋常科 一年 一百一人 二年 一百八人 三年 一百一人
四年 九十五人 五年 一百一人 六年 一百四人

學校經費

高等科 一年 四十八人 二年 三十三人
一萬八千六百六十七圓 (大垣全體)

校長

竹井正巳

職員

竹井正巳 杉野惣一 堤 道太郎 村瀬耕作 岡田瀧之助
水谷丈助 清水經造 兒門靜尾 稻葉 徂 西松之枝
里見ゆう 西尾きん 高橋美津 小寺 禮 中川ナカ

尾崎とよ 武山さと 工富 輝 田中令吉(校醫)

明治天皇
の大喪

〔明治天皇の大喪〕 明治四十五年七月三十日、天皇陛下崩御あらせられた。

是より先、七月二十日官報號外を以て 天皇陛下御不例發表あるや、國民は日夜御惱御平癒を祈願し奉つたが、遂に御登遊ばされた。

興文小學校に於ては、御不例以來御快癒を祈り奉り、七月二十九日 聖上陛下御容體御急變遊ばされし由拜承し、全校兒童職員神宮奉齋會本部・八幡神社にひたすら御平癒祈願を行つたが、終に崩御遊ばされ、世は諒闇となつた。仍て大正元年八月十五日全兒童を召集して、諒闇中の心得と其の他を訓戒した。大正元年九月十三日、青山練兵場に於て大葬儀を行はせらるゝや、兒童を召集して、校庭に先帝御大葬遙拜式を舉行した。

九月十四日御靈柩伏見桃山に向はせられ、大垣驛御通過あらせらるゝに際し、我が校に於ては男子八百名、女子六百七十四名は、大垣驛構内に於て御靈柩を送迎し奉り、午後一時十分第一供奉列車御着、同一時四十三分御靈柩車着御遊ばされ、一同恐懼慟哭して、送迎し奉つた。

第六章 學制改革時代

第一節 學制改革

學制改革

明治四十五年七月 明治大帝崩御あらせられ、大正天皇直ちに寶祚を踐ませ給ふや、先帝の教育上の御偉業、御精神を其儘に紹述せられ、益々その振興を圖らんとする御方針を昭示せられ、文部當局亦深くこの聖旨を體して其の事に盡瘁したので、大正時代の國民教育はその確固不易なる教育方針の下に、明治興隆期の後を承けて、些の撓みなく駁々乎として益々發展振興の一途を辿つたのであつた。

我國の學校教育制度は産業の隆昌と國運發展とに伴つて、漸次その體系を整備し來つたのであるが、然もその間に學制改革の問題は屢々教育者の考慮を促してゐた。これが終に大正二年六月教育調査會の設置となり、教育に關する重要な事項を調査し、諮詢に應じて意見を開陳し、建議することが出来ることとした。然るにこの會は教育改革の主要問題に着手し得ず、大正六年九月これに代つて臨時教育會議が開かれ、教育上多年懸案の問題を議することとなつた。内閣總理大臣より諮問せられた教育問題は廣範圍に涉つたが、小學校教育に關するものに就いては、其の決議事項を見るに、教員俸給の半額を國庫支辨として有効なる方

教育調査會

臨時教育會議

法によつて分配すること、教育方針としては國民道德教育の徹底、兒童身體の健全なる發達を計る方法を講じ、不必要なる記憶を排し、理解と應用とを主とし、施設方法の劃一を打破すること、小學教員を改善する爲に、小學教員をして教育者たるの精神を持たしめ、人物尊重の趣旨を貫徹せしめ、師範學校に優良なる教員を集め、附屬小學校を改善し、視學機關を完備すること、教育内容に關しては、その課程を整理按排して兒童心身の發達に適應せしめ、高等小學校の教科目は選擇の範圍を廣くし、教科書は國定の方針とし、中等學校入學準備教育の弊風を矯正し、家庭及び社會との協力に適切なる方法を考究せしめる事であつた。

斯の如き決議事項を基として、文部省は教育制度の改善に着手することとなり、臨時教育會議はこゝにその目的を達したので、大正八年五月之を廢止され、これに代つて臨時教育委員會が設けられ、これ等教育方針實行上の効果をあげるための諸事項を議する機關となつた。

市町村義務教育
庫負擔法

小學校に於ては文部省は先づ翌大正七年三月「市町村義務教育費國庫負擔法」を公布して改革の第一手を染めた。かくて一千萬圓を支出し、これを以て市町村立小學校教員俸給の一部が國庫の支出金に據ることとなつた。

小學校令
施行規則
の改正

次に大正八年二月小學校令の改正が行はれ、三月には小學校令施行規則の改正があり、高等小學校の學科課程を兒童の要求と土地の狀況に適應せしめるために取捨選擇の範圍を廣くし、尋常小學校の理科を一箇年早く課して時勢の要求に應ぜしめ、國民の自覺を高めるた

教育評議
會

めに地理、日本歴史の教授時數を増加した。

先きに設けられたる臨時教育委員會は大正十年七月に至つて廢せられ、新に「教育評議會」が出来た。これの權能は前と同様に文部大臣の監督に屬し、其の諮詢に應じて教育に關する重要なる事項を調査審議し、意見を開申し、又は教育に關する重要事項につき文部大臣に建議する事を得しめた。其の他大正九年に「教科書調査會」、十年に「臨時國語調査會」、翌十一年に「學校衛生調査會」等も出来た。以て教育改善に對する眞摯なる活動が窺はれる。

然るに大正十三年四月教育評議會が廢止されて、「文政審議會」が之に代り、内閣總理大臣が是の總裁となり、副總裁の一員として文部大臣が之に當る事となつた。かくて先づ義務教育年限延長問題の諮詢を見たが、内閣更迭のためその答申を見ずして了つた。

上記の如き諮詢機關が相繼いで設立を見るに至つた事は、如何に學制改革と小學校教育の充實向上に對する國家的要求が高潮し來つたかを充分に察知することが出来る。

學制頒布
五十周年

大正十一年十月三十日學制頒布五十周年記念式が盛大に舉行せられ、全国各地から代表者が之に參列して、熾烈なる國民の教育意識を反映すると共に、教育界に於ける一大刷新と一大飛躍を翹望するの眞情を披瀝するに至つた。この國民的歡喜と、希望の裡に、大正天皇は皇太子攝政宮殿下を御名代として、式場たる東京帝國大學に臨ませ給ひ、畏くも勅語を下し給ひ、教育に従事する者の益々力を啓發成就の事に盡すべきを訓諭し給うたことは洵に感

激に堪へない。又大正十三年一月皇太子攝政宮殿下御成婚の禮を擧げさせられ、その佳辰に方つて 天皇陛下には特に兒童就學獎勵の思召を以て御内帑金を下賜され、家計貧困の兒童に至るまで就學の慶福に浴し得るに至つたことは、聖恩の厚き、洵に感泣の外ない。

大正天皇は御在位僅か十五年にして崩御遊ばされ、今上陛下には先帝崩御と同時に寶祚を踐ませ給ひ、先帝の御偉業を繼承せられ、益々國運の發展と國威の宣揚に日夜大御心をわづらはせらるゝ事は、吾々國民の等しく恐懼に堪へない所である。殊に陛下には教育に大御心を留めさせらるゝこと深く、昭和三年十二月文部大臣を親しく宮中に召され、教學振興に關し優渥なる御沙汰を降し給ひ、更に昭和六年十月三十日東京高等師範學校六十年記念式場に行幸あらせられ、鳩山文部大臣を召され

勅語

健全ナル國民ノ養成ハ一ニ師表タルモノ、徳化ニ俟ツ事ニ教育ニ從フモノ其レ奮勵努力セ

と重ねて勅語を下され、文部大臣は聖旨のほど恐懼措く處を知らず、直ちに訓令を發して全國教育者の献身的努力を喚起すべく訓戒した。

御親閱

又畏くも昭和九年四月三日、特に小學校教員の御親閱を賜はり、重ねて優渥なる勅語を賜はり、

國民道德ヲ振作シ以テ國運ノ隆昌ヲ致スハ其ノ淵源スル所實ニ小學教育ニ在リ事ニ其ノ局

ニ當ルモノ夙夜奮勵努力セヨ

と仰せられた。教育に従事する者、陛下がかくも教育に意を留めさせ給ふこと深く、現代教育の進むべき途を教へ給ふことかくも厚きものあるを拜察する時、粉骨碎身聖旨の萬分の一にも報ひ奉る覺悟を持たねばならぬ。

今や戰時體制下にある我が國は、萬難を排し、舉國一致、國難打開に邁進せねばならぬ。建國以來の不易なる我國の使命を果すべく、この難局を打開して、世界人類の平和と幸福の爲めに新しい活路を開拓し、天壤無窮の皇運を扶翼し奉る國民を養成せねばならぬ重責を擔ふ國民教育者は、この時局に直面して猛省奮起、聖旨を奉戴して新日本建設の爲めに全我的努力を期すべきである。

多事多難の國家の現状は、一日も早く學制改革を要求し、國民教育の刷新を熱望して止まないものがある。

其の内小學校に關する主なるものは、義務教育年限を八箇年とすることであつて、此の問題は近年種々論議検討せられ、其の實現はまだ見ないが、必ずや近き將來に於て其の實現を見ることであらう。

第二節 男女兩興文學校の發達

昭憲皇太后の大喪

〔昭憲皇太后の大喪〕 大正三年四月十一日 皇太后陛下崩御あらせらる。

畏かれども皇太后陛下には、先帝曠古の大業を建てさせ給ふに當つて聖徳を輔佐しまゐらさせられ、又文藝・美術・博愛慈善の事業を御勸奨あらせらるゝ事厚く、温順・貞淑・恭儉・慈愛の御徳高く深くおはしまし、ことは、萬民のひとしく仰ぎまつる所であつた。

崩御の報至るや、本校に於ては御大喪につき學校は一日休校し、兒童を集めて哀悼の誠意を表しまつり、五月二十四日御大葬を代々木に行はせらるゝや、職員一同遙拜式を舉行し、御靈柩伏見桃山に向はせられ、途中大垣驛御通過あらせらるゝに際しては、興文男女兩校生徒一千二百六十九名、職員一同、構内に恐懼送迎し奉り、二十四日より二十六日に至る三日間を臨時休校とした。

大正の大禮

〔大正の大禮〕 大正天皇には大正四年十一月十日を以て、京都御所紫宸殿に於て即位の大禮を擧げさせられ、同月十四日を以て大嘗祭を行はせらるゝ旨發表せられた。

十一月六日、天皇陛下には親しく賢所を奉じて京都に行幸あらせられることゝなつた。途中大垣驛御通過に際しては、我が興文學校にあつては、尋五以上の生徒、興文男子小學校五百七十一名、同女子小學校生徒五百十九名、職員二十四名は、驛構内に奉送迎申し上げ、低學

年生徒は學校にて遙拜し奉つた。

十一月十日、本校に於ては御大禮祝賀式を舉行し、御大典記念樹を校庭に植ゑた。十四日には大嘗祭遙拜式を舉行し、十五日は臨時休校をして、謹んで祝賀の意を表し奉つた。

御眞影奉戴

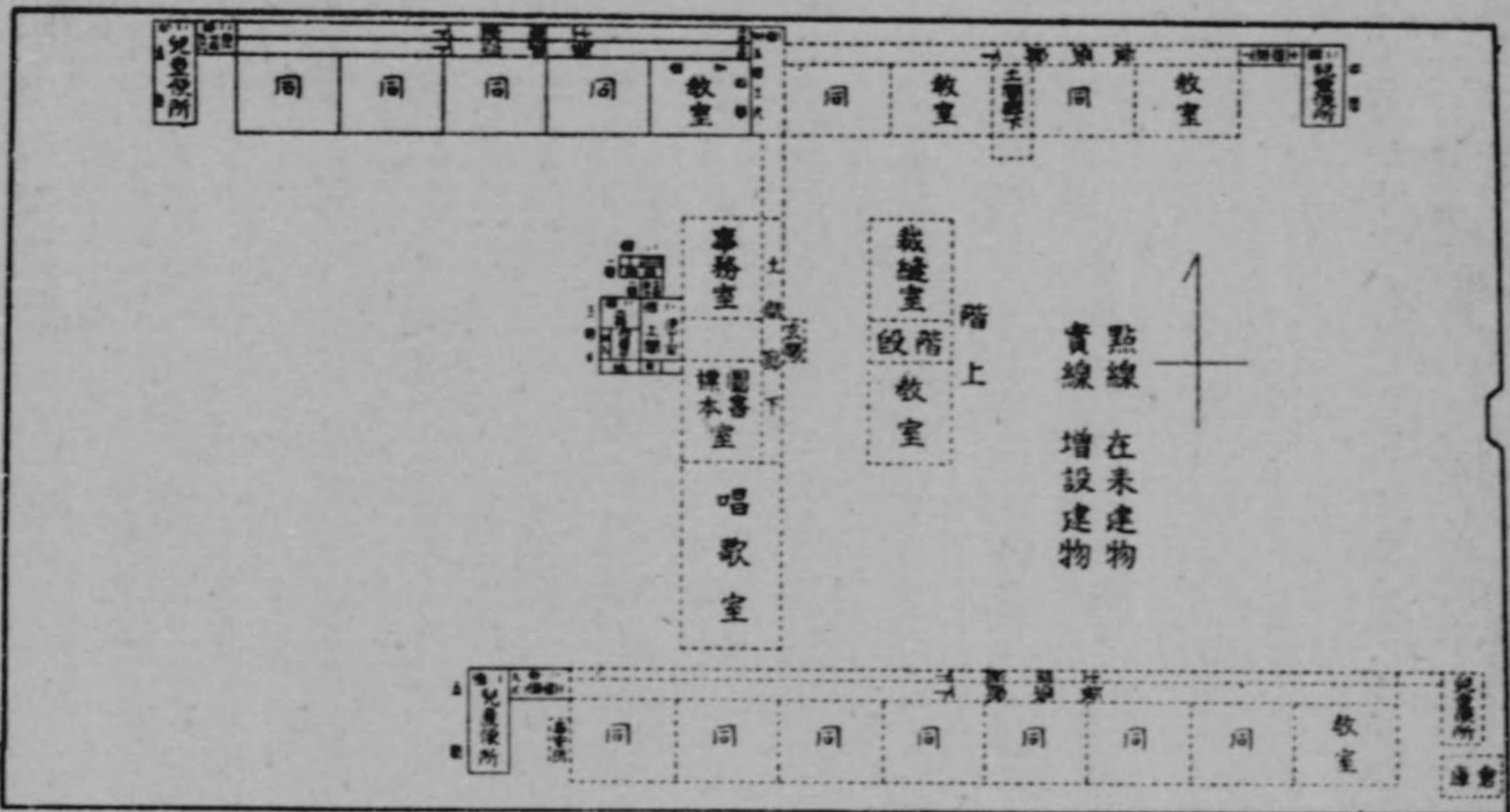
〔御眞影奉戴〕 大正四年十月二十七日、興文男女兩小學校に於ては、大正天皇の御眞影を拜受し、謹んで同日奉戴式を舉行した。翌五年十月二十七日皇后陛下の御影御下賜になり、兩校に於ては謹んで奉戴し、同日奉戴式を舉行した。

興文男子尋常高等小學校の増築

〔興文男子尋常高等小學校の増築〕 大垣に於ける普通教育は從來興文男子・興文女子・關東・久瀬川の四校を以て之に充てゝゐたが、戸口の増加に由つて學齡兒童は累加し、大正五年四月の戸數五千百七十七戸、人口二萬七千五百五十三人、學齡兒童三千七百五十一人に達し、各學校共校舎は狹隘を告げ、早晚一大改革を要する時期となつた。此に於て大垣はその前途の發展も充分に考慮し、發展の第一段階として、町の中央にして而も通學上至便な興文男子尋常高等小學校に校舎を増築するの議を決して、大正五年五月三日縣に増築を申請し、同年七月其の認可を得て、工事に着手し、十月末日費額七千貳百六拾餘圓にて竣工した。其の増築校舎概要は左に示す如くであつた。

- 一、校舎 桁行二十五間・梁間五間三尺 平家百三十七坪五合 壹棟
- 工費 四千六百四十七圓七十錢七厘

興文男子尋常高等小學校校地舍平面圖
縮尺二分之二



- 一、兒童便所 桁行 二五間 建坪十坪二棟二十坪
工費 八百拾六圓參拾錢
- 一、兒童便所 桁行 二四間 建坪八坪
工費 三百四拾壹圓八拾壹錢八厘
- 一、校舍之間土間 廊下屋根改造 巾 壹間半 平家八坪二合五勺
長 五間半 工費 百貳拾圓參錢參厘
- 一、渡り廊下 桁行 延長五間 梁間 一間三尺 桁行 三間 十坪 五合
工費 貳百四拾圓四拾七錢八厘
- 一、使丁室 桁行 四間半 平屋建十四坪 壹棟
梁間 三間半 工費 參百五拾貳圓七拾貳錢貳厘
- 一、敷地嵩置工事 工費 四百九拾貳圓四拾七錢

(平面圖參照)

學校一覽

〔學校一覽〕 (大正二年—大正五年)

興文男子尋常高等小學校 (大正二年)

校下町村區名

外側・西代官・新馬場・郭・馬場・切石・桐ヶ崎・西長・室・田・東今岡・西今岡・俵・西田・田堤通・東水主・西水主・鷹匠・室村・東船・西船・番組・鳥見・鳩部屋・竹島・寺内・世安・宮村・宮・弓・栗屋

校下戸數

四千七百戸 (大垣全體)

校下人口

二萬三千二十三人

修業年限

尋常科 六年 高等科 二年

學級數

尋常科 十二學級 高等科 二學級

生徒數

尋常科 一年 一百七人 二年 一百二十人 三年 一百一人
四年 一百十八人 五年 一百三十六人 六年 一百二十三人
高等科 一年 六十五人 二年 四十人

校舍校地

教室 十五 (三百四坪) 其他 八 (二百七十七坪五合) 其の他二 (六百四十二坪五合)
屋外體操場二 (二千六坪九勺) 農業實習地一 (六十二坪五合)

學校經費

二萬四千四十九圓 (大垣全體)

校長

中島國吉

第六章

學制改革時代

職員

鳥本 豪福 清水 廉 説田 武雄 青木 彦次 清水 賢三
 鈴木 喜一 堀 領助 松永 省三 稻葉 直 近藤 秋一
 小川 傳 月岡 峯之助 増田 貞吉 河村 道之助 水谷 兵三

興文男子尋常高等小學校 (大正三年)

校下町村區名

前年度に同じ

校下戸數

四千八百八十一戸

(大垣全體)

校下人口

二萬二千五百五十四人

修業年限

前年度に同じ

學級數

尋常科 十二學級

高等科 二學級

生徒數

尋常科 一年 一百三十四人

二年 一百十人

三年 一百十八人

四年 一百〇八人

五年 一百二十人

六年 百三十六人

校舎校地

前年度に同じ

學校經費

二萬三千四十四圓

職員

中島 國吉

校長

清水 廉

職員

説田 武雄

職員

青木 彦次

職員

清水 賢三

職員

鈴木 喜一

堀 領助 松永 省三 稻葉 直 近藤 秋一 渡邊 傳
 月岡 峯之助 増田 貞吉 河村 道之助 松永 兵三

興文男子尋常高等小學校 (大正四年)

校下町村區名

前年度に同じ

校下戸數

五千十四戸

校下人口

二萬四千五百九十二人 (大垣全體)

修業年限

前年度に同じ

學級數

尋常科 十二學級

高等科 二學級

生徒數

尋常科 一年 一百三十一人

二年 一百三十二人

三年 一百六十六人

四年 一百二十四人

五年 一百七十七人

六年 一百十三人

校舎校地

前年度に同じ

學校經費

二萬五百八十四圓

職員

中島 國吉

校長

横幕 薫

職員

清水 廉

職員

説田 武雄

職員

青木 彦次

職員

鈴木 喜一

職員

堀 領助

職員

松永 省三

職員

山田 治

職員

稻葉 直

近藤秋一 月岡峯之助 増田貞吉 河村道之助 松永兵三

興文男子尋常高等小學校 (大正五年)

校下町村區名	前年度に同じ
校下戸數	五千一百七十七戸 (大垣全體)
校下人口	二萬七千五百五十三人
修業年限	前年度に同じ
學級數	尋常科 十二學級 高等科 二學級
生徒數	尋常科 一年 一百三十九人 二年 一百三十二人 三年 一百三十人 尋常科 四年 一百一十一人 五年 一百二十一人 六年 一百七人 高等科 一年 六十六人 二年 四十四人 前年度に同じ
校舍校地	前年度に同じ
學校經費	二萬八千六百九十二圓 (内臨時費 七千七百二十圓)
校長	中島國吉
職員	横幕 薰 清水 廉 說田武雄 青木彦次 清水賢三 鈴木喜一 堀 領助 松永省三 稻葉 直 月岡峯之助 堤 文雄 久世文二郎 大橋善治 河村道之助

興文女子

興文女子尋常高等小學校 (大正二年)

校下町村區名	外側町外三十箇町 (興文男子に同じ)
校下戸數、校下人口、修業年限、學校經費	(興文男子尋常高等小學校同年度のものに同じ、前項參照)
學級數	尋常科 十二學級 高等科 二學級
生徒數	尋常科 一年 一百二十一人 二年 九十八人 三年 九十九人 尋常科 四年 一百九人 五年 一百五人 六年 九十三人 高等科 一年 三十六人 二年 三十二人
校舍校地	教室 十五 (二百五十三坪七合五勺) 其他 九 (二百十六坪二合五勺) 屋外體操場 (七百八坪) 其他 四 (八百八十七坪八合六勺) 教員住宅戸數一 (十七坪九合九勺)
校長	竹井正巳
職員	杉野惣一 村瀬耕作 堤 道太郎 岡田瀧之助 水谷丈助 清水經造 兒玉靜尾 大熊 鼎 西尾きん 高橋美津 小寺 禮 中川ナカ 尾崎セ代 武山さと 工富 輝

興文女子尋常高等小學校 (大正三年)

校下町村區名、校下戸數、校下人口、修業年限、學校經費

(同年度の興文男子校に同じ前項参照)

學級數	前年度に同じ	二年	一百二十一人	三年	一百五人
生徒數	尋常科	一年	一百二十八人	五年	九十九人
		四年	一百六人	六年	一百一人
	高等科	一年	四十六人	二年	二十人

校舎校地 前年度に同じ

校長 竹井正巳

職員 杉野惣一 村瀬耕作 岡田瀧之助 水谷丈助 清水經造

大熊 鼎 倉橋まさ 中井政枝 小寺 禮 増島周次

横井通敏 武山さと 工富 輝

興文女子尋常高等小學校 (大正四年)

校下町村區名、校下戸數、校下人口、修業年限、學校經費

(同年度の興文男子校に同じ、前項参照)

學級數	前年度に同じ	二年	一百二十三人	三年	一百二十四人
生徒數	尋常科	一年	一百三十二人		

校舎校地	高等科	四年	一百十八人	五年	九十九人	六年	九十五人
校長		大正二年度に同じ	二年	三十三人			
職員	竹井正巳						

杉野惣一	川合鎌治	金森源吾	石崎三八	岡田瀧之助
水谷丈助	北村 幸	大熊 鼎	倉橋まさ	佐藤玉惠
小寺 禮	工富 輝	武山さと	川瀬かく	説田さだ

文女子尋常高等小學校 (大正五年)

校下町村區名、戸數、人口、修業年限、學校經費

(同年度の興文男子校に同じ、前項参照)

學級數	十二學級	二年	一百二十七人	三年	一百二十二人
生徒數	尋常科	一年	一百四十人	五年	一百十五人
		四年	一百四十三人	六年	九十三人
	高等科	一年	三十七人	二年	三十一人

校地校舎 前年度に同じ

校長 竹井正巳

職員	川合 鎌治	金森 源吾	國枝 省三	水谷 丈助	岡田 瀧之助
	志知 幸	宇野 善吾	倉橋 まさ	佐藤 玉恵	川瀬 かく
	清水 ふじゑ	小寺 禮	工富 輝	武山 さと	土屋 ふじ

第三節 北尋常小學校・大垣高等尋常小學校

高等科廢止と校名改稱

〔高等科廢止と校名改稱〕 大正五年の頃、大垣に於ける小學校改革に關する議論がやかましく、竟に八月大垣四小學校に併置の高等科廢止と、校名改稱とが、町會に提議せられる事になり、九月に至つて、大垣の四小學校、即ち興文男子・興文女子・關東・久瀬川の尋常小學校に併置の高等科を廢止し、夫等諸校の高等科在籍兒童は全部興文男子小學校に收容することとし、併せて校名改稱とが種々論議せられ、結局町會は改稱に可決確定するに至つた。即ち従来の興文男子尋常高等小學校は大垣尋常高等小學校、興文女子尋常高等小學校は北尋常小學校、關東尋常高等小學校は東尋常小學校、久瀬川尋常高等小學校は西尋常小學校とすることであつた。當時古い傳統を誇る興文校名の廢止に就いては、いたく世人を憤慨せしめたものであつた。今高等科廢止並びに校名改稱の事由を考察するに、一は町經濟に立脚し、一は人心融和の二點に存したものであつた。

これより先大正五年十月興文男子尋常高等小學校の増築工事が行はれた。それは勿論戸口の増殖による學齡兒童の増加に起因するものであつたが、當時他小學校と雖も校舎の狹隘は言を俟たず。然るに中央にして通學上至便なる事由に依て、興文男子尋常高等小學校にのみ増築を行つた事は、この大改革高等科廢止と校名改稱の先驅的行動であつた。由來四小學校に高等小學校併置の事は、學區存立時代の經營を町に繼承した所であつて、一自治團體内に尙數箇の自治區を包容し、殊に町村の主要事務として、其の施設經營等は全く統一せず、互に學校の經歷等に關して紛争を生じ、民心合致せず、町百般の事項に迄支障を生じ易く、當事者は常に之を遺憾として、先に萬難を排して學區の經濟共通を決行して、民心の融和を計る一端とし、其の後も常に此に關して苦慮した。

一方經濟方面に關しても、各校の校舎狹隘は年々切迫し、各校の増築は最早や猶豫すべからざる域に到達した。然も當時の町經濟に於て到底夫等各校増築の要望を入れる事は許されなかつた。即ち大正五年十月、興文男子尋常高等小學校の増築を許して、こゝに大垣全體の高等科兒童を收容し、各尋常小學校に教室の餘裕を生ぜしめて、數年を維持せしめる意圖に存したものと見ることが出来る。町會に於て可決確定を見た改革事項は、十月四日縣に認可申請をなし、高等小學校廢止と校名改稱を十月末日限り決行せんとしたが、縣は學年半にして不適當なる處置と斷じて許さず、此に於て町會は再び沸騰し、重ねて懇請したが、結局認

可を得ることは出来なかつた。

翌六年三月十九日に至つて始めて其の認可を得、同年三月三十一日限り興文女子尋常高等小學校外二校に併置する高等科を廢止し、併せて校名改稱を行ふに至つた。

此に於て學制頒布以來四十餘年間襲用し來つた古い輝かしい由緒と傳統とを有し、興文の名に於て幾多生徒を調育し來り、爲めに顯はれたる者其の數を知らず。かゝる芳しい歴史を有する興文校名を此に至つて全く廢絶せしめた事は、諸種の事情が之を許さざるものがあつたと云へ、本校にとつては實に痛恨措く能はざる事であつた。

大垣尋常高等小學校

北尋常小學校

大正六年四月一日より興文男子尋常高等小學校は大垣尋常高等小學校と改稱せられ、大垣町小學校高等科兒童を本校へ全部收容し、尋常科兒童半數の男兒と北尋常小學校の女兒とを交換し、尋常科兒童數(男子)六百二名、學級數十學級、高等科兒童數(男女)三百五十名、學級數七學級を有するものとなり、興文女子尋常高等小學校は北尋常小學校と改められて、男子尋常科一二年生計百三十三名と其れに女子七百十四名を有し、學級數十四學級を持つ學校となつた。同時に關東尋常高等小學校は東尋常小學校となり、(男女)九百七十七名、學級數十五學級のものとなり、久瀬川尋常高等小學校は西尋常小學校となり、兒童數(男女)五百三十三名、學級數十四學級の學校となつた。

市制施行

當時大垣四小學校の兒童數は男子一千七百十九名、女子一千五百九十名、内尋常科男子千五百七名、同女子一千四百五十二名、高等科は男子二百十二名、女子百三十八名であつた。

〔市制施行〕大垣は大正時代に至つて、頗に町勢の發展を見、資力戸口の増加、商工業の發達、交通機關の整備等は市の體面を維持するに足るのみならず、將來尙一層の發達を豫想するに難くはなかつた。大正二年舉げられた市制施行準備委員は竟に大正六年四月市制施行を上申することに決し、大垣町會議長三原範治より地方廳を經由して内務大臣に其の意見を上申した。かくて内務省よりの調査も終り、大正七年二月十三日官報を以て、大正七年四月一日より大垣町を廢して其の區域を以て大垣市を置くべき事を告示した。

大垣に於ては四月一日祝賀式を舉行し、一日より三日間に亘つて市民一同種々祝賀の催しをなし、大に市の前途を祝福した。學校に於ても當日臨時休校として、一般市民と歡喜を共にし、併せて前途を祝福して、午前中職員兒童一同祝賀旗行列を行つた。

學校一覽 (大正六年—大正七年)

大垣尋常高等小學校 (大正六年)

校下町村區名	大垣町(全町)
校下戸數	五千二百七十七戸
校下人口	三萬七百五十三人

第二編

明治維新後の本校

修業年限
學級數
生徒數

尋常科六年 高等科二年
尋常科十一學級 高等科七學級
(男女合計)

尋常科 一年 一百五十八人 二年 一百五十一人 三年 一百二十三人

四年 一百二十八人 五年 一百三十八人 六年 五十五人

高等科 一年 二百一十一人 二年 一百三十六人

教室 二十(四百十五坪) 其他 十六(七十九坪三合)

屋外體操場二(二千三百坪) 其他 五(一千四百七十一坪九合)

二萬二千九百三十九圓

校舎校地
學校經費
職員

桐山良材

職員

竹中 薰 清水 廉 說田武雄 青木彦次 清水賢三

鈴木喜一 松永省三 稻葉 直 土川政鶴 月岡峯之助

久世文三郎 大橋善治 佐藤玉惠 土岐みさ 倉橋まさ

白井利人 神野はる 河村道之助 武山さと

大垣尋常高等小學校(大正七年)

校下町村區名、修業年限、前年度に同じ

校下戸數

五千四百二十二戸

校下人口

三萬二千一百四十一人

學級數

尋常科 十二學級 高等科 七學級

生徒數

(男女共)

尋常科 一年 一百五十五人 二年 一百五十八人 三年 一百三十八人

四年 一百二十三人 五年 一百二十九人 六年 一百三十二人

高等科 一年 二百五人 二年 一百五十人

教室 二十一(四百十五坪) 其他 十六(七十九坪三合)

屋外體操場二(千三百坪) 其他 五(一千四百七十一坪九合)

(市制施行につき四月末に於ては經費未定)

學校經費

桐山良材

職員

竹中 薰 清水 廉 說田武雄 青木彦次 清水賢三

鈴木喜一 日比野 廣 松永省三 稻葉 直 土川政鶴

月岡峯之助 久世文三郎 大橋善治 佐藤玉惠 土岐みさ

倉橋まさ 安部 鼎 神野はる 武山さと 河村道之助

北小學校

北尋常小學校 (大正六年)

校下町村區名 外側町外三十ヶ町
 校下人口數 同年度大垣尋常高等小學校に同じ
 修業年限 尋常科 六年
 學級數 十三學級
 生徒數 (男女合計)
 尋常科 一年 一百二十五人
 二年 一百一十二人
 三年 一百二十五人
 四年 一百三十八人
 五年 一百一十六人
 六年 一百六十五人

學校經費 二萬二千九百三十九圓

校長 竹井正巳

職員

川合鎌治 金森源吾 國枝省三 堀 領助 水谷丈助
 志知 幸 堤 文雄 奥田秀逸 岡田瀧之助 宇野善吾
 川瀬 かく 清水ふじゑ 小寺 禮 小野千三

北尋常小學校 (大正七年)

校下町村區名 外側町外三十ヶ町

校下戶數、校下人口、學校經費

同年度大垣尋常高等小學校に同じ、(前項参照)

學級數 尋常科 十二學級

生徒數 尋常科 一年 一百三十六人

二年 一百二十二人

三年 一百三十二人

四年 一百二十八人

五年 一百三十三人

六年 一百六十六人

教室 十四(二百三十五坪七合五勺) 其他 十(二百三十四坪二合五勺)

校舍校地 屋外體操場一(七百八坪) 其他 四(八百八十七坪八合六勺)

教員住宅 一(十七坪九合九勺)

職員 校長 竹井正巳

職員 奥田眞一 金森源吾 松岡文雄 堀 領助 水谷丈助

堤 文雄 奥田秀逸 岡田瀧之助 清水ふじゑ 小寺 禮

勝村しづ 今津きん

第四節 大垣高等小學校・大垣尋常小學校
南尋常小學校

學校統一と戸田家の寄附

〔學校統一と戸田家の寄附〕大垣に於ては小學校改革について多年腐心して來たものであり、さきの高等科の統合についても種々論議せられたが、之を要するに各校校舎の狹隘によつて

起る増築の必要と、其れに伴ふ経費の醸出に悩む當事者の救急的措置の一途と見る事が出来る。當局に於ても増設の必要を認めてはゐたが、其の財源に苦んだ。其の結果大正四年十二月大垣町長三原範治は町會議員戸田銳之助を同伴して上京し、戸田伯爵家に對して、學校設置、其の他町發展の施設經營資金として、拾萬圓恩借の陳情書を差出して請願した。

然るに戸田家に於ては大正五年六月其の貸與金に對しては拒絶せられたが、小學校校舍増設に關しては適當の寄附をせらるゝ事となつた。大垣に於ては其の増設に付て、詳細に調査をなして戸田家に書類を提出した。當時の具申に、新に増設すべき學校は南頼又は南寺内とし、之を尋常校に充當し、一方伯爵家よりの寄附の學校は町の中央に設立すべく、隨つて南頼、又は南寺内に設立すべき學校は當時の興文女子尋常高等小學校の校舍をこれに移轉し、新に其の位置に寄附の新校舍を設立すれば、この地はもと藩學校のあつた歴史的由緒深い地であるから最も適當とした。戸田家に於ては、大正六年一月、四萬五千四百四十八圓を寄せられ、初めの計畫通り、町の東南部に敷地を設け、興文女子校の校舍を移築し、更に其の跡に一校舎を新築すべき資金に充てられた。更に其の時注意すべきは戸田家より三原範治宛の寄附採納の書狀の末尾に「新築校舎の名稱は小學校令發布以來連續致居候興文の二字を引續き御用相成度云々」と書せられてある。

然るに當時校名改稱の議はやかましく、終に六年四月一日興文校名を廢したことは前述の如

くである。戸田家に於てもこの點を誠に遺憾とし、「公式通達書中にて特に明記せられたる『興文』の名稱は終に其の希望に反し、未だ増設校の成らざるに先だち既に廢滅せるは假令諸種の事情の存するありたりとするも洵に遺憾に堪へざるところなり」と慨歎せられた。

南尋常小
學校成る

大垣町に於ては北尋常小學校校舎(大正六年四月一日興文女子尋常高等小學校を改稱)を町の東南に移築し、其の敷地に新規に一校を設置することに決したが、物價昂騰により更に壹萬餘圓の増加寄附を仰ぎ、合計五萬五千餘圓となつた。伯爵家の寄附によつて建築せらるる校舎は二校で、新築の北尋常小學校、他に、北尋常小學校校舎を移築せられた南尋常小學校の増設の二校で、建築費は固より所在地敷地買収等一切伯爵家の寄附に係るものである。南尋常小學校建築豫算は壹萬七千八百九拾五圓を計上し、北尋常小學校の新築費は貳萬七千五百五拾參圓を計上したが、前記の増加寄附額では更に不足を來し、又々壹萬五千餘圓の増額を請願して、合計七萬圓の巨額に達した。

かくて南尋常小學校は大正七年十二月十六日工事請負契約が成り、翌八年一月基礎工事に着手して、北尋常小學校の平屋建校舎二百二十七坪餘の移轉、附屬建物の新築を了し、同年四月新學期の授業を開始した。次いで式場に充つべき平屋建校舎一棟及二階建校舎の移轉に着手し、同年十一月十日に至つて全部其の工を竣つた。(位置、南頼小字道上)

敷地 二千四百九十二坪 校舍建坪 四百二十八坪九合

第二編 明治維新後の本校

三〇〇

玄關	四坪五合	平屋建教室	二百二十七坪餘
同	四十九坪五合	二階建教室	五十六坪四合
宿直室及使丁室	三十六坪	兒童用便所	二十五坪
物置	六坪	土間廊下	二十四坪餘

北尋常小學校は大正七年十二月十六日新築工事受負契約をし、翌八年一月以來舊校舍の搬出に次いで、基礎工事を成就し、續いて新築校舎の築造に着手し、同年八月中に本館を始め附屬建物の大體を完成し、九月一日より第二學期の授業を開始した。それより舊興文講社の寄附に係る講堂の新築と残工事の完成に努めて、同年十一月竣工した。

敷地	千八百五十坪	校舎建坪	四百三十一坪五合
二階建教室	二百五十六坪	土間廊下	五十三坪五合
宿直室使丁室	十六坪	兒童用便所	
物置	六坪	平屋建講堂	七十八坪

落成式 斯くて兩校の建築工事完成を告げて、大正八年十一月十六日戸田伯爵の臨場を仰いで兩校の落成式を舉行した。當時伯爵は公務多端のため、式に參列することが出來ず、戸田氏次氏を代理として參列せしめ、祝辭を寄せられた。

興文講社の講堂寄附



講堂の玄關見付一



正面玄關の見付

〔興文講社の講堂寄附〕 既述の明治十四年創立に係る興文學校後援團體興文講社は、其の主旨として興文學校のために永遠に學資の基礎を立てんとするものであり、満期に至る迄毎年二回二百圓宛數度に支出し、又別に基本となるべき金額を蓄積利殖を圖つて興文校のために盡して來たが、明治四十四年學校の經濟共通となつて、其の蓄積の使途に就いて考慮し、興文校に關聯ある事業に醸出の用意をして居たが、偶々大正八年伯爵の寄附によつて新に北尋常小學校(後大垣高等小學校)の新築の時にあたつて、講社は該敷地に工費七千六百圓の豫算を以て桁行十二間、梁六間の講堂を建設することゝなつたが、物價暴騰によつて豫算に不足を生じ、更に願つて伯爵家より壹千參百圓の補填を仰ぎ、更に又郭町御別邸整理の砌、不用の玄關の拂下を願ひ、これを講堂に取付け、永遠に由緒深いこの兩建物を保存せんと努めた。

又大正九年講社は講堂用額面松方侯爵揮毫、絹本「興文偃武」の額面、十年に東郷元帥揮毫、絹本「敬教勸學」

の額面を寄附し、二十一年には伯爵令室極子夫人より講堂内の御眞影奉掲所幌の御寄附を仰いで、講堂は整美せられた。斯く興文講社は陰に陽に絶えず興文校の發展に盡瘁し來つたものであつた。

戸田家の
恩恵と獎
學資金

〔戸田家の恩恵と獎學資金〕 伯爵戸田氏共公は常に思ひを郷土住民に寄せられ、屢々恩眷を加へられた。特に大垣市民が殊恩を被つて居ることは枚擧に遑がない。

今其の二三を摘記すれば、明治十年二月には大垣士族に授産金一萬圓及び町村民に七千圓を給與せられ、同二十年七月洪水には五百圓を出して救恤せられた。

特に人材の養成、教育の上進、郷土の發展を念とせられ、陸海軍將校志願生徒養成、並に養成社の育英事業に年々多額の補助金を給與せられ、既述大正七年大垣小學校二校の新築の七萬圓の寄附、次いで大正十三年工業學校の創設にあつて、特に山緒深い別邸及御烏屋敷を割いて其の資金を給せられたるなど、公の如何に教育に熱心なりしかを伺ふに足るものである。

これより先明治三十六年十一月、公は特に興文校に五十圓を寄せられた事もあり、明治四十四年四月氏彬公夫人大榮院殿長逝せらるゝや、遺産の内大垣町立學校獎學資金として五百圓を贈られ、當局に於ては同年規定を設けて、其の利子金を以て毎年獎學費に充てゝゐた。

大垣町立學校獎學資金規程

- 第一條 戸田伯爵ヨリ寄附ヲ受ケタル故大榮院遺產ノ内金五百圓ハ町立學校獎學資金トシテ管理ス
- 第二條 獎學資金ハ國債證書又ハ適當ナル債券若シクハ郵便貯金ヲ以テ之ヲ保管ス
- 第三條 獎學資金ハ元本ヲ保存シ其利子ヲ以テ毎年町立各學校ヘ當分ノ獎學費ニ充ツ
- 第四條 獎學費ハ學校長ノ具申ニ依リ町長ハ適當ノ物品ニ換ヘ各卒業者ノ内ヘ交附ス
- 第五條 獎學資金利子ノ收文ハ豫算ニ編入スルモノトス

附 則

- 第六條 本規定ハ明治四十一年度ヨリ施行ス
- 明治四十一年七月四日提出決議ス

安八郡大垣町長 三 原 範 治

又大正五年八月二十六日伯爵は戸田氏秀公亡室米子夫人（七月逝去）の遺産の内五千圓を獎學資金として寄附せられ、續いて大正十三年十一月十六日養嗣子亡氏秀公（六月逝去）遺産の中より參千圓を、大正十五年五月十日には御孫亡氏重公（二月逝去）遺産の内より一千圓を獎學資金として寄附せられた。當局は其規定を改め、大正十五年五月左の如く告示した。

大垣市立小學校獎學資金規程

- 第一條 大正五年八月二十六日戸田伯爵家ヨリ戸田氏秀亡妻米子遺產ノ内ヲ以テ寄附ニ係ル金五千圓十三

第二編 明治維新後の本校

年十一月十六日同家ヨリ養嗣子亡氏秀遺産ノ内ヲ以テ寄附ニ係ル金參千圓並ニ大正十五年五月十日同家ヨリ孫亡氏重遺産ノ内ヲ以テ寄附ニ係ル金壹千圓ハ市立小學校獎學資金ノ元本トシ本規程ニヨリ管理ス

第二條 獎學資金ノ元本ハ永久保存シ其ノ利子ヲ以テ左ノ費途ニ充ツルモノトス

- 一、卒業若ハ各學年修業者中品行方正學力優等ノ兒童ニ對スル賞與
 - 一、在籍兒童ノ出席精勤賞及體育獎勵ノタメ優等兒童ニ對スル賞與
- 前項獎學費ヲ支辨シ尙殘餘ヲ生ジタル場合ハ之ヲ元本ニ加入シ又ハ左ノ費用ニ充ツルモノトス
- 一、貧困兒童就學獎勵費
 - 二、學力優等ニシテ中學校若クハ商業學校ニ入學シ貧困ニシテ學費ヲ支辨シ難キモノニ對スル助費

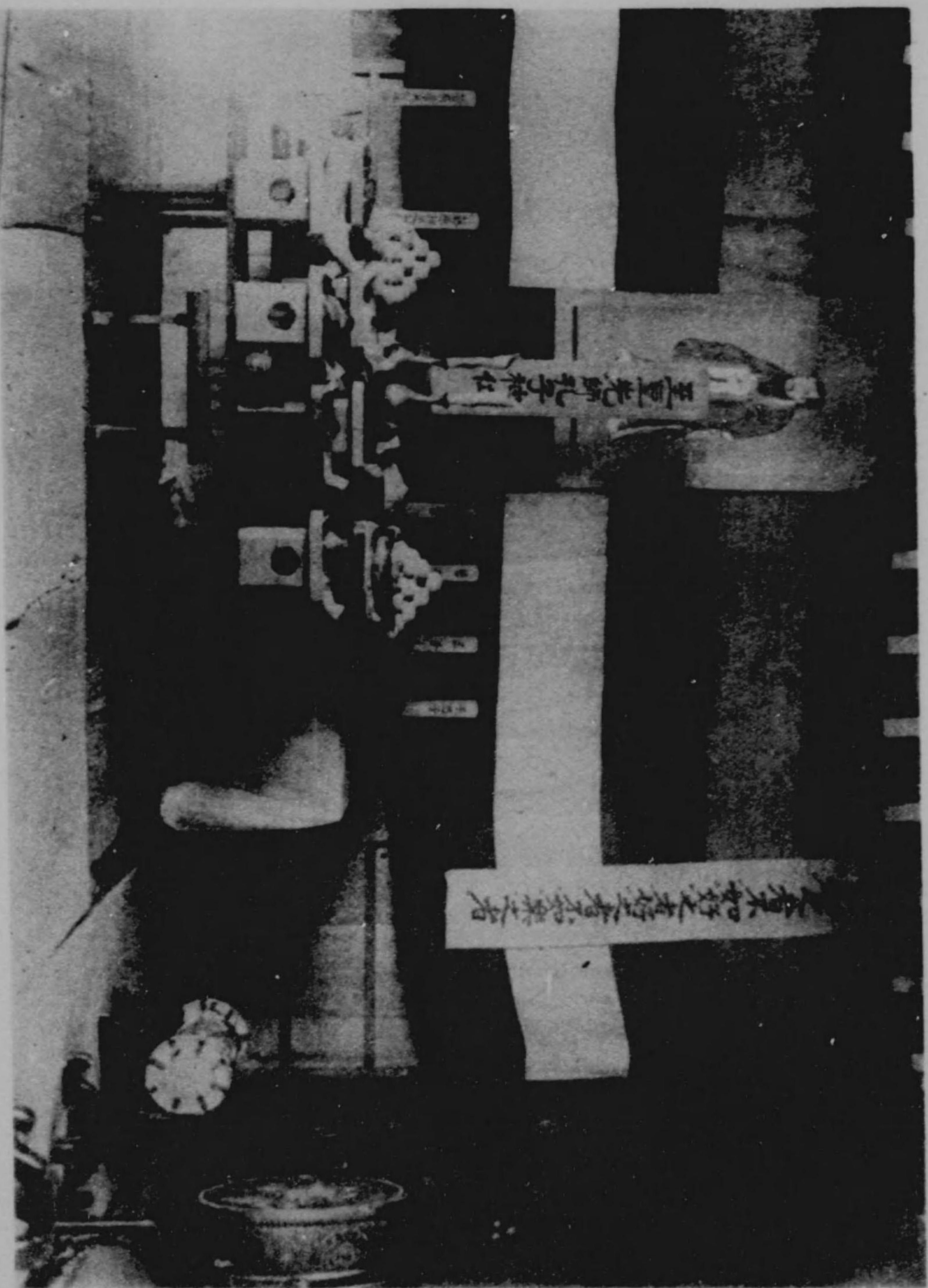
第三條 獎學資金ノ收支精算ノ要領ハ毎翌年度ニ於テ之ヲ市内ニ告スベシ

附 則

大正七年四月大垣町ヨリ引繼ヲ受ケタル元大垣町立小學校獎學資金ハ本規程施行ニヨリ本市立小學校獎學資金ニ編入ス。

大垣高等小學校の新設と大垣尋常小學校の
大垣高等小學校の新設と大垣尋常小學校の

〔大垣高等小學校の新設と大垣尋常小學校〕 大正八年の南尋常小學校の移轉新築と、北尋常小學校の廢止及び大垣高等小學校の新設は大垣小學校の大變革であつた。北尋常小學校兒童の委託による各校の變動も、又翌學年に跨るとは云へ止むを得ざる事で、大垣尋常高等小學



(大正九年)

獎

釋

校にあつても二月一日より三月末日まで北尋常小學校兒童一部を收容し、ために高等科兒童第一學年三學級を西尋常小學校に委託する等の事も起つた。間もなく四月三十日南尋常小學校の移轉改築と共に、北尋常小學校は廢止せられ、同校跡に建築の新校は大垣高等小學校と稱せられ、五月一日より大垣尋常高等小學校より高等科を獨立せしめて、九月一日より新築校舎に移轉し、隨つて大垣尋常高等小學校は大垣尋常小學校となつた。大垣高等小學校には上田清校長となり、大垣尋常小學校は桐山良材校長であつたが、同年七月竹井正己同校校長を拜命した。

通學區域
變更

この變革によつて、學區に於ても變動を生じ、八年四月本校校下は郭・袋・外側・馬場・新馬場・西代官・切石・西長・鷹匠・牛屋・番組・鳥見・鳩部屋・室・弓・桐ヶ崎・栗屋・西水主・西船・東船ノ一部・西崎・室村・見取とせられた。

大垣實科
女學校の
設立

〔大垣實科女學校の設立〕 大垣市長三原範治は、大正九年女子のために主として家政に直接必要なる知識技能を授くる目的を以て大垣に私立學校を設立する計畫を立て、大垣市に於ても相當の援助のもとに其の認可を縣に願ひ出で、四月に至つて其の許可を得るに至つた。開校して大垣實科女學校と稱した。校舎として大垣高等小學校校舎二階四教室を借用して授業を行ふ事になつた。この學校は十年八月大垣市立とし、設置認可を得、大垣裁縫女學校、同十三年大垣市立高等女學校と改稱して、位置を大垣市藤江町に定められた。校舎は十四年に着

工し、十五年九月竣工、それに移轉するまで七年間の長年月に亘つて、この校舎に於て授業を行はしめたものであつた。

學校一覽

〔學校一覽〕 大垣尋常小學校 (大正八年)

校下町村區名	郭・袋・外側・馬場・新馬場・西代官・切石・西長・鷹匠・牛屋・番組・鳥見・鳩部屋・室・弓・桐ヶ崎・栗屋・西水主・西船・東船ノ一部・西崎・室村・見取						
校下戸數	五千四百六十三戸 (大垣市全體)						
校下人口	三萬二千二百二十五人						
修業年限	尋常科 六箇年						
學級數	十七學級						
生徒數	尋常科	一年	百八十四人	二年	百八十八人	三年	百七十二人
		四年	百七十五人	五年	百六十六人	六年	百四十六人
校舍校地	教室 二十一 (四百五十五坪) 屋外體操場 二 (一千三百坪) 其他 十六 (七十九坪三合)						
學校經費	經常費 三萬二千二百五十二圓 臨時費 四千圓						
學校長	桐山良村						

職員

竹井正巳	竹中 薫	說田武雄	清水賢三	鈴木喜一
堀 領助	日比野 廣	安部 鼎	清水ふじゑ	小寺 禮
河合しげ	桐山義一	松野義隆	武山さと	河村道之助
小山繁尾	服部まさ尾			

大垣尋常小學校 (大正九年)

校下町區名	前年度に同じ						
校下戸數	五千五百三十六戸 (大垣市全體)						
校下人口	三萬二千四百七十八人						
修業年限	尋常科 六箇年						
學級數	十八學級						
生徒數	尋常科	一年	二百十人	二年	百七十九人	三年	百九十九人
		四年	百七十五人	五年	百七十二人	六年	百五十九人
校舍校地	前年度に同じ						
學校經費	經常費 四萬二千六百八十四圓 臨時費 二萬二千三百六圓						
學校長	竹中 薫						
職員	說田武雄 鈴木喜一 堀 領助 奥田眞一 呆 廣						

小川 傳造 安部 鼎 倉橋賢次郎 渡邊ふじゑ 桐山義一
 小山 繁尾 武山さと 服部まさ尾 中村 留子 伊奈千幹
 月岡峯之助 岡田瀧之助

大垣尋常小學校(大正十年)

校下町區名 前年度に同じ
 校下戸數 五千八百二十二戸 (大垣市全體)
 校下人口 二萬八千五百二十五人
 修業年限 尋常科六箇年
 學級數 十八學級
 生徒數 尋常科 一年 二百三人 二年 二百九人 三年 百八十八人
 四年 百九十五人 五年 百八十五人 六年 百六十人
 前年度に同じ
 校舎校地 經常費 七萬二千三百六十八圓 臨時費 二萬二千三百四十三圓 (大垣市全體)
 學校經費 竹中 薰
 學 校 長 說田 武雄 鈴木喜一 堀 領助 奥田眞一 呆 廣
 職 員 小川 傳造 西田 正雄 安部 鼎 奥田 正男 桐山 義一

大垣尋常小學校(大正十一年)

校下町區名

(一部變更)

渡邊ふじゑ 馬淵敏男 伊奈千幹 小山繁尾 武田さと
 服部まさ尾 中村留子 加賀久吉

郭・袋・外側・新馬場・西代官・切石町・西長・鷹匠・牛屋・番組・鳥見・鳩部屋
 室・弓・桐ヶ崎・栗屋・西水主・西船・西崎・室村・見取

五千八百九十二戸 (大垣市全體)

二萬九千五十一人

尋常科六箇年

十八學級

尋常科 一年 百七十二人 二年 百八十三人 三年 二百八十八人

四年 百九十二人 五年 二百一十一人 六年 百六十四人

前年度に同じ

經常費 七萬四千七百二十八圓 臨時費 四萬七千三百四十九圓

竹中 薰

職 員 說田 武雄 鈴木喜一 堀 領助 呆 廣 奥田眞一

小川 傳造 西田 正雄 安部 鼎 桐山 義一 渡邊 ふじゑ
 馬淵 敏雄 伊奈 千幹 武山 さと 中村 留子 加賀 久吉
 安藤 佳一 中井 一枝 溝口 鈴

大垣尋常小學校 (大正十二年)

校下町區名	前年度に同じ
校下戸數	六千六百六十三戸 (大垣市全體)
校下人口	三萬九十二人
修業年限	尋常科 六箇年
學級數	十八學級
生徒數	尋常科 一年 二百三人 二年 百六十四人 三年 百七十六人 四年 二百十人 五年 二百人 六年 百九十人
校舍校地	前年度に同じ
學校經費	經常費 七萬七千八百九十六圓 臨時費 一萬四千四百三圓
學 校 長	大野 富之助
職 員	說田 武雄 鈴木 喜一 堀 領助 呆 廣 奥田 眞一 西田 正雄 安部 鼎 奥田 壽一 渡邊 ふじゑ 伊奈 千幹

大垣高等小學校 (大正八年)

武山 さと 中村 留子 今村 福尼 伊藤 久吉 安藤 佳一
 山田 正夫 谷 幸子 溝口 鈴

校下町區名 大垣 全市

校下戸數、校下人口、學校經費

同年度の大垣尋常校に同じ (前項参照)

修業年限	高等科 二箇年
學級數	七學級
生徒數	高等科 一年 二百四十九人 二年 一百四十三人
校長	上田 清
職員	松岡 休作 廣瀬 常藏 上橋 文海 金森 源吾 志知 幸 桐山 通二 可兒 良行 五島 よう

第五節 大垣市中尋常高等小學校

校名改稱と高等科併置

〔校名改稱と高等科併置〕 大正十三年頃本市に於ける尋常小學校は、大垣尋常・東尋常・西尋常・南尋常の四校であつた。然るに近年に於ける大垣市の人口は連年累加し、特に本市北

部の發展は目醒ましく、大日本紡績・東京毛織兩會社の分工場の設置せられて以來、それを通學區域に持つ大垣尋常・東尋常の入學兒童は激増し、校舍は狹隘となり、兩校孰れも十八學級を擁するに至つた。市民側に於ても是非鐵道以北に一校を設置されん事を要望し、當局に於ても其の設置によつて大垣尋常・東尋常の入學増加を緩和せんとするに至つた。偶々大垣市の北部安八郡北杭瀬村の大垣市合併問題も起り、尙々北部に一校増設の必要を感じるに至つた。

又一方十三年には大垣高等小學校内の女學校も藤江町に移轉改築せられる事に決せらるゝ、狀勢に立ち至つた。市當局は此の際大變革を行はんとし、其一に本市北部に北尋常小學校を新設し、合併による北杭瀬村兒童の收容、及び大垣尋常・東尋常の兒童の一部を之に收容する事とし、其の二には大垣高等小學校は廢校として、大垣尋常外三校を高等科併置校とし、其の三には大垣尋常小學校の位置を大垣高等小學校の地に移し、腐朽せる大垣尋常小學校校舍は割合新しい高等小學校校舍とし、校名も中尋常高等小學校とする計畫を立て、縣にも認可を申請し、幸に許可せられる事となつた。時に大正十三年三月であつた。然るに其の後北杭瀬村合併問題は荏苒日を重ねるも決せられず、随つてこれに關聯する北小學校設置は大正十四年全く廢止せられ、又大垣尋常移轉問題も止み、北尋常小學校の設置を見ざれば、校地益々狹隘となるを以て、速に變更せられて元通り外側町の位置に置かれる事に決した。

大垣中尋常高等小學校

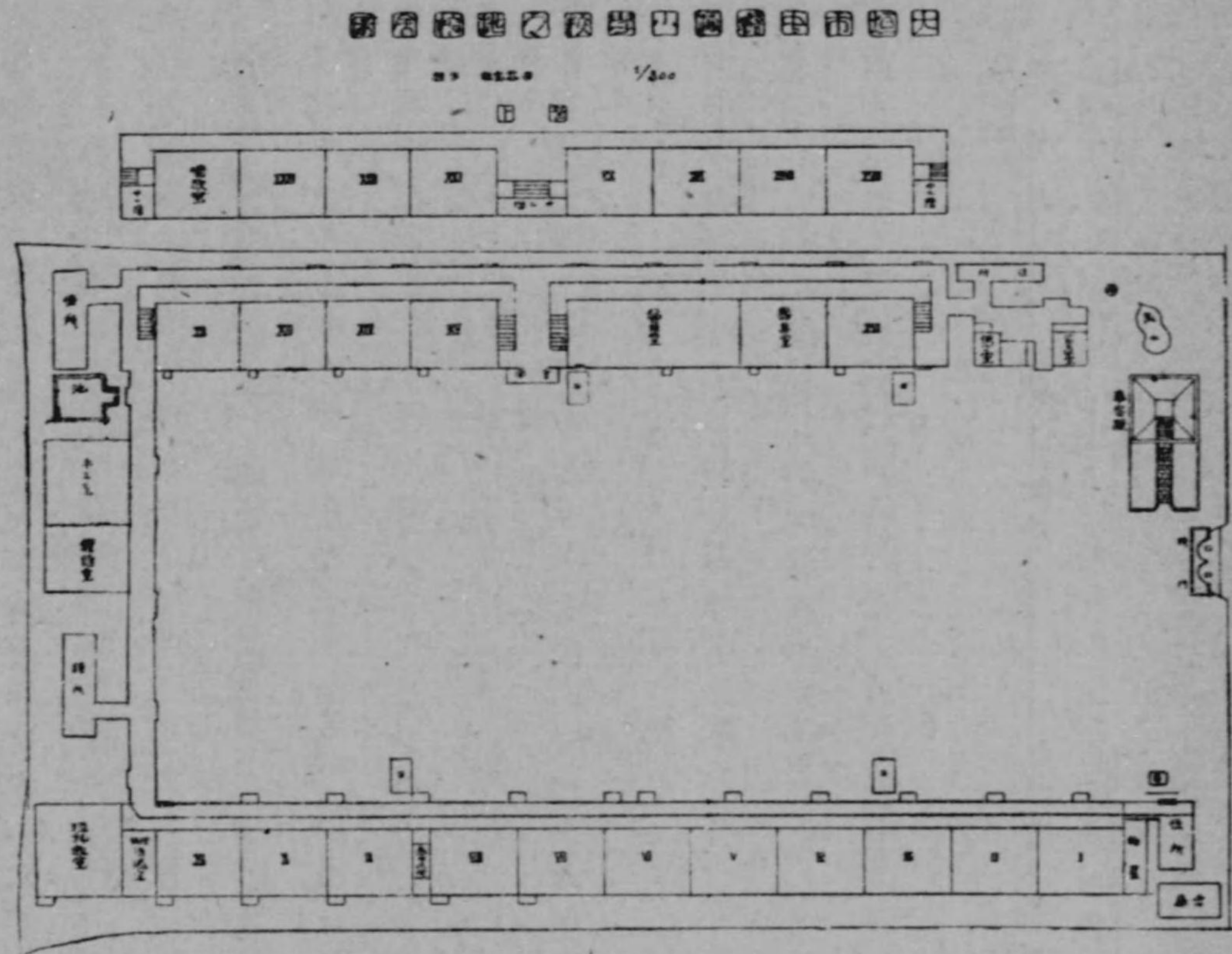
これを要するに大正十三年の變革に際して、全年四月より大垣高等小學校は廢校となり、従来の四尋常小學校には高等科が併置せられ、大垣尋常小學校は大垣中尋常高等小學校と改稱せられるに至つたのであつた。

校舎の増築

〔校舎の増築〕 前述の如く大正十三年大垣市北部に一校増設の議は止み、随つて中尋常高等小學校の改革も中止の止むなきに至り、校舎は従来の設備を襲用して何等の擴張も施さず、高等科を併置するに至つた事は、従前も既に校舎の狹隘に苦しんで居たが、實に其の苦痛を倍加せしめた。加ふるに現在校舎は設立以來相當の長年月を経過して、腐朽甚だしく、到底使用に堪へるものではなく、中校の増改築は焦眉の問題とにつた。偶々大正十五年大垣市立高等女學校は藤江町に移轉し、其の校舎の設立も新しく（大正六年戸田家寄附）これを中小學校の位置に移轉改築が最も劉切なる事と考へ、大正十五年十一月縣の認可を得、工事に着手した。一方中小學校に於ては其の移轉によつて既存の校舎に付いても、敷地變更、設備變更等の大變革は相當煩鎖を極めた。中小學校の現在設備としては（大正五年の校舎平面圖參照）

現在設備

- 一、平家建 一棟 教室、四 梁間四間半・桁行二十二間 九十九坪
- 明治三十六年十月建築
- 二、平家建 一棟 教室、八 梁間五間半・桁行四十間 二百二十坪



- 三、二階建 一棟 事務室 宿直應接室 理科標本室 梁間五間・桁行十二間 六十坪
明治三十六年十月建築
- 四、平家建 一棟 教室 五
梁間五間半・桁行二十五間 百三十七坪
五合 大正五年七月建築
- 五、平家建 一棟 理科室 一、唱歌室 一
梁間五間・桁行九間 四十五坪
大正五年七月建築
- 六、平家建 一棟 小使室 一
梁間四間・桁行四間 十六坪
- 七、平家建 三棟 便所三ヶ所
梁間二間・桁行五間 十坪宛
明治三十六年十月建築
- 八、平家建 一棟 便所一ヶ所
梁間二間・桁行二間 十坪
大正五年七月建築

増改築

- 九、平家建 一棟 便所一ヶ所 梁間一間・桁行二間 二坪
明治三十六年十月建築

移轉増改築設置

- 一、二階建 一棟 教室十二、唱歌室一、事務室一、器具室一
階下 梁間六間・桁行四十八間 二百八十八坪
階上 梁間五間・桁行四十八間 二百四十坪
- 二、平家建 一棟 教室三、理科室一、準備室一
梁間五間半・桁行二十三間 百二十六坪五合
- 三、平家建 一棟 裁縫室一、豫備室一
梁間五間・桁行九間 四十五坪

新築

- 一、平家建 一棟 宿直室一、小使室一
梁間三間半・桁行六間半 二十三坪五合
- 二、平家建 二棟 便所二ヶ所 梁間二間・桁行五間半 十一坪宛
- 三、平家建 一棟 便所一ヶ所 梁間一間・桁行五間 五坪八合三三
- 三、梁間一間・桁行二間 二坪宛 渡廊下二ヶ所

- 四、梁間一四半・桁行二十五間半 三十八坪二五 渡廊下一ヶ所
- 五、梁間一間・桁行二間 二坪 渡廊下一ヶ所
- 六、梁間一間・梁行延三間八分 三坪八合 渡廊下一ヶ所

この校舎の大改築にあつて、其の工費三萬一千九百五十餘圓を要し、中でも元高等小學校二階建校舎の移轉改築費一萬三千一百四十餘圓が最たるものであつた。この二階建校舎は中校北舎の二棟の平家建校舎（現在設備の項の四、七内、四は移轉改築、七は廢止）を毀ち、其の位置に移して補強工事其の他教室改造を行つた。現存する中舎がそれであり、普通教室十二、唱歌室一、事務室一、器具室一であつた。

次に大正五年の圖に見る如く運動場は從來二つに區分せられてゐたが、其の境をなしてゐた校舎（現在設備の項の三、五）を取り除いて運動場を一にし、其の位置に在つた二階建校舎は廢し、平家建校舎のみを新運動場の西方に移築し、改造して裁縫室・豫備室とし、東面して位置した。

又前項現在設備中の四の平家建一棟は南舎の西に北面して移築改造し、普通教室三と理科室、同準備室に充てられた。

斯くして教室は略々整備し、二十二學級に對して普通教室二十三となり、他に特別教室をも有する事となつた。

この増改築に伴つて新に小使室・宿直室も移轉せる二階建校舎の東端に建設せられ、校舎を繋ぐ渡廊下の増築、便所の増築、運動場地上、深井戸の掘鑿、排水溝の設備等も行はれ、こゝに中小學校は全く面目を一新し、昭和二年三月其の竣工を見るに至つた。工事中校舎の改廢によつて、十五年九月一時高等科兒童を西小學校に委託せられてゐたが、其の工竣るに及んで本校に復歸せしめらるゝ事となつた。

又元高等小學校にあつた講堂は藤江町の大垣高等女學校に移築せられた。

奉安殿の建設

〔奉安殿の建設〕 大垣市内四小學校に於ては未だ御眞影奉安殿の設備なく、識者の内には其れが設置の論やかましく、竟に十五年臨時費として設備費四校合せて三千二百圓（一校宛八百圓）を計上し、各校其の建築に着手した。然るに上記の豫算にては到底建設する事も出来ず、且つ奉安殿附近の風致計畫もあつて、竟にその建設不足額三百圓と他に學級文庫設置の目的のために校下に寄附金を募集する事となつた。寄附金合計六百三圓五十錢を得て、其の建造を見るに至つた。建設地を特に清淨の地、校門内右手、南面鐵筋コンクリート造りとし、前面は堅牢なる鐵扉を以て固く閉し、特に金色菊花御紋章描出の許可を得て之を配し、附近に植樹して風致の美を添へ、莊麗なる奉安殿を造營し奉つた、大正十五年十二月全く工竣り、こゝに御眞影、及び勅語謄本を安置し奉ることゝなつた。

藩校の地

〔藩校の地〕 天保九年始めて外側町に藩校創設せられて以來、大正十五年に至る八十餘年間、

この龍の口門外には常に校舎聳立し、大垣文教の中樞となつて居たが、大正十五年に至つて、全く校舎は廢止せられ、其の跡を絶つたものであつた。惟ふに八十餘年の長き歲月の間、日に目醒しき發展を遂げ、校地校舎の擴張、教育内容の充實等不斷の努力は光輝ある傳統の歴史と共に、永く天下の教育を指導し來つたものであつた。

幾多變遷を重ね來つて明治四年に至る三十餘年の藩學校時代を過ぎ、郷學校の設立を見、續いて明治六年より大正六年に至る四十餘年の輝かしい興文學校の歴史もこの地に起り、次いで北尋常小學校、大垣高等小學校の名稱を最後として、廢校となり、校舎も全く其の地を拂つて、大正十五年大垣中小學校に移築せられたのは既述の如くである。斯く吾人は興亡の跡を考へる時、實に感慨無量、低徊して其の地を去る能はざるものがある。

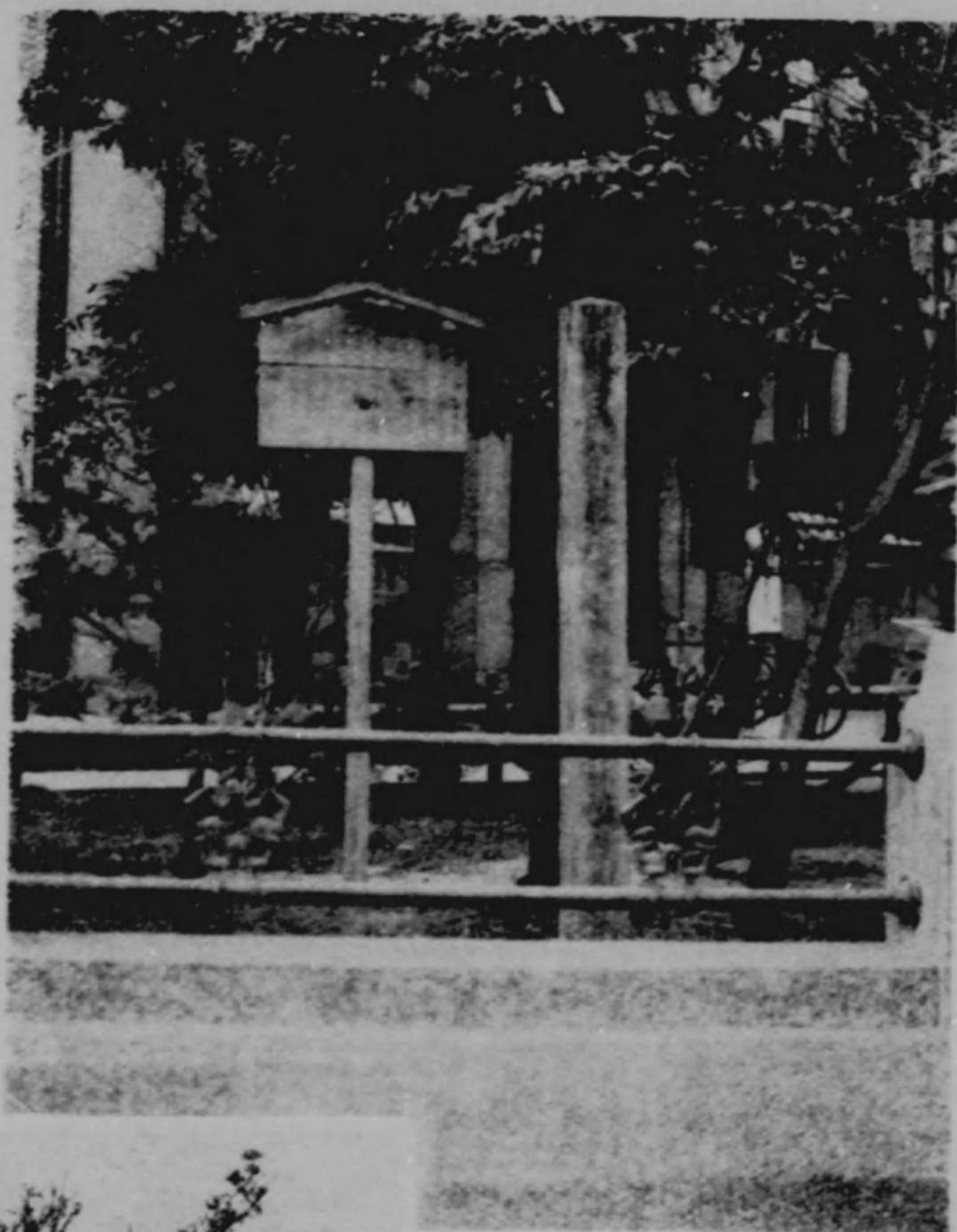
今や街上に残るくとねりこ、獨り淋しく秋風にさらされて、昔藩校の面目を僅かに留めてゐるのも限りない哀愁の思を喚起せしめてゐる。藩校以來の敷地一部には昭和三年大垣市立圖書館の壯大なる建物が建てられ、他は石井駒次郎氏邸の敷地及道路となつて、現在に及んでゐる。

大正天皇の大喪

〔大正天皇の大喪〕 大正十五年十二月二十五日、天皇陛下崩御あらせられた。

畏くも天皇陛下は大統を紹ぎて帝祚を踐ませられて以來、明治天皇の御偉業のみあとをうけさせられて、萬機の政を總攬し給ひ、その御聖徳は八千萬國民の齊しく仰ぎまつる所であ

藩校を偲ぶ



史蹟
敬教室跡



とねりこの老樹

つたが、御代半にして御不豫や、重らせ給へるを以て、皇太子殿下攝政とならせられた。陛下の赤子は恐懼憂慮措くところを知らず、再び御親政の日の一日も速かならん事を祈り奉つた。

然るに陛下には頃日輕微の御風氣より御發病あらせられ、やがて大漸にわたらせ給ふと漏れ承つて、本校職員兒童一同恐懼措く能はず、天地神明に懇禱して、ひたすら御平癒を祈願し奉つた。皇室の百方缺くる所もなき御手當も空しく、國民の赤誠を捧げたる祈念も徒らに、遂に陛下崩御の公表を拜承した時は、たゞ恐懼哀悼、茫然としてなす所を知らなかつた。天に慟し地に哭し、日月もためにその光を失ひ、乾坤ために闇く、世は深く哀愁の一色に覆ひ閉された。

本校に於ては十二月二十五日直ちに兒童を召集し、大野校長より訓話をなし、翌二十六日奉悼式を舉行した。

昭和二年二月七日、大正天皇神去りましてより四十五日の光陰も流れて、今日しも御名残つきぬ永遠の御幸を送り参らす日となつた。本校に於ては謹みて哀悼の意を表して、七八兩日を臨時休業とし、七日職員兒童一同遙拜式を舉行した。

〔御眞影奉戴〕 昭和三年長き邊りに於かせられては、全國各學校に 今上天皇、皇后兩陛下の御眞影御下賜の旨を仰せ出され、岐阜縣に於ては十月三日より八日に至る五日間、縣廳正

戴御眞影奉